

中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係：
瀘州、宜賓、茅台を主な事例として

2016年 3月

曾 天然

中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係：
瀘州、宜賓、茅台を主な事例として

曾 天然

システム情報工学研究科
筑波大学

2016年 3月

目次

第1章 序論

- 1.1 中国の産業の近代化の歩みと白酒醸造業を選ぶ理由
- 1.2 中国の白酒醸造業の概況と対象地選択
- 1.3 先行研究
- 1.4 研究方法と目的

第2章 瀘州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

- 2.1 対象地の都市の概要と酒造業の特徴
- 2.2 市場経済萌芽期(-1949年)の瀘州市の白酒醸造業と都市
- 2.3 計画経済時期(1949-1980年)の瀘州市の白酒醸造業と都市
- 2.4 市場経済時期(1980-現在)の瀘州市の白酒醸造業と都市
 - 2.4.1 市場経済過渡期(1980-1994年)
 - 2.4.2 市場経済適応期(1994-2006)
 - 2.4.3 市場経済進展期(2006年-現在)
- 2.5 瀘州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

第3章 宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

- 3.1 対象地の都市の概要と酒造業の特徴
- 3.2 市場経済萌芽期(-1949年)宜賓市の白酒醸造業と都市
- 3.3 計画経済時期(1949-1980年)の宜賓市の白酒醸造業と都市
- 3.4 市場経済時期(1980-現在)の宜賓市の白酒醸造業と都市
 - 3.4.1 市場経済過渡期(1980-1992年)
 - 3.4.2 市場経済適応期(1992-1998年)
 - 3.4.3 市場経済進展期(1998年-現在)
- 3.5 宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

第4章 茅台鎮における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

- 4.1 対象地の都市の概要と酒造業の特徴
- 4.2 前近代と計画経済時期(-1980年)の茅台鎮の酒造業
- 4.3 市場経済時期(1980-現在)の茅台鎮の酒造業の変化と都市形成
- 4.4 茅台鎮における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

第5章 中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

- 5.1 中国白酒醸造業の近代化と都市形成の流れ
- 5.2 中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係
- 5.3 中国の特色のある企業都市

補章1 山東省青島市のビール醸造業と都市の関係

補章2 浙江省紹興市の黄酒(紹興酒)醸造業と都市の関係

補章3 その他の白酒醸造業の企業と所在地都市の関係

第1章 序論

1.1 中国の産業の近現代化の歩みと白酒醸造業を選ぶ理由

中国は近年、極めて早いスピードで都市化プロセスを歩んでいる。国連の「世界都市化展望 2009 年修正報告」によると、1980 年頃からの中国の都市化成長スピードは世界で最も早いという。都市化を促す原動力は工業化であり、中国の都市形成を紐解くためには、「企業」と「都市」の関係を解明することがとても重要であろう。

中国において企業の成長などは経済システムや国の政策などに大きく影響されている。1860、70 年から民族資本主義が芽ばえはじめ、戦争などの中、中華民国の中後期までは苦しみながらも確実に発展していた。それから 1949 年に中華人民共和国が成立したが、建国直前では内戦などの影響で、社会、経済が極めて不安定であり、殆どの産業が破滅寸前の状態にまでなってしまった。その状況下で計画経済が実施され、一定規模のある産業が国有化されることが多かった。しかしこの時期の経済システムは色々欠陥があり、加えて文化大革命などの影響も大きく、産業の発展がかなり緩慢であった。1980 年頃から改革開放政策が実施され、経済システムも徐々に市場経済へと変化していく。産業発展の恩恵を受け、都市建設も加速している。この時期でも都市と産業に関して国が幾つかの重大な政策を発表・実施している。主な政策としては 90 年代からの国有会社の経営制度改革と上場させる政策、2000 年頃からの「三農問題」(新農村など)に関する政策、5 年ごとに制定される産業部門バランス調整計画、そして近年になってよく見られる産業クラスターと特色のある産業集中発展エリアの発展戦略などがある。

そんな大まかな社会状況の中で、中国は建国初期から国の基礎を建設するために多くの工業都市が開発され、現在に至っては実力のある企業も多数存在しているが、日本のような「企業都市」、または「企業城下町」の概念は未だに普及していない。その原因は上で述べたように中国において多くの大会社が国有会社であり、自治体と企業の関係性が複雑であるからと考えられる。

また中国は改革開放から既に 30 年以上経ち、中国の経済と都市化は高度成長からブレーキをかけつつある段階に入ったが、中国の都市形成や産業近代化に関する通説は殆ど提出されず、両者の関係性を検討した研究も少ない。この段階でこれをテーマとした研究は大きな意義を持つと考えられる。

本論文はあえて白酒醸造業の都市というやや特殊な対象に焦点を当てるのには以下の理由がある。

一、白酒醸造業は前近代から中国において規模の大きかった伝統産業であり、都市と

の関わりは長くて深い。前近代からある程度の規模があった産業を選ぶことで、先ほど述べた経済システムや国の政策の変化がどのように産業へ、そしてまた、都市へと実体化されたかを見られる。

二、白酒醸造業が使う原料や水など生産のために必要とする資源の多くは現地のものを使い続けてきたことから、産業が近代化していく過程の中で、こういった資源の調達手段や方法の変化を見られる。

三、現在の大きな酒造会社の多くは国有会社であり、中国の国と地方政府と国有の企業が都市建設などにおいてどういった関わりを持っていたかを見られる。

四、白酒醸造業の都市は生産だけではなく、中国の重要な社会的文化の一つである「酒文化」の発信地の役割もあり、変化していく社会の中で都市がどんな風にその文化を発信しているのかを見られる。

以上のことから白酒醸造業の都市は中国において、「産業近代化」と「都市形成」の関係を探るのに恰好の題材であろう。

そしてこのような大きな伝統産業の近代化とその産地の都市形成を解き明かし、「産業近代化」と「都市形成」の関係性を分析することで、中国の特色のある「企業都市」（「企業城下町」）に対する認識が深まると考えられる。

1.2 中国の白酒醸造業の概況と対象地選択

白酒醸造業は名前の通り、中国特有の蒸留酒、「白酒」を醸造する産業である。白酒とは澱粉を含む作物を原料に、微生物を用いて発酵させ、微生物が発酵過程で生成した多種類の香り成分を含んでいる蒸留酒のことであり^{注1-1)}、世界八大蒸留酒の一つでもある。白酒は日本ではまだそれほど名前が知られていないが、中国では日常の飲み物としては勿論、社交の場合の飲み物として、結婚や祭事などでの飲み物としても重要な役割を果たしている。

中国白酒醸造業は酒造業の中で一番規模の大きい産業であり、企業数は2014年の時点で1万社を超えていて、(一定)「規模以上」^{注1-2)}の企業数は計1,423社、そのうち株式会社は計13社である^{注1-3)}。中国の酒造業の第二大産業、日本と同じく人々に馴染み深いビール産業の「規模以上」企業数は477社であり^{注1-4)}、白酒の規模以上企業数の約1/3しかないことから中国での白酒産業の規模を覗うことができる。

表 1-1 中国の十大銘酒(白酒)ブランドと所在地一覧表^{注1-5)}

順位	企業名	元の工房/企業設立年	企業所在地	所在地人口 2014年 (万人)
1	五糧液	明初(1368-)	四川省宜賓市	市(轄)区 89(宜賓市 446)
2	茅台	明末清初(1627-)	貴州省遵義市仁懷市茅台鎮	茅台鎮 4.2(仁懷市 60)
3	瀘州老窖	明代(1573)	四川省瀘州市	市(轄)区 101(瀘州市 422)
4	洋河大曲	1949	江蘇省宿遷市洋河鎮	洋河鎮 3.1(宿遷市 555)
5	郎酒	1903	四川古蔺県二郎鎮	二郎鎮 3.1(古蔺県 85)
6	劍南春	清代(1636-)	四川省綿竹市	中心城区 5(綿竹市 51)
7	汾酒	1993	山西省汾陽市杏花村	杏花村 鎮 4.8(汾陽市 41)
8	水井坊	1993	四川省成都市綿江區水井街	綿江區 61(成都市 1417)
9	西鳳酒	1956	陝西省鳳翔県柳林鎮	柳林鎮 3.2(鳳翔県 52)
10	古井貢酒	1959	安徽省亳州市古井鎮	古井鎮 8.2(亳州市 610)

本研究の主な対象地についてだが、表 1-1 の白酒十大ブランドランキング上位 1 位から 3 位である、「四川省宜賓五糧液グループ株式会社」(以下、「五糧液会社」)の所在地である四川省宜賓市、貴州茅台株式会社(以下「茅台会社」)の所在地である貴州省仁懷市茅台鎮、及び瀘州老窖グループ株式会社(以下、「老窖会



図 1-1 中国の十大銘酒産地一覧図

社」)の所在地である四川省瀘州市を主な対象地とする。対象地の選定理由は主に以下である。

一、対象地の三つの都市の中にある企業は表 1-1 のランキングの上位 1-3 位であり、企業規模、生産量などから判断して白酒業界の中でとりわけ実力のある企業で、白酒醸造業の特徴がよく体现していると考えられる。

二、対象地の三つの都市の中にある企業は前近代の酒造工房から大企業へと拡大したものであり、拡大していく過程が都市にどのような影響を与えたかを見られる。

三、対象地の三つの都市の中にある企業は現在市内で大規模な工業施設を持っていて、また地方政府もそれに併せて色んな対応と整備を行っていて、企業と地方政府の関係を見られる。

四、瀘州と宜賓の二つの都市は表 1 にある他の都市と比べて比較的大規模な地方都市に発展し、人口も多い。茅台鎮については都市規模が小さいが、そのためむしろ企業に対して与えたが大きいと予測され、瀘州・宜賓と良い比較対象になると考えられる。

また対象地に選ばれた三つの都市について、会社の産業規模や資本規模などと都市の経済、人口などに違いがあり、その違いによって会社と都市の各方面の繋がり、いわゆる「関係性」の強度に相違が生じていると考えられる。具体的な分析は 2 から 4 章で行うが、対象地の性格を理解するためにまずは三つの対象地の会社と都市の関係性の強度について概観しておこう。

表 1-2 対象地の酒造会社と都市の関係性強度の評価データ一覧表^{註 1-6)}

都市名	瀘州市	宜賓市	茅台鎮
会社名	老窖会社	五粮液会社	茅台会社
会社の資産総額(億元)	131. 71	464. 09	658. 73
会社営業収益と都市の GDP との割合(億元)	53. 53/1, 259. 73 ≒4. 25%	210. 11/ 1, 443. 81 ≒14. 55%	315. 74 /350. 00 ≒90. 21%
会社従業員数と都市の市区人口との割合(万人)	0. 19 / 101 ≒0. 19%	2. 63 /89 ≒2. 96%	1. 68/4. 2 ≒40%
社有地と都市の主な市街地の面積との割合(万㎡)	312. 26/ 3, 523. 45 ≒8. 86%	1, 004. 67 /3, 419. 79 ≒29. 38%	265. 60/365. 25 ≒72. 72%
会社と都市の関係性強度の評価	軽度	中度	重度

表 1-2 で示した通り、本論文で導入した企業と都市のデータを「割合」で示した指標の中で、瀘州においては各「割合」のデータは最も低く、茅台においては各「割合」のデータが最も高い。そしてその割合も 90%や 72%などかなり極端な数字になっ

ていることがわかる。これらデータを参考にし、後文の分析の為に、老窖会社と瀘州市の関係性強度を「軽度」と、五粮液会社と宜賓市を「中度」、茅台会社と茅台鎮を「重度」と評価する。

この酒造会社と都市の関係性強度の違いにより、それぞれ異なる都市構造が形成されている可能性があるという仮説を立てることができる。

1.3 先行研究

先行研究については、中国での産業と都市形成との関係を見ようとした研究は人気のある分野でもなく、著書・論文の数も多くはない。一部挙げるとすると、朱俊逸の「工業空間分布変化が都市空間形態に与えた影響」¹⁾や韓朝の「包頭市都市土地利用の研究」²⁾などがある。しかしこれらの研究の多くは重工業都市や新興工業都市を対象としたもので、伝統産業についてのものは少ない。

そして中国の白酒醸造業の概要と空間分布の特徴を述べたものとして楊柳はの「産業空間クラスターと区域経済の発展：白酒産業の分析」⁴⁾が挙げられる程度である。日本では中野茂夫の「企業城下町の都市計画—野田・倉敷・日立の企業戦略」³⁾があり、同書で取り上げられている野田は同じく醸造業が発達している街であるが、国と業種の違いにより、本稿で取り上げる3つの都市とは多くの相違がある。

瀘州については概説として『瀘州市志』が上梓されているほか、老窖会社の企業文化センターの楊辰が『吟味できる歴史』⁶⁾で会社の歴史や瀘州市の酒文化などについて取り上げた。また、瀘州市国有資産委員会元副主任・龔萍が「瀘州老窖集中発展区域建設の経験と発展パターンについての議論」¹⁰⁾で瀘州市酒造業集中発展区域についての建設背景、経験などを説明している。宜賓については街区変化が大まかに記載された『宜賓街区図志』¹³⁾や五粮液会社が出した『五粮液志』¹⁴⁾以外に、『宜賓酒文化史』¹⁵⁾などがある。茅台については茅台会社が出した『茅台酒場志』(1991)²²⁾と『中国貴州茅台酒場有限公司志』(2011)²¹⁾の二つ社志がある。

しかし、都市の全体の酒造業を空間的に分析する研究と都市についての詳しい研究は共に少ない。都市と産業を広い視点で結びつけ分析を行う研究が必要だと考えられる。また、複数の酒造業の都市を取り上げ、酒造業の都市の産業的特徴と都市形成の関係を解明することもとても重要であろう。

1.4 研究方法と目的

本稿は瀘州、宜賓については前近代から現代にかけての都市空間や社会に関する状況を、主に各時期の地図や計画図、『市志』や文献史料を用いて分析する。酒造業については会社が出した書籍を参考にしつつ、会社へのヒヤリングで得た情報、『市志』や他の文献史料などを元に、現地調査を加える。そして産業と都市の結びつき方のメカニズムとその変容を、主に都市空間の観点から分析し、二つの都市の酒造業の近代化と都市形成の関係を解明する。

また、1.1 で述べたように中国において企業の成長などは経済システムや国の政策などに大きく影響されているため、この二つの都市については時期を分けて分析する。分析の時代区分としては中国の経済システムの相違に基づき、市場経済萌芽期(-1949年)、計画経済時期(1949-1980年)、市場経済時期(1980-現在)の3つの時期にまず分ける。そして特に市場経済時期については企業が超高速で成長する時期でもあり、会社は大きな経営改革を行うタイミングや上場などに併せて一気に工場整備を実施した。その為、市場経済時期については酒造会社の上述のような市場経済に適応すべく、会社経営制度の改革や変改のタイミングを参照し、更に市場経済過渡期、市場経済適応期、市場経済進展期の3つの時期に分けることとする。

茅台鎮については僻地に位置し、現在も鎮規模の都市であり、80-90年代までは市街地の規模は極めて小さい。加えて90年代以前の市街地の地図資料も殆どない為、瀘州、宜賓のような時代分けでの分析が難しい。従って、茅台鎮については主に現在の都市の市街地状況と工場施設の関係に重点を置いて分析する。

そうした上で、各対象地の産業と都市の構造を「型」として捉え、その「型」の形成原因を主に企業が都市に与えた影響力の面から分析し、「産業近代化」と「都市形成」の関係を解明する。最終的に、中国の特色のある「企業都市」(企業城下町)に対する知見を深めることを目的とする。

第2章 瀘州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

2.1 対象地の都市の概要と酒造業の特徴

瀘州市は「天府の国」の美名のある四川盆地の東南部に位置している。市は4つの県と市区と呼ばれている江陽区、龍馬潭区、納溪区の3つの区によって構成されている。本研究は主に市区の範囲を取り扱っている。瀘州の市区の中心では2つの大きな河、長江と沱江が合流している。三面が河に囲まれて、半島のような形になっていることから都市の中心区域が「中心半島」とも呼ばれている。

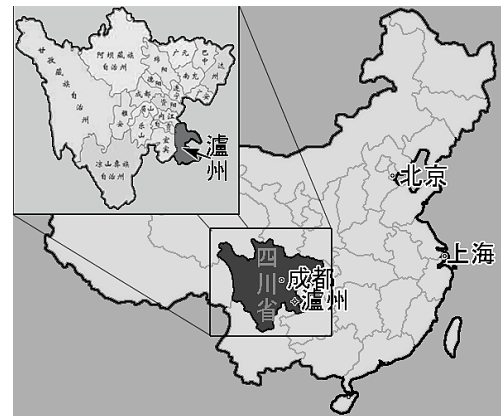


図 2-1 瀘州位置図

瀘州は古くから白酒の産地としてとても有名であり、現在中国の白酒市場の大半の売上を占めている酒、濃香型白酒^{注2-1)}の発祥地とも言われている。瀘州市の博物館所蔵の酒に関する文物と関連論文によると、瀘州での酒造りの歴史は2000年以上前に遡ると言われている^{注2-2)}。現在でも都市における酒造業の地位は高く、酒造業からの地方財政収入は瀘州市全体の収入約の1/4^{注2-3)}を占めている。

老窖会社は現在瀘州市区内で唯一の大規模な酒造会社であり、明清時代の36軒の酒造工房を元に、他の関連企業を合併しつつ、大規模化して出来た



図 2-2 「瀘州城池圖」(清代) ^{注2-5)}

会社である。中国白酒
業界の 5 大会社^{注 2-4)}

の一つでもある。

中国の現代の酒造業の経営戦略は大きく二つに分けられる。一つは特有の資源・設備を利用して酒の品質と付加価値を高めて、ブランド価値で競争する戦略である。もう一つは出来るだけ労働力と原料費を節約し、低価格で競争する戦略である。老窖会社を含め、実力のある酒造会社は基本的に前者の経営戦略を取っているとされている^{注 2-7)}。そして老

表 2-1 製造後 100 年以上を経た窖池群一覧(2005 年)^{注 2-6)}

番号	窖池群名	窖の数	工房建造年代	現所在地
1	温永盛	154	明万暦年間(1573)	國窖 1573 広場
2	鼎豊恒	96	明末清初(1600-1680)	國窖 1573 広場
3	永興誠	168	清康熙年間(1661-1722)	國窖 1573 広場
4	春和榮	21	清康熙年間(同上)	國窖 1573 広場
5	洪興和	92	清康熙年間(同上)	國窖 1573 広場
6	定記	37	清光緒年間(1871-1908)	皂角巷 57 号
7	永生祥	60	清雍正年間(1722-1735)	小市新街子 53 号
8	富生榮	41	清道光年間(1821-1850)	小市過江樓 1 号
9	生發榮	32	清咸豐年間(1850-1861)	小市什字頭 24 号
10	醇豊遠	30	清同治年間(1861-1874)	小市下大街 46 号
11	桂花	58	清乾隆年間(1735-1796)	羅漢鎮
12	圣發祥	94	清乾隆年間(同上)	羅漢鎮
13	大興和	124	清嘉慶年間(1796-1820)	羅漢鎮下院子
14	泉記	334	清末民初(1840-1927)	羅漢鎮
15	協成	176	清末民初(同上)	羅漢鎮
16	順昌祥	100	清末民初(同上)	羅漢鎮

窖会社は会社名の由来でもある「老窖(古い窖)」をブランド価値のコアとして、生産と経営などを行っている。この窖とは酒造りの原料(コウリャンや小麦)を入れて発酵させる地面に掘った土の穴のことであり、現代の白酒製造でも基本的に窖を用いている。原料を発酵させるのは土の中に含む微生物であり、連続使用期間が長いほど微生物が増える。長年の連続使用により生み出した微生物環境は新しい窖とは異なり、このため生産された酒の味や香りも全くに違うものになるという^{注 2-8)}。

現在の老窖会社が所有している古い窖は明清時代瀘州の 36 軒の酒造工房が酒を生産する為に作ったものである(表 2-1)。表 2-1 を見ると、古い窖は主に 3 つの区域に集中していることが分かる。1-5 番の工房は前近代では瀘州城の南門の外に位置する区域に存在していた(図 2 の大曲酒造工房区域)。現在ではこの区域に「國窖 1573 広場」という名前が付けられている。このエリアの窖の歴史は長く、基本的には 200 年以上前に建造されたものである。7-10 番の工房は「小市」(図 2-2 の右部分)に位置している。小市にあった酒造工房は南門外区域と比べると相対的に分散していて、窖の数も南門外の工房と比べると少なかったが、前近代で一般的な 10 個程度の窖を持つ酒造工房と比較すれば大規模なものであった。11-16 番の工房は「羅漢鎮」に位置していた。主に清末と民国初期に作られたものが多く、一軒一軒の窖の数が多かった。しかし前近代の羅漢鎮は瀘州城の近隣の村の 1 つであり、90 年代以前は瀘州市の範囲に含まれていなかった

たため、以前の絵図や地図には描かれていない。

南門外、小市、羅漢鎮という前近代から存在した3つの酒造工房が集中した区域はその後産業の近代化と共に瀘州の都市に多大な影響を与えている。2.2以降では1.4で示した時代区分に対応して、節を分けて記述していくこととする。

2.2 市場経済萌芽期(-1949年)の瀘州の酒造業の変化と都市形成

前近代の瀘州は水運により商業が発達した都市であった。付録の表1に示したように宋の時代から市壁が巡らされ、商業都市として繁栄して来た。「瀘州城池図」(図2-2)を見ると、清代の瀘州城は長江と沱江に囲まれた中心半島に立地し、城の東(図の下)と南(同左)にも街区が広がっていた様子が窺われる。沱江の対岸には「小市」と呼ばれる街区が展開していた。

水運貿易が盛んだった為、長江と沱江沿いの東門、南門、小市区域は酒楼(食事と宿泊を提供する施設)が多かったと、清の詩人張問淘の「城下人家水上城,酒旗紅處一江明」(城の下に人が住んでいて、水の上には城が建っていた。赤い酒の旗(看板)が出ている場所には灯火があり、河全体が明るく照らされている。)という詩の一節のほかにも、明の詩人楊慎の「庵戲炅」^{注2-9)}など数多くの詩に歌われている。明以前から酒楼は「小酒」を生産・提供したが、1573年酒造技術の変革により、新たな段階を迎えた。「舒聚源」酒造工房という瀘州で最初に専門化された「大曲酒」^{注2-10)}を生産する酒造工房が開業し、南門外には他の専門の酒造工房も徐々に増え始めた。清末になると南門外と小市には十数軒の酒造工房があり、生産した酒は省外までに移出されたと記載されている^{注2-11)}。

瀘州城の最初の主要道路は『陽江譜』の記載^{注2-12)}により、東西と南北の二つの長い道があったことが読み取れる。そして「瀘州城池図」の牌坊^{注2-13)}から見ると図2-3中のダ

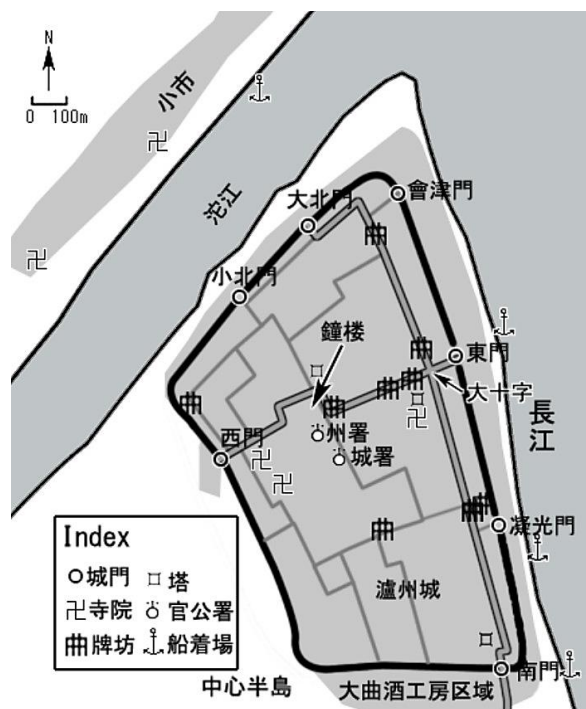


図2-3 清時期瀘州市街地復元図^{注2-14)}



図2-4 民国時期瀘州市街地復元図
(1945年頃)^{注2-15)}

ブルーラインで示した道路が瀘州の古くからの主要道路であると判断できる。南北方向の道路は城の中心部ではなく、河に近い処を通っていることから当時都市が水運と深い関わりを持っていたことが窺われる。また、東西の大通りの中央やや西よりの南側に、鐘楼が建設され、その付近に州署・城署などの行政施設があった。

民国時期の酒造業は大きく発展した。1915年に温永盛酒造工場の「300年大曲酒」がパナマ太平洋国際博覧会金賞を獲得したことにより、大曲酒の知名度と地位がかなり向上したのがその原因だと考えられる。そして日中戦争の時期（1937-1945年）になると中国の防衛線が内陸部に後退し、四川が全国の政治、経済、文化の中心となった。人口が増えて、商業も活発化した。瀘州は四川の重要な港湾都市として貿易量が飛躍的に大きくなった。南門外区域を中心に酒造工場の規模と数も毎年拡大し、窖の数は急増した。1945年頃には瀘州の酒の年間生産量は1,800トンに達し、全国で最も多い量であった^{注2-16}。

民国時期の瀘州の市街地は清代と比べて基本的な構造が大きく変わっていなかった。図2-2を見ると城内では方形の街区が少なく、道路の曲がりも多かったことが分る。主要道路は依然として「大十字」の交差点を中心に南北と東西の二本であった。図2-3を見ると清代には南北の道路は南門に、東西の道路は西門に直線的に繋がっていなかったと見られる。しかし、民国時期の地図ではこの二本の道路は門に直結するようになった。『市志』によると、民国時期の瀘州市内では道路整備が実施され、人力車が便利に通行できるように花園路、平遠路などの道路拡幅、路面舗装などの整備が行われた。平遠路については更に道路勾配を小さくするような整備が行われ、急な曲がり角を直線に整備した。東門外の埠頭でも機械で荷物の積み卸しをする設備が導入されたという^{注2-17}。花園路の南側では昔の州署などの行政施設があった場所が公園として整備され、北側では新しい行政施設(審判所; 政府; 税務局)が作られた。南門付近の平遠路について、現地調査で得た地形情報も踏まえ、昔は地形の関係で道筋を直線にできなかった可能性が高く、道路勾配の調整を行ったことで南門に直通できたと考えられる。そして図2-4を見ると南門付近の城壁も撤去されていたことが判明できる。当時の整備技術では道路勾配の調整はかなり難しかったと推定され、あえてそれを行ったのは当時の南門外の工房から東門外にある埠頭に酒を運送しやすくする為だったと推測される。

2.3 計画経済時期(1949-1980年)の瀘州市の酒造業の変化と都市形成

中華人民共和国の建国(1949年)初期には計画経済が実施されていた。この時期の瀘州では建国前に個人経営であった酒造工房が徐々に国有化され、一つの国有会社(老窖会社)にまとめられた。

建国初期の瀘州は中国の全国的な経済・社会の不安定、自然災害などの影響で、都市建設が著しく緩慢であった。また、当時の経済システムは計画経済であり、会社の生産意欲もそれほど高くはなかった。1950年から1970

年の間、老窖会社の白酒の生産量は基本的に

1000トン前後であり^{注2-18)}、民国時期(1945年頃)の毎年1,800トン程度の生産量と比べると、むしろ減少していた。当時の酒造りは、

「瀘州市曲酒利潤表(1959-1961年)」^{注2-19)}

により、市の計画局が先に生産計画を立てて、原料の量、仕入れ価額、労働者の数、工賃なども計画で決定し、実際の生産状況によって相違が生じた場合は専区政府に支払う税金と生産者価格で調整することになっていた。こういうシステム下では、会社が積極的に利益を出す必要はほとんど認識されなかったと考えられる。また



図 2-5 1964年南門外区域
酒造工場施設図^{注2-20)}

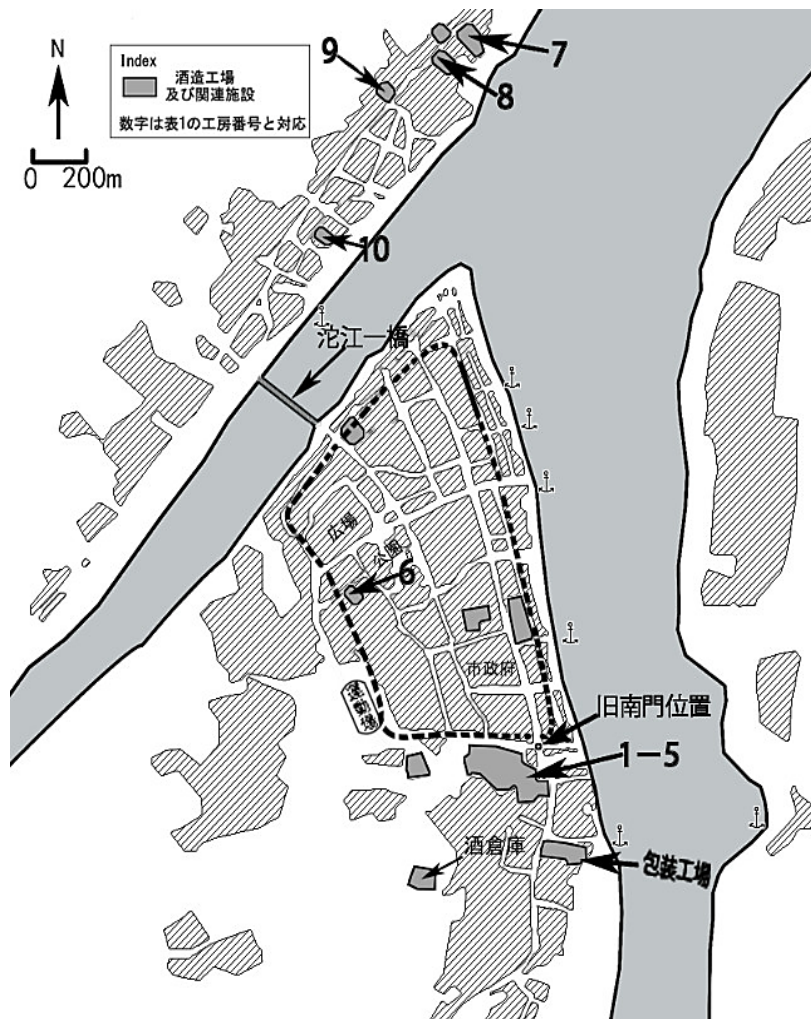


図 2-6 1964年の街区状況と酒造工場の分布図^{注2-21)}

当時の具体的な生産状況について老窖会社の退職従業員周徳玉氏にヒヤリング^{注 2-22)}した。瀘州市曲酒利潤表とヒヤリングの内容から、この時期の会社は基本的に酒を生産する役割しか持っていなかったと言える。

工場などの施設については、図 2-5 を見ると、1964 年の時点で旧南門外の昔からある酒造工房(表 2 の 1-5 番) は既に 1 つの酒を生産する工場としてまとめられていた。工場付近には包装工場も建設され、少し離れた所には酒の倉庫もあった。生産工場の近くで包装を行い、貯蔵する形を取っていたと推測できる。

計画経済の実施は産業への影響がかなり大きかった。酒造工房が国有化される基本的な流れは付録の表 1 計画経済時期の「酒造業関連」欄を参照すればわかるが、詳細な過程はその後の文化大革命の影響による史料紛失と会社の機密保持などの原因で考査するのが難しい。しかしこの特殊な社会背景下でも、建国前に全国一の生産規模を誇った瀘州の酒造工房を一つの国有会社として纏めるのに 11 年が掛かったことが分かる。この国有化と一社化により一般的には大規模化が容易でない伝統産業でも大規模化を可能とする条件ができたと考えられる。

この時期の瀘州市の都市建設はあまり進まなかったが、1964 年の街区状況から見ると南門外から南に伸びて新たな街区が形成されたことがわかる。2.2 で述べたように民国末期に平遠路には大規模な道路整備が実施され、そして建国初期には南門周辺の街区整備も行なわれた^{注 2-23)}。これらの優先的な整備があり、建国後の旧南門外の街区形成の基礎になったと考えられる。新しい市政府も旧南門付近に建設され、都市の中心が徐々に南へと移動していたことが窺える。この時期の瀘州市街のもう一つ大きな変化は、1960 年に沱江大橋(現「沱江一橋」)が建設されたことである。この橋によって小市と瀘州半島が繋がり、その後の瀘州市の街区構成に大きな影響を与えた。また、沱江大橋の建設に伴い瀘州半島側の橋前の道路も整備されたことがわかる。

2.4 市場経済時期(1980-現在) の瀘州市の酒造業の変化と都市形成

2.4.1 市場経済過渡期(1980-1994年)

70年代末で中国の計画経済が終わりを迎え、1982年には老窖会社が初めて3%の自主販売権を得た。その後毎年自主経営権は徐々に拡大してきた^{注2-24)}。自主販売権の範囲内であれば、計画経済時期のように計画価格で決まった相手にしか販売できないわけではなく、会社が自分で販売価額を決め、自由販売できるようになる。

図2-7から分かるように1980年以前の瀘州市の白酒産量は少なく、5,000トンに満たなかった。建国後には合併などの整備も行われたが、生産量はずっと低いままであった。1980年以降にやっと本格的な分業された大規模生産が始まったとも言える。1985年以降になると生産量は大幅に増え、90年代には毎年4万トン以上の規模の量に達した。90年代以降、中国政府は実力のある国有企業を上場させ、株式会社化する政策を打ち出した。老窖会社も1994年に全国でもかなり早い段階で株式会社化に成功し、市場経済に適応すべく準備を整えた。

この時期の老窖会社は1982年から毎年自主経営権の割合を拡大させ、会社の利益も増加していた。酒を生産する役割しか持っていなかった会社であったが、古い窖と醸造技術の点で優位を保ち、市場競争の中で勝ち残り、大きく成長した。

この時期の政策に対応すべく老窖会社は旧南門外エリアの工房を第一工場、小市エリアの工房を第二工場として整備したが、生産量が増加したのは羅漢鎮エリアの第三工場の工業団地の整備の影響が大きかった。1985-1988年の間、老窖会社は国家の専用枠資金2800万元(約5.2億円)を用い、現代的な工場計画に基づいて、第三工場を生産区、補助区、生活区の三つの区域を含む工業団地として整備した^{注2-25)}。それにより、酒の生産能力が大幅向上し、自主販売できる酒の量も増えた。そして老窖会社は1990年に「瀘州老窖」のブランド名

を正式に使い始め、第三工場付近に質の高い包装ができる包装工場を新設し、酒のブランド化を進めた。

これにより同じ量でも販売価額を高くすることでより多額の利益を出すことを目論んだものとみられる。これらの整備に

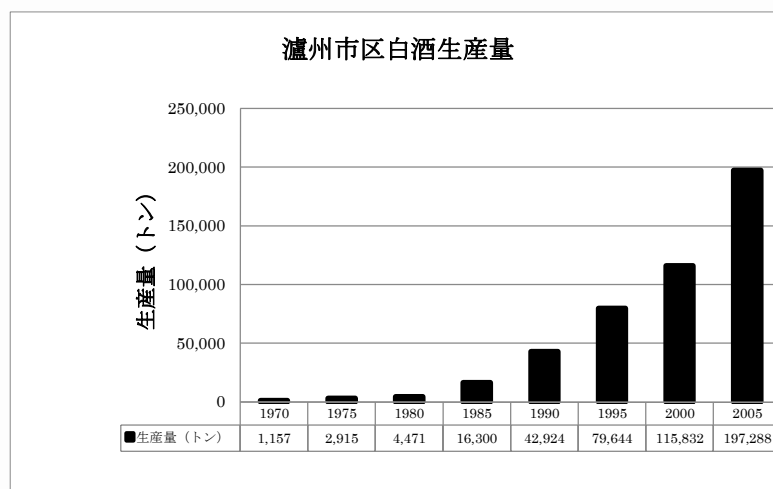


図2-7 1970年から2005年瀘州市区白酒産量変化図^{注2-26)}

より第一、第二工場が酒を生産し、第三工場へと運送し、加工、包装などを行うという分業体制が確立した。

従業員については、この時期にはまだ基本的に瀘州市内と近辺在住の人々が働いていたと会社の副社長へのヒヤリングで聞いている^{注 2-27)}。従業員の福利厚生施設としては第一工場の近くに宿舍が建設されたことが知られる(図 2-8)。また第三工場には「生活区」が建設されており、建設予算表^{注 2-28)}によると羅漢鎮では約 270 戸の世帯用宿舍が計画されていた。当時の生活水準から考えると一戸当たり面積 50 m²という相当ゆとりのある空間が計画されていた。单身宿舍も合計約 3,400 m²が計画されていた。他の施設としては食堂、幼稚園、クラブの予算も計上されていた。

この分業体制は計画経済時期の国有化と一社化があったからこそ成り立ったものだと考えられる。先ず羅漢鎮の工業団地の建設は国の資金により実施されたものである。当時の貨幣価値(中国統計局が公表した中国の平均賃金を参考すると貨幣価値には 20 倍以上の差があると考えられる)から考えると 2,800 万元はとても巨額なものであり、民営の場合であれば例え日本の同業者組合のような組織を立ち上げてその時期でこれほどの資金は確保できなかったであろう。そして国の建設資金の投入により、ある種の強制力が働き、意思決定や協力体制などに余計な混乱が生じずに済んだとも考えられる。分散した工場間での分業を実施した理由としては勿論、元々三つの地区それぞれに窖が集中していたことと、羅漢鎮では用地確保がしやすかったこともあったと考えられるが、瓶詰め、包装など原酒生産より労働力を必要とする工程を当時の郊外で行うことで廉価労働力が得られ、生産コストを削減することもできたからと推測できる。

一方、他の産業についても付記しておく、1985 年に新たな都市計画で設定された 3 つの基幹産業

はブランド品の酒、(天然ガスを主原料とする)化学工業、機械製造であった。図 2-9 で示した通り機械製造工業は主に茜草半島で展開されていて、化工工業は主に羅漢鎮周辺に展開されていた。どれも地図上では一定

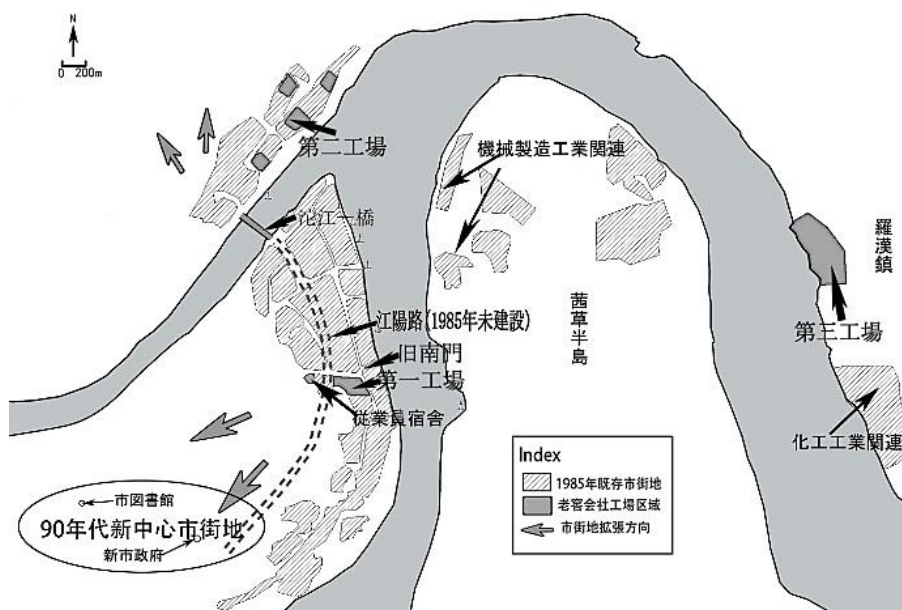


図 2-8 1985 年瀘州街区状況と酒造工場の分布図^{注 2-29)}

の規模のある産業に見えるが、2013年の現地調査では集中的な工業団地は建設されておらず、幾つかの会社の古い工場が並んだ状態のままであった。中国建国初期の国の需要として、エネルギーや化工製造品、機械などが重視され、建国後に優先的に規模拡大が行われたと推測できる。しかしこの状況下でもあえて「ブランド品の酒」を真っ先に基幹産業として設定したのは省直轄市に昇格した市が酒造業からかなりの利益を得ていたからではないかと考えられる。

この時期の瀘州市は、1983年に省直轄市に昇格し、市の行政的な自由度が増したことにより、都市建設の速度が速くなった。1985年の地図(図2-8)を見ると、60年代と比べて大きな変化はなかったことがわかる。しかし80年代末になると、酒造業の収入による財政改善と行政権力の拡大などが原因で、市街地が大きく変化し始めた。主要な変化として、まずは江陽路の建設が挙げられる。江陽路は80年代末期から市政府によって建設された道路で、現在でも瀘州市内で一番交通量の大きい主要道路である。旧城区内の江陽路の北半分は以前からの街路を拡幅して建設したものだが、南半分は強引に旧城区の街区を通り抜けるように建設されたことがわかる、そして旧城区を抜けた後は老窖会社の第一工場のすぐそばを通っている。90年代からの老窖会社の酒の生産量の増加と羅漢鎮の包装工場の位置から見て、この時期に新しい運送ルートが必要になったことが新たな道路を開削した理由であると推測される。

江陽路の建設後、90年代初期にはその道路沿いに新しい市街地が形成され、新市政府や市図書館などの公共施設もその周辺に次々と建設された。90年代半ばにはそのエリアは既に瀘州市の新中心市街区になっていた。第二工場周辺の小市エリアも90年代前半から北、北西へと小規模な拡張を始めた。そして前述した第三工場の実生活施設もかなりの規模があり^{注2-30)}、それに伴う郊外への人口移動も進み始めたと考えられる。

2.4.2 市場経済適応期(1994-2006)

老窖会社は1994年に株式会社化^{注2-31)}に成功し、市場経済適応期に入った。「株式会社化により計画経済時代のような生産量重視から利潤重視になった」と『瀘州老窖年鑑』は述べている^{注2-32)}。図2-7から、利潤重視になったとしても、この時期の生産量の伸びもとても著しかったことが分る。会社の利潤は上場企業の業績報告によると毎年50%前後の速度で増えていた^{注2-33)}。この時期の会社の施設整備として、主要な事業に先ず「国窖1573広場」の整備が挙げられる。老窖会社が持つ一番古い窖は明時代の1573年に温永盛酒造工房が制作した窖である。400年以上の時間にわたり、連続して使用された窖には白酒のブランドの源泉となる価値が生まれた。1996年に、温永盛酒造工房とその周辺の酒造工房の古い窖が国家級文化財として認定された(更に、2006年には「中国世界文化遺産予備リスト」に入った)。その翌年、老窖会社はその文化財と企業の文化を宣伝すべく、第一工場を元に「国窖1573広場」を整備した。窖のある建物の外壁は改修され、瀘州酒文化に関する石壁画が描かれた。建物内部はガラスを隔て、観光客が窖の様子と一部の作業風景を見られるように整備された(写真2-1参照)。そして市場経済下の会社は生産だけではなく、酒の営業と販売にも力を注いだ。その為に会社は包装設備にもかなりの投資を行った。90年代入ってから既に羅漢鎮エリア付近で質の高い包装ができる包装工場を建設していたが、1997年、会社は約8億元(約148億円)を投資し、より高品質・大規模な量の包装需要に対応できる包装工場を羅漢鎮で増築した^{注2-34)}。そして営業と販売に関しても、老窖会社は2005年に小市エリアの北西にある新市街地龍馬潭区で「瀘州老窖營銷網點指揮中心」(営業本部)を建設した。営業本部の建設に伴い、生産以外の人材も大量に必要となったため、会社は全国規模での求人を行い、省外から来た職員の割合がかなり増えたという^{注2-35)}。

この時期の会社の経営に関しては株式会社化以外にももう一つ大きな変化が政府側にあった。それは「国有資産監督管理委員会」の設立である。国の中央「国有資産監督管理委員会(以下:国資委)」の設立は2003年である。中央国資委の設立の約半年後、地方国資委機関も相次いで設立された。老窖会社の場合は四川省国資委の下の瀘州市国資委に属している。国資委は政府の機関として国有会社の経営などを監督、管理する役割を持つ。会社の副社長へのヒヤリング^{注2-36)}では、会社と国資委の関係について「(国資委は)会社の直属の上司みたいなものだ」との答



写真2-1 国窖1573広場工場建物内部

2013年3月 筆者撮影

えを得た。会社が何かの建設を行いたい時は先ず計画案を国資委に提出して市政府などの会議で議論することになる。会議を通過すると国資委は市の都市計画局や建設局などと交渉し、関連の道路整備やエネルギー供給などの計画を行う仕組みであるという。以上のことから国資委は都市と会社の関係を取り持つ非常に重要な組織だと言える。

市街地については 90 年代に中心半島で江陽路周辺の大規模な街区拡大と新中心市街地の開発が行われたほか、小市エリアの北西に大規模な市街地(龍馬潭区)が開発された様子が図 2-9 から読みとれる。開発の主体は市政府である。龍馬潭区は 90 年代末から住宅、商業を目的に開発され始めた市街地だが、2000 年初頭に街路・街区が整備されたものの、ビルドアップは進まなかった。2005 年に営業本部の建設決定が下された後、不動産開発が一気に活発になり、2008 年には営業本部の周辺は基本的に住宅地として開発された。営業本部周辺住民へのヒヤリングによると、その周辺の不動産はほぼ完売されており、平均価格も龍馬潭区の平均住宅価格より 3 割から 5 割程高くなっているという。入居する人は老窖会社の社員以外に教職員などの人が多いともいう^{注 2-37)}。ここに老窖会社の営業本部が建設されたことは、市政府が行った新市街地開発と深い繋がりがあると考えられる。国資委による調整が行われたのではないかと推測される。

そして瀘州市は成長しつつある酒造業の存在を背景に、1997 年の新しい都市計画では「瀘州を『中国酒城』として建設する」という酒造業第一の方針を設定した。1997 年の老窖会社の「国窖 1573 広場」の整備を皮切りに、瀘州市内では酒をテーマとした観光関連施設整備が盛んに行われ始めた。市の方でも、百子図文化広場など幾つかの酒をテーマとした広場を整備し、電柱などを「中国酒城」の文字の入ったデザ

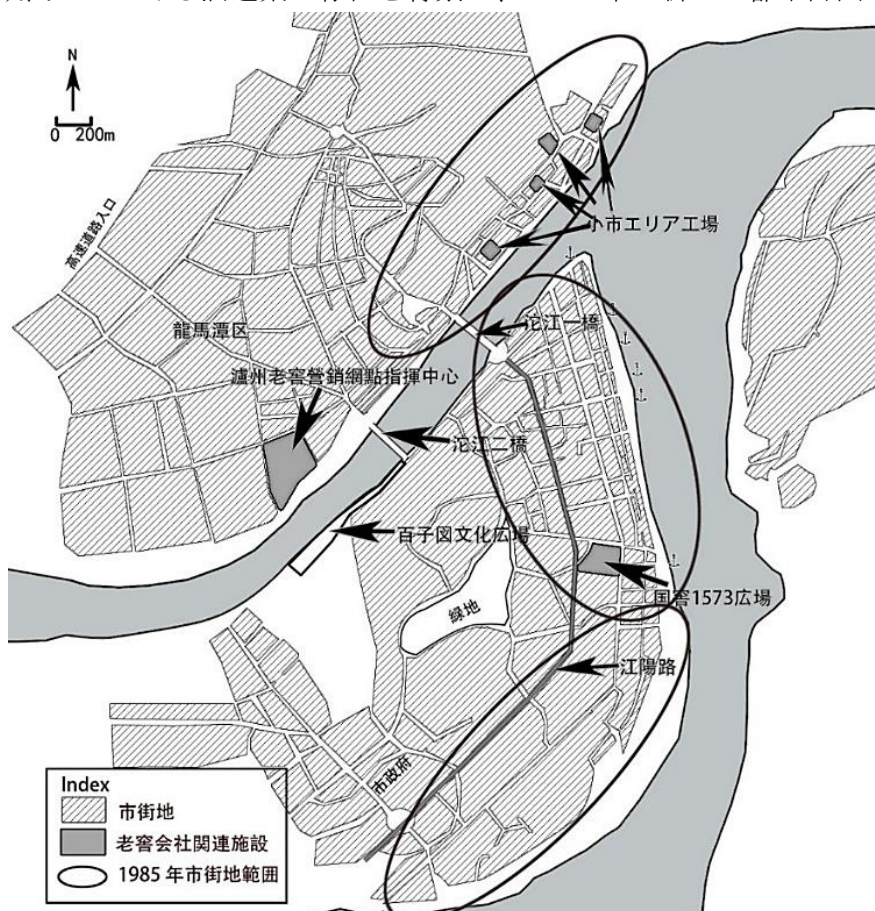


図 2-9 2005 年瀘州街区状況と老窖会社関連施設分布図^{注 2-38)}

インのものに替えるなどの整備を行った。そして積極的に酒に関して国際的な展示会や祭りを開催し、「古き酒文化のある街」としてアピールしている。

酒文化を強調した観光開発が急ピッチで行われた原因には白酒産業の特徴が関係していると考えられる。白酒産業全体から見ると、大きな白酒会社は酒の生産量が多いが、一番利益を出しているのはその中でもランクの高い酒であると言われている^{注 2-39)}。老窖会社のヒヤリングから得た情報によると、近年の利潤の割合からみると、上ランクの酒の生産量は全体の生産量の 15%前後でしかないにもかかわらず、利潤は全体の 7 割くらいを占めているという^{注 2-40)}。その割合から判断して、白酒産業はブランド性を重視せざるを得ない業種であることがわかる。近年の瀘州は市全体でそのブランド性を高めようと努力しているとみることが出来る。

2.4.3 市場経済進展期(2006年-現在)

四川省から貴州省に掛けての地域には、有名な酒の生産地が多い。瀘州老窖以外にも、有名な酒として本論文の後にも出てくる、宜賓の五粮液、茅台の茅台酒などがある。2008年に四川省政府はそれらの銘酒で一つの産業クラスターを形成させる構想を策定し、2010年から「中国白酒金三角」プロジェクトを始動させた。その構想の先行実験として、2005年に瀘州で開催された中国白酒OEMフォーラムで「瀘州酒産業集中発展区域（以下：集中発展区域）」の建設が決定された。集中発展区域は現在中国で一番規模の大きい酒のOEM/ODM工業団地である^{注2-41)}。

集中発展区域は瀘州市の中心半島から約20km離れているところに位置し、2006年から建設が始められ、計画面積500万㎡で、2013年の時点では約60%が完成している(図2-10)。総投資額(四川省出資)120億元(約2.2千億円)^{注2-42)}を超える巨大な開発であり、老窖会社と瀘州市に、多大な影響をもたらした。集中発展区域の総設計は老窖会社の副社長である郭氏が担当し、氏の設計が基本的に採用されたという。従って会社は集中発展区域内の建設について四川省政府からかなりの自由が与えられたと考えられたが、建設場所の選択の自由度については不明である。建設場所については、中心市街地からかなり離れていて、土地の値段が安価であったということ以外に、中心半島に近い茜草半島や長江南岸の未開発地には低い山地や丘陵などの開発にコストが掛かる土地が多く、集中発展区域建設前の老窖会社の規模や資本などから考えると、自力でそれを開発する資金がなく、政府からの予算も限られていたからと推測できる。そして、会社の業務報告書によると、生産用水と電力の確保などの理由もあったことが分かる^{注2-43)}。

建設経緯からも分かるように集中発展区域は白酒の産業チェーンの関連企業を集中することで産業クラスターを形成することを目的にしている。その為、集中発展区域は老窖会社だけではなく、他の酒関連の企業なども進出している。主に酒の瓶詰め、包装、物流、貯蔵などを中心とした区域であり、労働需要がとても大きい。業務報告書によると2012年2月の時点で集中発展区域の労働者数は1.6万人に達していたが、その時点では労働者が全く不足している状態であり、さらに1.5万人ほどの労働力が必要と推定されている。より多くの労働者を招く為に、集中発展区域内とその周辺に5万人程度が便利に生活できる居住と関連生活のための施設及びその他のインフラ整備をより早く完成させる必要があると書かれている^{注2-44)}。

老窖会社の原酒に関しては依然として瀘州中心市区と羅漢鎮にある古い窖を使って生産している。そして原酒を集中発展区域に運び込む為、2005年以降いくつかの新しい道路・橋梁計画が策定された。代表的なものとして2012年に部分的に開通した、国窖1573広場エリアと茜草半島を繋ぐ国窖大橋と、茜草半島の南側と集中発展区域を結ぶ酒谷大道などがある。建設の主体は市政府であるが、酒谷大道については老窖会社が住民の立ち退きに補助金の一部を出している。建設現場の外に張り出された政府による

建設公報では国窖大橋の建設は茜草半島の開発の為であるというが、近年の中心半島の交通状況などから判断すると、国窖 1573 広場エリアから集中発展区域への酒の運送ルート^{注 2-45)}の確保が前提であることは明らかである。これらの建設はかなり急速に行われたもので、住民の立ち退きなどの問題が発生している^{注 2-45)}。国窖大橋の建設目的についての政府公表は老窖会社に過度の反感を抱かせない為だと考えられる。また中国の国情としても地方政府が一企業の為に優遇的な整備を実施したと公表した場合は世論の非難を受ける可能性が高いため、建設目的をあくまで都市の為だと踏み止めるのが一般的ではないかと考えられる。ほかの建設関連としては瀘州市 2005 年版都市計画図からは茜草半島から羅漢鎮にかかる橋も計画されている。この橋が完成すると、瀘州主城区の古い窖が集中している 3 つの区域(国窖 1573 広場, 小市, 羅漢鎮)が、幅広い橋と一級道路により短い距離で繋がることになる。

また集中発展区域の建設により、酒の生産量が大幅に上昇し、周辺の農村を原料基地とする整備も始まっている。黄巖鎮永興村は 2010 年から重点的に整備されている村の一つであり、集中発展区域より東の約 3km の所に位置している。整備費用の割合は瀘州市陽江区の財政から 8 割、村の財政から 2 割の内訳であった^{注 2-46)}。整備後、「国窖 1573 原料生産基地」の一つとして原料生産を行っているが、会社は整備については全く資金を出していない。このことからこの時期の老窖会社は政府から優遇されていたことがわかる。

原料生産基地の住民の一部は新しくできた村に移住し、紅高粱栽培などの農業を続けている。農業を続けたくない人は、黄巖鎮などの周辺の市街地にある移転住民を収容する為の集合住宅への移住も可能とされた。それによって、周辺の市街地の人口の増加も見られた。周辺の鎮の建設も以前と比べてペースがかなり速くなっている。

その他、酒文化をテーマとした都市規模の観光関連施設整備(酒をテーマとした公園整備や都市景観整備、船で 3 つの古い窖の集中区域と集中発展区域を観光できる観光ルートと河岸景観整備など)も着々と進められており、第三次産業(観光産業以外に集中発展区域に入園した物流会社を利用した各種の配達業などがある)の育成にも力が注がれつつある。

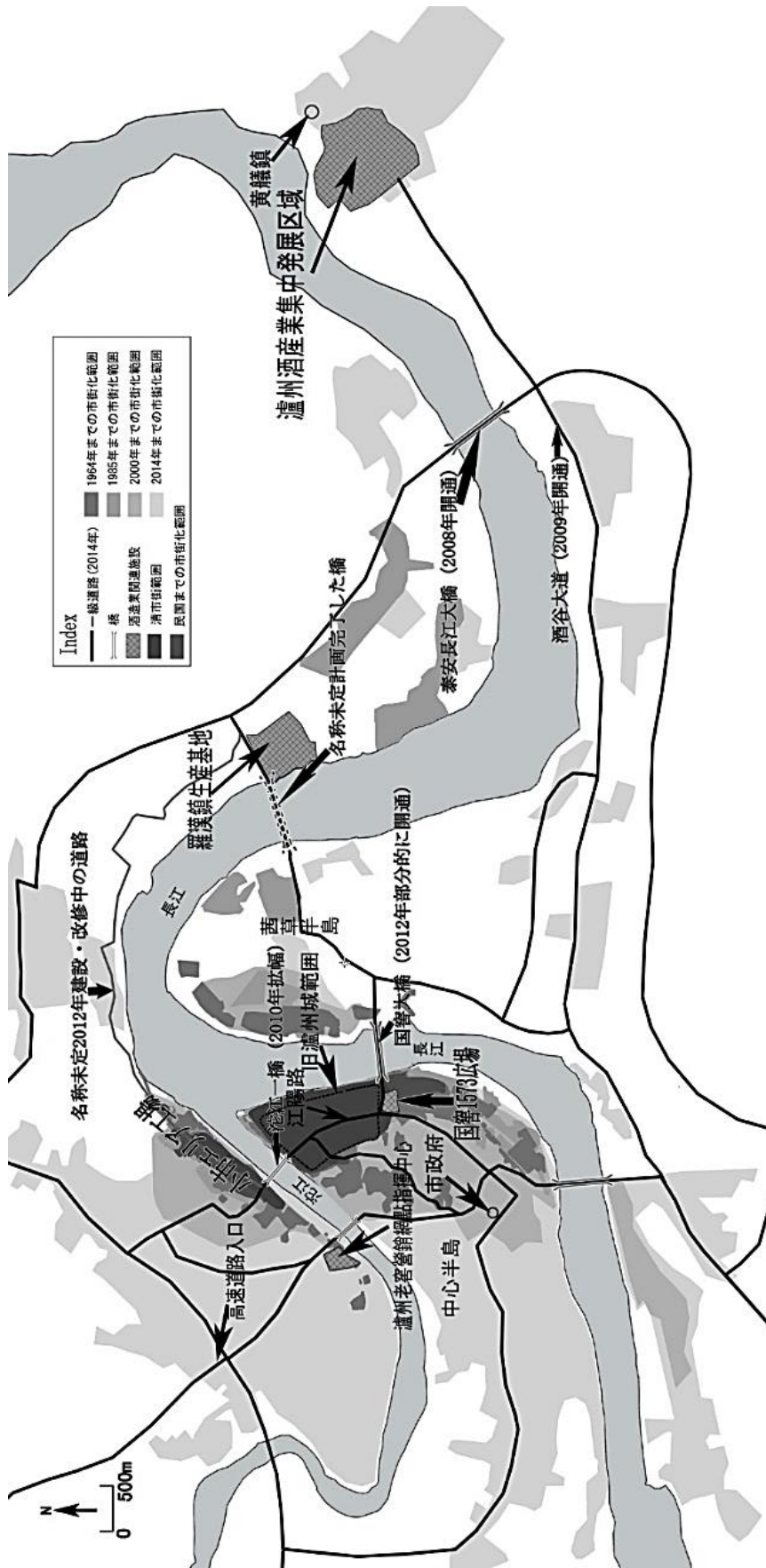


图 2-10 泸州市市街变迁及道路、桥梁图^{注 2-47)}

2.5 瀘州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

瀘州では明代から專業化された酒造工房が出現し、酒造りの為の窖が次々と建造された。清代になると南門外区域と小市の二つの酒市が形成され、酒を販売・移出していた。民国時期になると酒造業の規模が更に拡大し、その為南門周辺の道路や街区が優先的に整備された。計画経済時期においては以前の酒造工房が徐々に国有化され、一つの会社として纏められた。この時期の酒造業においては包装や販売などは最小限しか行っていなかったため、一つの会社になったとしても基本的には3つのエリアに分けられ、それぞれのエリアで生産から出荷までの全工程が実施されていた。市場経済過渡期となり、酒造業の大規模化生産が本格的に始まり、現代的な工場計画に基づいた工業団地が羅漢鎮で建設され、包装などもその周辺で行うことで、中心半島、小市、羅漢鎮の工業的な繋がりが強くなった。市の方もそれに対応すべく道路の整備などを行った。市場経済適応期になると、会社が上場し、営業とブランド化に力を注いだ。会社の成長に伴い、税金面での貢献も増え、市も全力で酒造業を応援する方針を打ち出した。観光関連施設整備、酒の展示会や祭りの開催などを行うことで、街全体で会社のブランド性を高めようとしていた。市場経済進展期には、集中発展区域が建設され、古い窖が集中している3つの区域(國窖 1573 広場, 小市, 羅漢鎮)との工程的な繋がりが更に強くなり、増えていく物流や通勤の需要に対応すべく、市行政も急速に道路・橋梁を整備した。

工業の近代化により、工場の規模が大きくなると共に郊外立地が進められ、都市自体の規模が大きくなることは、多くの工業都市で確認出来ることであろう。瀘州の場合でも大まかな流れは同様だが、一般とは違う特徴、すなわち分散的な構造を持つという特徴が見られた。当初3つの離れた区域に集中した工房を一つの国有会社としたことによりこの後の遠隔地での分業生産が可能となり、最初の郊外の工業団地も当時の生活圏であった中心半島・小市から約8キロ離れた羅漢鎮で建設された。工業団地の建設に伴い、従業員の生活の為の施設も建設され、中心半島、小市、羅漢鎮の3つの都市・産業拠点が形成され始め、分散的な構造を持ち始めた。そして2006年に中心区域から約20キロを隔てた集中発展区域が建設されることで更に新しい拠点が形成された。そのため分散的な都市構造に更に拍車がかかり、主要道路・橋梁も分散した酒造業の工業区を繋ぐために整備された。

古くからある窖に白酒醸造業が依存するという瀘州での白酒産業の特性が、都市を多拠点化させ、分散的な都市構造を成立させたが、一方でそれらを密接に結びつけるインフラも整備させたと言えることが出来る。

しかし広い視点から見た場合は、瀘州市の現在の都市規模は地方都市の中でとりわけ大きいとも言えず、都市拠点が地場産業によって、繋がっている方が特徴的ではないかと考えられる。ではこの構造を形成させた条件を考えてみたい。

序論で述べたように中国の多くの大型会社は国有会社であり、自治体と企業の関係

性が複雑であると
考えられ、それを
理解するためには
先ず現在の国有会
社の性質を検討す
る必要がある。

2.4.2 で述べた
ように、老窖会社
は 1994 年に株式
公開を行い、その
後更にグループ会
社として発展した
が、酒業務を担当
しているのが「瀘

表 2-2 2014 年瀘州老窖株式会社十大株主一覧表^{注 2-48)}

株主名	持株割合
1.瀘州老窖グループ株式会社(国有法人)	25.72%
2.瀘州市興瀘投資グループ株式会社(国有法人)	23.67%
3.瀘州市国有資産委員会(国有法人)	4.01%
4.全国社保基金組合	1.36%
5.中国農業銀行	1.07%
6.中国建設銀行-长城品牌优选股票型证券投资基金	0.78%
7.中国人寿保險株式会社-配当 005L-FH002	0.74%
8.中国建設銀行-长城消費増値股票型证券投资基金	0.71%
9.新華人壽保險株式会社-配当 018L-FH002	0.57%
10.中国人寿保險(グループ)会社-一般保險商品	0.49%
その他	40.88%

州老窖株式会社」で、その十大株主は表 2-2 に示した通りである。2014 年(株)老窖会社の資産総額は 131.71 億元であり^{注 2-49)}、そして最大の株主は持ち株会社である瀘州老窖グループ株式会社で 25.72%、2 位は瀘州市興瀘投資グループ株式会社で 23.67%、3 位は瀘州市国有資産委員会で 4.01%となっている(以降「グループ株式会社」を「(グ)」と表記し、「株式会社」を「(株)」と表記する)、十大株主の中での国有法人が持っている株の割合は 53.4%である。(グ)老窖会社と(グ)興瀘投資会社は国有独資会社であり、国家がその会社の全ての株を持っている特殊な国有会社の形である。国家が全ての株を持っているのはあくまでその持ち株会社であり、「瀘州老窖株式会社」のような国有独資会社の子会社はその内に属さない。

そして現在の(株)老窖株式のような上場した国有会社の性質などについて、瀘州市国有資産委員会元副主任のヒヤリング^{注 2-50)}と一般的な理解として、(グ)老窖会社と(グ)興瀘投資会社は国有独資会社であるため、政府の代わりに(株)老窖会社の株を持っていることとなる。そして両社とも会社法人のため、(株)老窖会社の経営に直接関わっていることとなる。国有資産委員会は政府機関であり、会社法人ではないため、(株)老窖会社の決定に関する審議権はあるが、経営に直接関わっていないと考えられる。

(株)老窖会社の株の割合は国有法人が 5 割以上、他の個々の非国有法人の株の割合が 1%前後で、銀行や保険会社が大株主の場合が多い点では次の章で登場する五粮液会社と非常に似ていて、現在中国で上場した国有会社の一般的な割合でもあると考えられるが、五粮液会社と大きく違う点は「(グ)興瀘投資会社」が第 2 大株主の点である。

(グ)興瀘投資会社は 2003 年に瀘州市国有資産委員会により立ち上げられた大型国有会社であり、瀘州市政府が都市戦略、インフラ整備、産業発展などに投資または建

設する会社である^{注 2-51)}。そして、(グ) 興瀘投資会社が持っている(株) 老窖会社の株の大部分は、瀘州市国資委が無償で譲渡したものであることも(グ) 興瀘投資会社の年表で確認できる^{注 2-52)}。会社年表を見てみると、**1573** 広場と茜草半島を繋ぐ「国窖大橋」などの橋や道路、「酒産業集中発展区域」の供水施設などの基礎施設建設も(グ) 興瀘投資会社が関わっていると記載されているため^{注 2-53)}、老窖会社の工場区整備と密接に関わっていることがわかる。

以上のことからわかるように、国有会社は制度上政府が経営していることとなっているが、瀘州の酒造業近代化と都市形成の過程を見て、企業と政府が完全に同調しているわけでもなく、両者の関係性の強さに差があると考えられる。

そして序論の 1.2 で示した通り、後で登場する対象地と比較するためにも、前述した酒の生産量や持株割合など以外に、

1. 現在の会社営業収益と都市の GDP との割合
2. 現在の会社従業員数と都市の市区(茅台の場合は鎮の)人口との割合
3. 現在の社有地面積と現在の各都市の主な市街地の面積との割合

の 3 つの企業と都市のデータを「割合」で示した指標を導入することとする。

まず現在の老窖会社の営業収益と瀘州市の GDP との割合についてだが、「瀘州老窖株式会社 2014 年年度報告」によると(株) 老窖会社 2014 年の営業収益は約 **53.53** 億元である^{注 2-54)}。

瀘州市の 2014 年の GDP については **1259.73** 億元で^{注 2-55)}、会社営業収益と都市の GDP との割合は会社営業収益(億元)/瀘州市の GDP(億元)と計算し、 $53.53/1259.73 \div 4.25\%$ の結果である。割合の数字はかなり小さく見えるが、それは市の GDP の方は全市域(行政区画)というとても広範囲での統計であり、市区を範囲とした統計ではないためである。

そして現在の老窖会社の従業員数と瀘州市の市区人口との割合について、2014 年の老窖会社の在職従業員数は 1,909 人で、会社が退職金を負担している人数は 814 人である^{注 2-56)}。在職従業員数は他の二つの対象地と比べてとても少ないが、会社が古い窖を中心にランクの高い酒を生産している性格が表れていることと、集中発展区域にある生産サポート施設などは第三者の会社により提供されていて、(株)老窖会社の従業員ではないからであると考えられる。そして会社が退職金を負担している人数は在職従業員と比べてかなり多いことも分る。会社が早い段階で一定の規模を有したことの表れであると考えられる。瀘州市区の人口は 101 万人で、従業員数(万人)/市区人口(万人)は $0.19/101 \div 0.19\%$ となる。

最後に老窖会社の現在の社有地面積と瀘州市の主な市街地の面積との割合についてだが、こちらは Google マップの航空写真データ(2014 年)をベースに図上計測を行って、概略的に算出したものである。計算結果は社有地面積が約 **312.26** 万 m²で、主な市街地面積が約 **3,523.45** 万 m²、社有地面積(万 m²)/主な市街地面積(万 m²) \div

8.86%となっている。会社の従業員数と市区人口の割合などを参照すると、会社は従業員数が少ない割に、かなり大規模な面積の土地を使用していることがわかる。

以上、企業と都市のデータの「割合」を示した指標からの分析を行ったが、現在の老窖会社の工場施設分布を理解するために、今一度会社の工場施設に関わる大きな整備を振り替えてみたい。

表 2-3 瀘州酒造業関連整備一覧表を見てみると、会社の生産に関わる大きな整備は1985-1988年の羅漢鎮工業団地建設(国出資 2,800 万元)、1997年の羅漢鎮工業団地拡大整備、国窖 1573 広場整備など(会社の株式公開により集まった資金での整備 合計約 9.67 億元)、2006年の集中発展区域の建設(四川省出資 120 億元)となっている。大型の工場区建設が基本的に国や政府の出資で建設したもので、その額がとても大きいことがわかる。そして、現在の会社の工場施設の空間分布を見てみると(図 2-11)、原酒生産しているのが前近代からの古い窖が集中している3つの区域(国窖 1573 広場, 小市, 羅漢鎮)を基に整備された工場で、新しい窖も昔から窖があった羅漢鎮工場団地で造られた。会社が古い窖を中心に生産しているのは中国の一般的な消費者に「窖が古いほどいい酒が造れる」という共通認識があるからであり、それを会社の最大のセールス・ポイントとして、生産・経営を立てていると考えられる。

瓶詰めや包装などの後工程施設は羅漢鎮工場団地と集中発展区域に建設された。特に集中発展区域の建設位置は3つの原酒生産区域からかなり離れていて、生産上色々不便があり、製品を完成する為の運送コストなども高く、老窖会社にとって一番便利な位置とはとても言えない。その原因は先に述べた企業と都市の関係に関するデータなどから、老窖会社は都市空間に対して、会社にとって一番理想的な工場計画を実施するほどの力はなく、また集中発展区域が政府の出資で、会社が場所を選ぶのに大きな自由はなかったからではないかと考えられる。

そして集中発展区域の後工程(瓶詰め、包装など)をサポートする施設(酒のガラス瓶の生産や包表装の箱など印刷する施設)や物流については会社がすべて施設を作り、生産しているのではなく、その一部は老窖会社が別の企業を集中発展区域に誘致して、所謂業務委託の形で行っている。その原因はまず会社の資本や生産規模などから考えるとこれらの施設を全て自社が持つ必要はなく、そして2.4.3で述べたように、集中発展区域の発案が四川省政府で、OEM/ODM 工業団地を整備する構想であるため、老窖会社の施設だけを入れることは元から不可能だったと考えられる。

また社宅などについては、瀘州市区において、地図上では大規模な社宅街が確認できない。その大きな原因として国の「住房制度改革」^{注 2-59)}が実施されたからである。中国で会社が原則社宅を供給する制度は80年代末頃に終わり、90年代から住房制度改革が実施された。住房制度改革は大まかにいうと国と会社両方が補助金を出して、従業員に自分の住宅を購入させる制度である。そして老窖会社に勤める人の給料は市の平均値よりかなり上であり、現在ではその大部分は自分の家を持っている。

2-3 瀘州酒造業関連整備一覧表^{注2-57)}

年	主な整備事業	整備事業で建設された主な施設	整備資金の出所(額)	酒造業状況
建国前-1949)				36 軒民営酒造工房あり、一軒一軒も大きい(合計窖 1617 口) 酒造工房は旧瀘州城南門外、小市、羅漢鎮の 3 つの区域に分布した 日中戦争時期(1937-1945 年)の酒生産量が全国一であった
1950-1960	旧南門区域近辺の酒造工房の改造など	前工程生産施設	国	前近代の民営酒造工房が合併され、一つの酒造工房となった
1985-1988	羅漢鎮工業団地建設	前工程生産施設、後工程生産施設、従業員の生活施設	国 (2,800 万円)	初の「現代的な工場計画に基づいた」工業団地の建設により、生産能力が大幅向上した
1994				会社株式公開
1997	羅漢鎮工業団地拡大整備、国窖 1573 広場整備など	包装など施設を主とした後工程生産施設、観光客向けテーマ広場、設備更新など	会社 (合計約 9.67 億元)	株式公開で集まった資金を使って多くの施設を整備した
2005	営業本部の建設	管理事務施設	会社	
2006	集中発展区域の建設	管理事務施設、後工程生産施設、他企業の前工程生産施設、他企業の包装、物流など後工程生産施設、生産サポート施設、従業員の生活施設	四川省 (120 億元)	老窖会社(子会社)が工業団地を建設、管理し、関連企業を誘致する集中発展区域を建設し、生産能力が更に拡大した
2010	周辺農村の原料基地整備	原料生産施設	市政府	市政府と協力しての周辺農村の原料基地整備などを行い、会社のグループが拡大していく

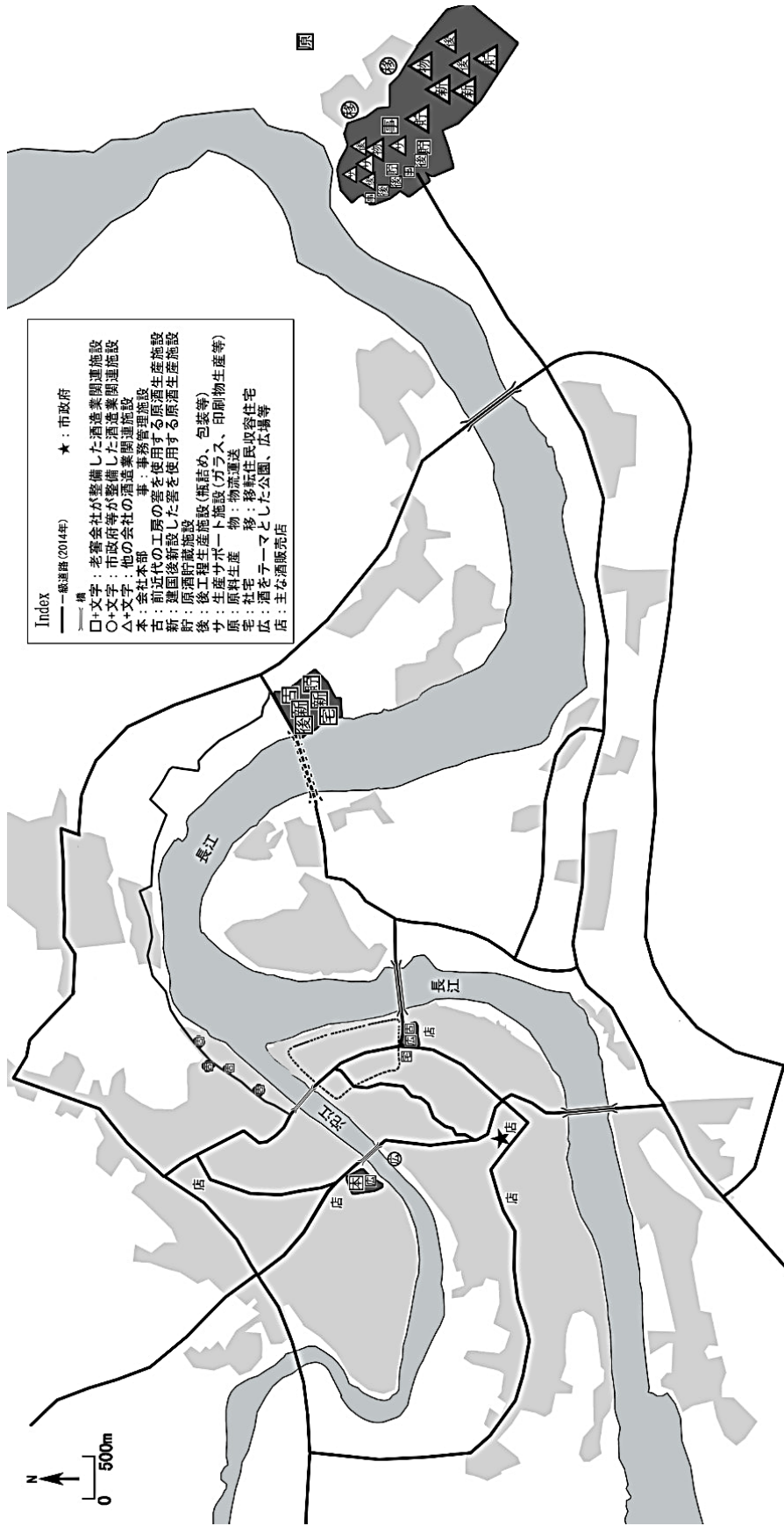


図 2-11 瀘州市酒造業関連施設配置図^{注 2-}

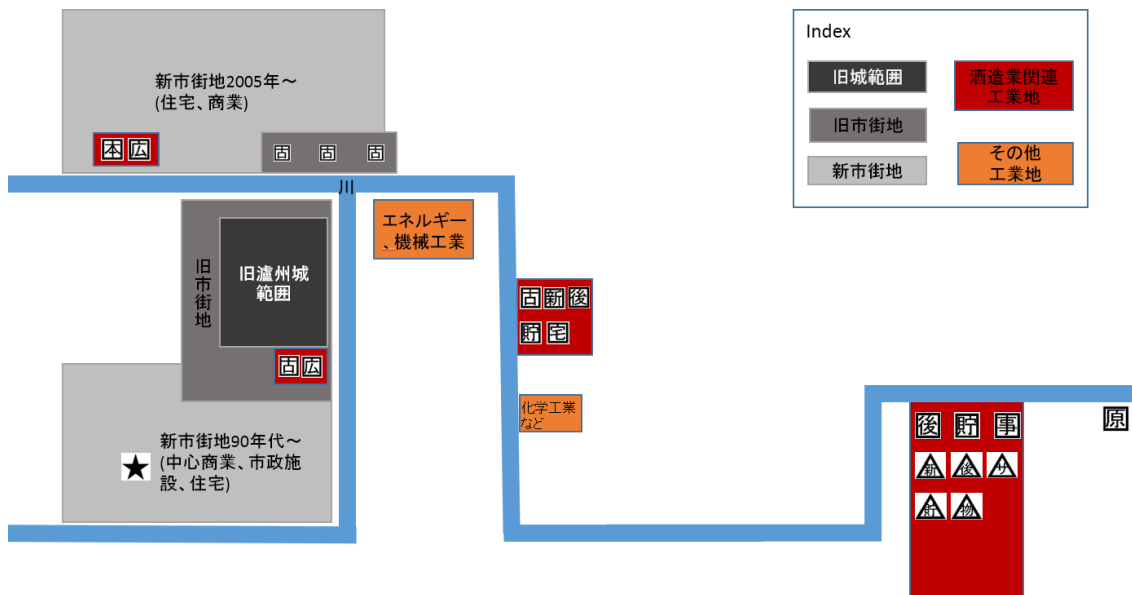


図 2-12 瀘州市酒造業関連施設配置図概念図

この都市と産業の空間的關係は図 2-13 で示したような「都市全体展開型」であると考えられ、企業側は生産施設などを都市の中で分散的に建設し、市内で分業生産を行っている。工場区を連結する道路などや他の生産に必要なインフラは市政府側が整備し、企業の副次的な施設(後工程施設や生産サポート施設)を郊外化するような構造である。

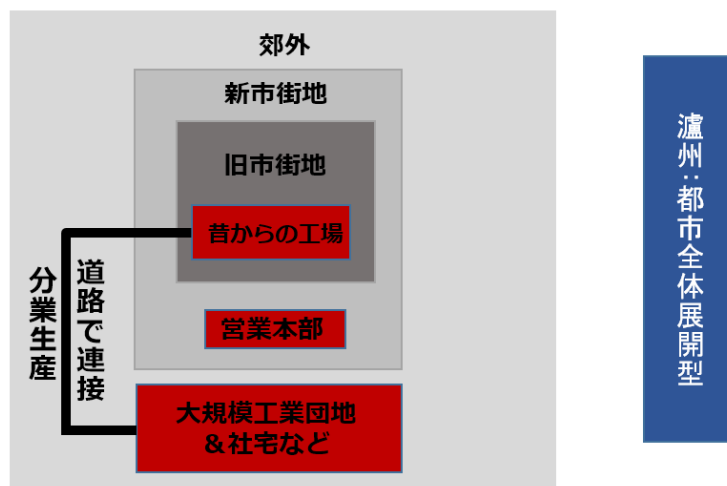


図 2-13 瀘州市都市と産業の空間的關係図

この構造の形成原因は企業と都市の關係からみると、老窖会社は業界 3 位の会社で、集中発展区域の建設後、酒の生産量なども急激に増えたが、第三章で扱う業界 1 位の五糧液会社と比べて、企業の規模はそれほど大きくはない。そして酒造業の工場などの整備も都市整備面の限られた一部に過ぎない。また先述の企業と都市のデータを「割合」で示した指標から見ても、会社の各指標が都市の各指標に占めた割合は低く、都市全体から見た場合、会社と都市の關係性強度が非常に強いとは言えない。そして後出の対象地と比較するために、瀘州の老窖会社の都市に対する關係性強度は中国の企業都市の中で「軽度」とであると評価しておきたい。

しかし、この「軽度」段階でも、市の近年の都市計画の中では酒造業を市の一番の基

幹産業として発展させると明記し、前節などで述べたように市政府が大々的に、市全体を範囲とした酒をテーマとした景観や観光整備を行っている。その原因は国の政策に帰結すると考えられる。

国の政策は中国の都市発展、国有企業の成長を理解するのに避けてはならないことであると考えられ、近年では第三次産業の発展戦略や都市ブランド戦略、特色産業推進や産業クラスター形成戦略などがあり、市政府の方にとっても昔から当地にあった伝統産業を発展させることが都市ブランドの創出や産業クラスターの形成、また第三次産業である観光業の発展に繋がると考えられている。

そして都市建設や計画などにおいても、大規模な開発などは先ず国の政策と合致しなければいけないし、政策をうまく使えば上級政府や国から巨額の建設費用も得られる。瀘州の集中発展区域も国の政策に沿ったものであり、四川省から巨額の資金が得られただけではなく、住民の立ち退きなども政府の強力なサポートがあつて、建設スピードが非常に早ことも見てきた通りである。企業の方も集中発展エリアを建設する際は、「エコや文化景観創造などに特に気に掛けた」と集中発展区域の総設計であり、会社の副社長でもある郭氏がヒヤリングの中でもそう強調した^{注 2-60}。旧市街地の中にある工場については、国が市街地内の工業に対して、規制を強くする一方の政策環境下で、他の多くの都市が工場の全面的な郊外化を行っているが、瀘州の酒造業は旧市街地内で生産し続けている理由としては、

1. 酒造業自体は元々汚染が強い工業でなく、規制の最も強い中心市街地部分は「伝統的な酒の製造法」として、宣伝も兼ねて殆ど人力で、汚染を最大限に抑えるような生産の仕方をしている。
 2. 生産施設である古い窖などに文化的価値が認められ、文化財として保護されて、工場が残りやすい環境になっている。
 3. 生産過程などから見ても、古い窖などの生産施設は掛け替えのない価値があり、会社はそれらを残すために最大の尽力をしている。
 4. 市も酒造業から多くの税金を得、また酒造業をアピールすることで、都市ブランドも創出され、それらに関連する整備や都市発展のための資金が得られるので、都市の中心部に景観整備された酒の生産施設を残すこともプラスになる。
- の四点を挙げられるであろう。

以上述べたように、産業特徴、企業と市政府の力のバランス、国の政策など多方面の原因で瀘州市の現在の都市構造が形成されたが、企業も市政府も国の政策環境、地方の産業と他の資源条件をかなり有効活用したとも言えよう。

第3章 宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

3.1 対象地の都市の概要と酒造業の特徴

宜賓市は四川盆地の南の縁の部分、二章の対象地である瀘州の西南約100kmの所に位置している。両都市は直線距離上それほど離れていないが、四川、貴州の辺りの地形はかなり複雑で、山なども多い。とくに道路整備技術がまだ発達していなかった前近代において、宜賓は辺境都市というイメージが強かったという。

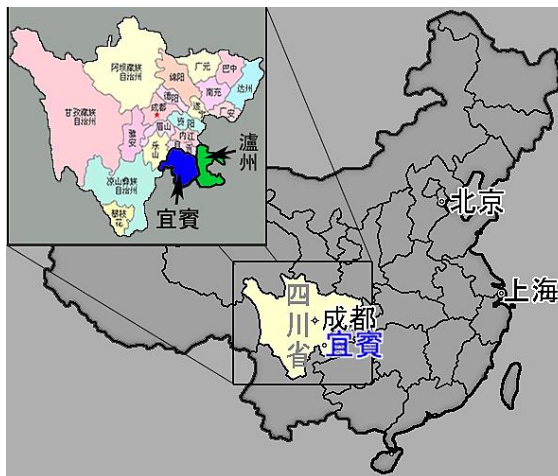


図 3-1 宜賓位置図

市は8つの県と市区と呼ばれている翠屏区と臨港区の2つの区によって構成されている。本章は瀘州と同様に主に市区の範囲を取り扱っている。宜賓市区の中央で岷江と金沙江の二つの大きな河が合流し、長江となるため、宜賓は「万里長江第一城」とも呼ばれている。図3-2を見てわかるように、古くからの宜賓城は、北、東、南に河、西には山というかなり限定された場所に建設されたのである。この宜賓城があった場所は現在宜賓市一番の中心市街地である翠屏区になっている。

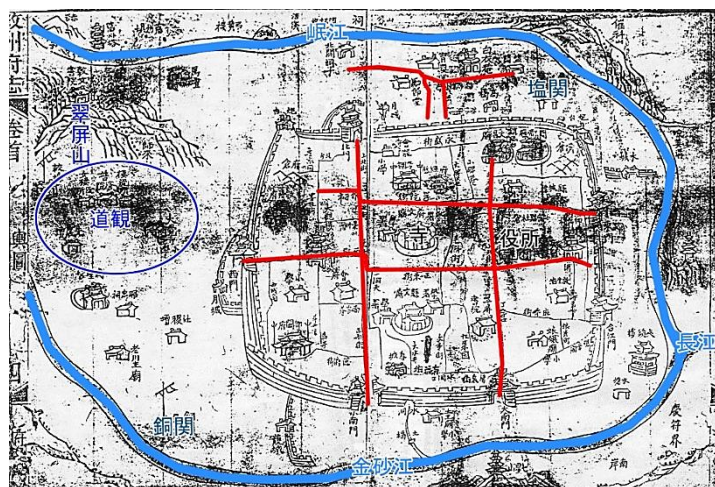


図 3-2 清代光绪 21 年宜賓地図(1895 年頃) 注 3-1)

酒造業についてだが、宜賓市内で一番大きい会社は現在中国白酒業界の随一の酒造会社、五粮液会社である。老窖会社と同じく前近代からの酒造工房から発展した会社であり、毎年宜賓市の税収の約半分の学の貢献をしている^{注 3-2)}。

宜賓酒造業の特徴は、瀘州会社のように古い窖が中心での生産をしているわけではないため、前近代工房については次節で分析する。

3.2 市場経済萌芽期(-1949年)の宜賓の酒造業の変化と都市形成

宜賓は長江の一番上流の都市であり、古くから戦乱が続いていた。街区状況と酒造業の立地について、清以前の地図史料はほとんど存在せず、酒造工房も基本的に明から出現したものであるため、清時代から分析を行う。

図 3-3 を見てみると、宜賓城の立地が分かる。三面に川、一面に山がある半島上に都市が建てられていた。北、東、南面の城壁は

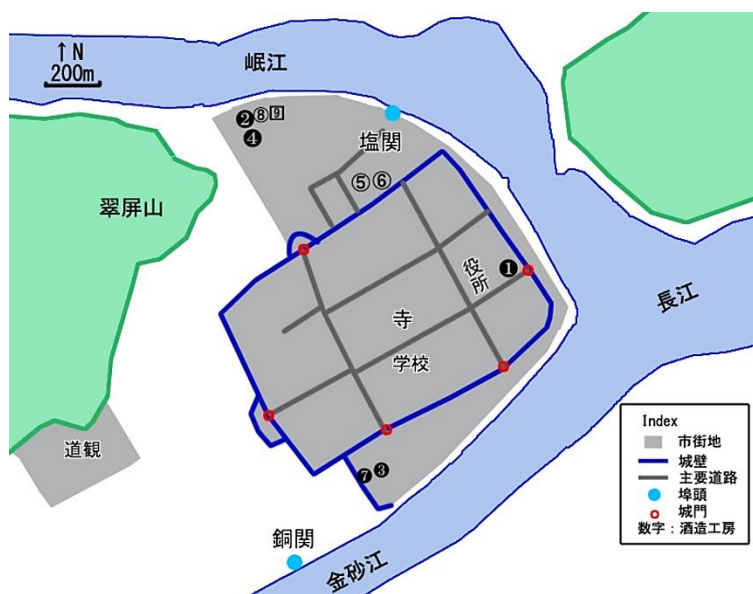


図 3-3 清時期宜賓市街地復元図^{注 3-3)}

直接川に接して建つこともなく、ある程度の距離を隔てている。宜賓城を見ると他の中国の前近代県城都市と同様に全体的に閉鎖的な構造になっていた。西門、北門の外には更に月城が設けられ、小南門の西側にも護城が作られた。西からの攻撃に対し守りを固めていたと考えられる。城内については中心部に学校などの施設が設けられ、役所は東門の付近に設置されていた。船着き場は、『叙州府志』の記述によると銅関と塩関の付近に設置されたという。船着き場のある方角に面した城門はなく、船着き場と城門の間にもう一層の城壁があつて二重に隔てているような構造になっていた。この構造も防御を重視していたと考えられる。

市街地については城の範囲内以外は北と東の方に広がっていた。西の方の翠屏山の一部である真武山には現在「真武山道教建築郡」^{注 3-4)}と呼ばれる幾つかの道観があり、小規模な市街地を形成していた。道に関しては、『宜賓街区図志』の記載によると宜賓城は明洪武 6 年 (1373 年) に石の城壁が作られ、道路も大規模な改修が行われた。道の基本的な形は「井」字型であり、道幅は 4 丈(約 13m)であつた^{注 3-5)}。図 3-3 の「主要道路」で示した通りの道であると考えられる。

酒造工房は、『五糧液志』の記載によると、専門化した酒造工房が明代から出現した。表 3-1 の工房 1-3 は明代からの工房だが、設立当時 3 つの工房の窖の数合計は 10 口ほどであつたという^{注 3-6)}。専門化した酒造工房の出現時期は瀘州と同じ頃だが、規模は比較的小さい。そして清代になると、表 3-1 で示した通りに 1-9 番の計 9 軒の酒造工房が増えるが、注目すべきなのは工房 1 の長發生工房である。図 3-3 でもわかるように長發生工房は役所の隣に建っていた。工房の工房主は叙州府(当時の宜賓一帯の地名)の

通判(食糧運送、水利などの事務を管理する役職名)の尹氏であった。この工場の規模は大きく、当時中国西南地区で一番生産量が大きく、名の通った工場であったという。また長發生工場が生産した酒は一般販売や移出販売だけではなく、宮廷への貢ぎ物としても提供されていた。当時の長發生工場建物は2階建てのもので、3つの入り口があり、街道に面した部屋は9つ、その中の5つは店舗であった(「長發生工場考査報告」の記述による)。この記述と現在の改修された長發生工場の建物から見ると、長發生工場は宜賓城の一番の中心街路である鼓楼街に接して立地し、広い面積の店舗を設けて、酒を製造販売した。他の工場については後の民国時期で分析を行う。

表 3-1 前近代酒造工場一覧表^{注 3-7)}

番号	工場名称	民国期 工場所在地	現在工場 所在地	民国時期 店舗所在地	窖の 数	窖の 建造年代
1	長發生	鼓楼街 32号	鼓楼街	工場場所と同じ	16	明、清
2	利川永	順河街 144号	濱江路	工場場所と同じ	13	明、清
3	徳勝福	走碼街 88号	上走馬街 (工場現存せず)	工場場所と同じ	8	明、清
4	劉鼎新	外北正街 195号	北正街	工場場所と同じ	14	清
5	鐘三和	東濠街	東浩街	小北街13号	11	清
6	張萬和	東濠街	東浩街	小北街63号 北正街27号	10	清
7	趙元興	走碼街 87号	上走馬街 (工場現存せず)	走碼街87号 南街6号	7	清
8	全恒昌	順河街	濱江路	外南街27号	7	清
9	聽月樓	順河街	濱江路	—	6	清
10	萬利源長	馬家巷	長春街	下北街52号	10	民国中後期
11	廣大	南街	南街	—	6	民国中後期
12	天賜福	順河街	濱江路	—	6	民国中後期
13	吉慶	外北正街	北正街	—	4	民国中後期
14	吉鑫公	文星街	文星街	—	3	民国中後期

民国時期の宜賓では、瀘州と同様に日中戦争の防衛線が内陸部に後退したことによる商業活発化の影響を受け、市街地が変化した。先ず城壁について、図 3-4 を見ると、1943

年では東側の約半分が撤去されたが、図 3-5 のように 1948 年頃には東と北の全部、そして南の一部の城壁が撤去され、かなり開放的になっていた。市街地に関しては城の北、そして西にも大規模な市街地が展開されていた。1948 年頃には宜賓半島の東はほぼ全部市街化されていた様子が見られる。

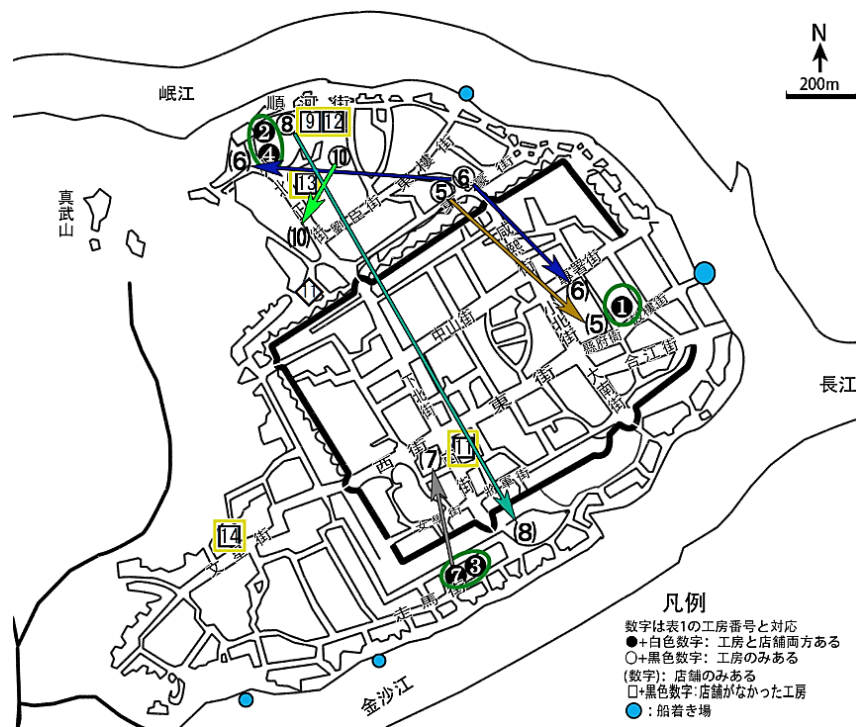


図 3-4 民国時期 宜賓酒造工房分布図(1943年) 注 3-8)

基本的な「井」字型の道路は中山街、下北街、東街、小北街(1943年頃の道路名)の名称を受け継いだ道路だが、図



図 3-5 民国時期 宜賓市街地復原図(1948年) 注 3-9)

3-5 では中正路、林森路のような「OO 路」と名称変更したものがあり、車道整備が行われたことが窺われる。そしてこの「井」字型の道路は北と西に延ばされ、城外の市街地の主要道路になっていたことも分かる。

酒造業については、表 3-1 を見ると、酒造工房が 14 軒に増えていたことがわかる。そして清時代に規模が大きかった 1 番の長發生工房は依然他の工房と比べて高い地位にあったと推測できる。民国期にこの工房を経営していたのは尹氏の 14 代目の尹伯明で、当時宜賓商会の常務理事、四川商業連合会の理事を勤めていた。地方の商業界を動かせる立場であった。長發生工房の周辺には 5、6 番の酒造工房の店舗が設置されていたこともわかる。5、6 番の工房は北の城壁外にある街区東濠街付近にあった。両方とも 10 口程度の窖を持ち、生産規模が比較的大きな工房であった。しかし東濠街付近はそれほど商業が盛んではなかったため城内に出店したと考えられる。城内では南街付近にも一つの酒造工房と一つの酒販店舗がある。民国以前に城内で酒を生産していたのは長發生工房しかなかったが、民国期になって 11 番の工房が作られた。ただし、規模は比較的小さい。これに対し、城外では先ず岷江の川沿いにかかなりの数の酒造工房が集中していた。比較的古く、規模の大きい 2 番と 4 番では工房と共に店舗も開かれていた。10 番など人の行き来が比較的小さい場所に建つ工房は主要道路に店を開いていた。また、埠頭と茶館、食堂に近かったからか、9、12、13、14 番などは『五粮液志』によると特に店舗を開いていなかったとみられる。南側にある金沙江の川沿いには 3 番と 7 番の酒造工房があった。両方とも工房と店舗は同じ場所に開設されていたが、7 番は城内にも出店していた。

全体として見ると、古い工房は基本的には工房と店舗と一緒に展開されていた(「前店後場」形式)。その後は工房と店舗が分離する販売方式の工房が出現し、更に店舗を持っていない工房が出現した。そして川沿いで酒を生産する酒造工房が増加した。原因としては、宜賓の城内の井戸水が塩、硝などを含んでおり、酒の生産には向いてなかったからと言われている。酒造りには川の水を用いていた。岷江の水は金沙江と比べて、増水期に水が濁る期間が短く、酒造りにより向いているため、多くの酒造工房は岷江の川沿いに立地した。明から清までの長い間、城内で酒を生産していたのは長發生工房のみであった。『五粮液志』によるとこの工房も川の水を使って酒を生産したが、前述した経営主の背景から考えるとこの工房は特別に城内での立地を認められた可能性がある。これに対し 5、6 番の工房は認められなかったから店舗と工房が分離した経営方式を取ったのではないかと考えられる。一方、金沙江側の工房数が少ないのは走馬街の商業が盛んになった時期が早く、会館などが多数存在したことから、民国以降に新しい工房を作るのが困難であったのも原因だと考えられる。店舗を持っていない工房の出現は水運の発展と会館、茶館などの増加により搬出と会館などに酒を供給するだけで経営が成り立つようになったのが理由だと考えられる。

全国的に見て、当時の宜賓酒造業はある程度名が通っていたが、都市に大きな影響を

与える程の規模には至ってなかったと考えられる。表 3-1 を参照すると当時から現在に残された窖は合計 113 口ある。もちろんその後の生産状況や保存状態にも影響され、実際的には民国時期の窖の数はこの数字より多いであろう。しかし当時の生産量全国一である瀘州の合計 1617 口(数え方が異なる可能性がある)と比べると、産業規模の違いがわかる。経営方式も瀘州の基本的に「前店後場」形式を取っていたのに対して、数口の窖しか持たない小さな店が大半であり、大規模生産のための整備も必要なかったと考えられる。

3.3 計画経済時期(1949-1980年)の宜賓市の酒造業の変化と都市形成

1949年に中華人民共和国が建国し、計画経済が実施された。宜賓でも瀘州と同様に建国前の個人経営であった酒造工房が国有化され、現在の五粮液会社へと成長していく。宜賓の場合、都市が僻地に位置していたこともあり、建国前での社会の混乱に乗じた匪賊の人災が長い時期続けた。そのため食糧の供給も不安定で、酒造業が致命的な打撃を受けた。1948年から半数の酒造工房の生産停止が余儀なくされた。1948年の時点で宜賓城内の酒造工房の数は14軒から7軒に減って、窖の数も140口余りから60-70口になった。そして1949年前後になるとほぼ全ての酒造工房が生産停止したと『五粮液志』が記載している^{注3-10}。

建国後の1950年12月29日には「宜賓市大曲酒醸造工業連営社」(公私共営協同組合)が設立され、そして1952年5月に「国营第二十四酒場」が成立して、同年11月「国营第二十四酒場」が当時宜賓市街内で一番大きかった「長發生」工房以外の酒造工房を買収し、「長發生」工房についてはレンタル形式で使用权を得た。こうしてで国有会社としての五粮液が誕生した。瀘州市の酒造業の国有化と比べて見ると、国有化にかかった期間が短く、過程も単純であったことが分かる。表3-2

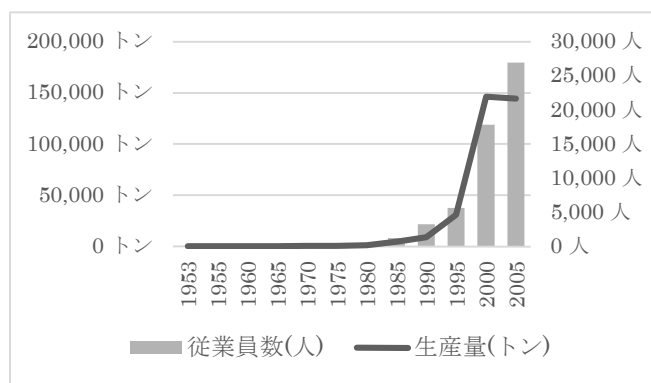


図3-6 五粮液生産量と従業員数変化図

表3-2 1953-2005年五粮液会社主な経済指標一覧表^{注3-11}

年度	生産量(トン)	従業員数(人)	売上高(万元)	利益(万元)	資産総額(万元)	販売量(トン)
1953	113	26	16.68	10	3	
1955	140	24	0.53	1	3	
1960	302	129	46	26	34	143
1965	354	133	113	29	90	392
1970	431	193	131	74	110	411
1975	542	250	158	55	249	436
1980	1,110	464	423	270	920	969
1985	4,440	1,243	2,147	980	3,531	3,966
1990	9,038	3,237	18,890	8,062	25,715	8,067
1995	30,743	5,647	167,462	57,224	163,239	43,863
2000	146,306	17,832	680,523	220,634	902,822	144,293
2005	144,261	26,950	1,565,932	418,134	1,919,405	140,868

を見てみると、成立当初の五粮液会社は従業員 26 名、酒年間生産量 100 トンほどしかない小さな会社であった。そこから工場整備、規模拡大が行われるが、1980 年以前の従業員数や生産量などの伸びはとても穏やかであった。

工場などの施設については、図 3-7 を見ると宜賓半島上では外北正街付近と小北街の東側、元北城壁付近、走馬街の四ヶ所に工場施設が分布していた。表 3-2 の生産量などから見て、基本的に昔の工房の施設を利用した生産であり、ほぼ拡張などもなかったと考えられる。走馬街の工場(表 3-1 の 3 と 7 番である元徳盛福、趙元兴工房)については、『五粮液志』の年表によると、1966 年に金沙江が特大規模の洪水となり、走馬街の工場と南岸生産工場の一部が浸水し、大きな被害を受けた。そして 1967 年には走馬街の工場の窖泥(窖の中にある泥は酒の原料を発酵される微生物が生存する場所であり、酒の生産上とても重要な

ものである)を全部南岸生産工場に移したと記載している^{注 3-12)}。

『五粮液志』と他の史料では走馬街の工場に関するその後の情報はないが、現在その場所は 1997 年に成立した「四川景盛グループ徳盛福九粮醸酒株式会社」の工場になっていて、酒を生産している^{注 3-13)}。

ただし、「宜賓晩報」2013 年の報道では「徳盛福工房の元にあった場所で再び酒を生産することは…(以下略)」^{注 3-14)}と書か



図 3-7 1978 年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布^{注 3-15)}

れ、1967年から工場が長い時期酒の生産が行われていない可能性が高い。『五粮液志』の記載でも、当時の旧市街地の工場については以上の四ヶ所のみであり^{注3-16}、他の前近代に酒造工房があった場所には特に工場が建てられていなかったと考えられる。表3-1と照らし合わせて見てみると、民国中後期から出現した規模の小さい工房の施設はほとんど継承されなかったことがわかる。原因としては元々窖の質(古い程度など)と生産停止によるダメージ(『五粮液志』の記述によると建国前は基本的に小規模の工房の方から生産停止していくであった)などに影響されたと考えられる。

旧市街地以外では金沙江の対岸にも工場区(南岸生産工場)が建設されていたことが図3-7でわかる。南岸生産工場は国家が専用粋資金60万元(約1,110万円)を用いて、1960年から建設を始めたものである。計画用地は1.8万㎡、計画建築面積は約1.5万㎡であり、年間生産能力が500トンの建設計画であった。工場区には前工程生産施設(原酒生産施設)と後工程生産施設(瓶詰め、包装施設等)以外に従業員宿舎や食堂なども計画され、独立生産が可能な工場区計画であった^{注3-17}。しかしこの時期は中国の全国的な大災害と文化大革命が重なった時期であったため、建設には15年の時間が掛かった。1975年の時点で会社の酒の年間生産量は542トンであり、従業員は250人であった。

この時期の市街区については図3-7を見ると、建国後約30年が経過した状態だが、大規模な市街区拡大がなかった。道路については民国時期では既に基本的な形ができていたので、旧宜賓城の範囲内ではそれほどの変化が見られなかった。城外の西では「人民路」が新設され、その周辺に市政府、人民公園、体育館、バス駅などの公共施設が建設され、都市の中心が西に移動していたことが窺える。そして旧宜賓城の北では、民国時期にもあった外北正街の隣に新しい道路が建設され、1973年開通された「岷江公路大橋」を通じて岷江を渡れるようになった。「岷江公路大橋」は現在の宜賓市内で一番交通量の多い橋だが、1978年の時点では岷江の北岸の区域には小規模な市街地しかなく、商業施設などもほぼない状態であった。金沙江南岸についても小規模な市街地が開発し始めていたが、地図に記載されるほどの道路はまだ整備されていなかった。またこの時期は南岸生産工場も建設が完了していたが、工場区の周辺も市街地は形成されていない状態であった。

鉄道については、宜賓は四川省と貴州省を結ぶ鉄道線の重要な節点ということで、1958年という比較的早い時期に鉄道が開通され、主に貨物乗り換えの駅として使用されていた^{注3-18}。ただし宜賓市内の物資などを大量運出する役割は担っていなかった。

3.4 市場経済時期(1980-現在)の宜賓市の酒造業の変化と都市形成

3.4.1 市場経済過渡期(1980-1992年)

1978年に改革開放政策が提出され、1980年には鄧小平が政策について演説を行い、具体的な方向性を決めた。五粮液会社の場合、市場経済時期に入っても、計画経済時期の制度が長く続いたと考えられる。『五粮液志』の従業員制度に関する記載によると、

「(建国後から)1992年まで(五粮液会社)は計画経済時期の従業員制度を実施した。やり方は企業が労働計画を作成し、政府が計画を確認した上で(政府機関である)労働部門に引き渡して、労働部門が事前計画した労働力に関する全体計画と照らし合わせて、調整を行う。その後労働部門が労働力を募集・試験し、採用する。この制度の悪

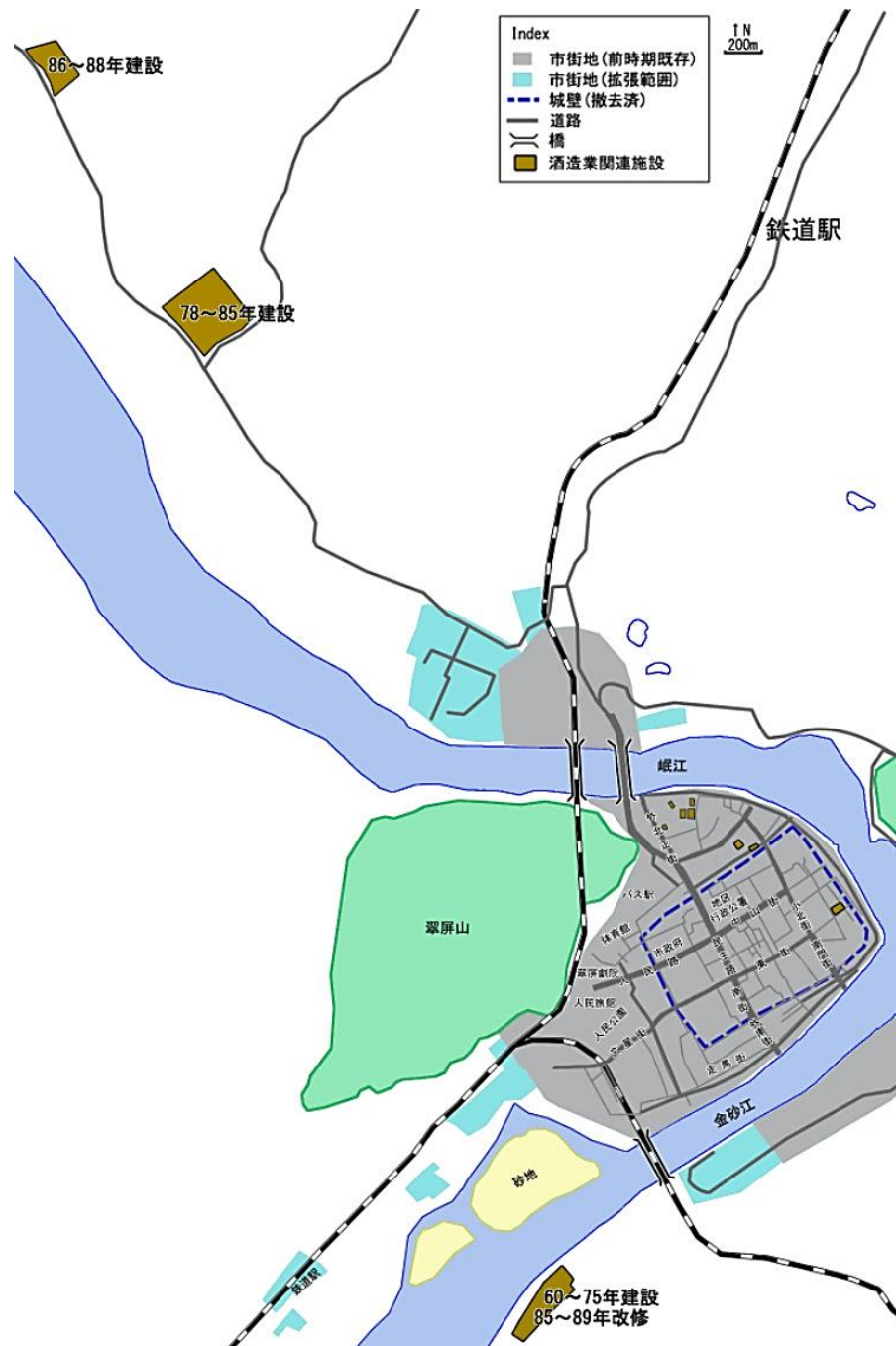


図 3-8 1990年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注 3-19)}

い所は労働部門が会社の実際の状況を考慮しなかったことである。例えば会社は酒を醸造する労働者を募集したい場合は、職種上男性しか適していないが、全体計画では必ず男女が一緒に仕事をする方針があるため、女性も酒を醸造する労働者として入社する。しかも会社は職位を調整する権利もなかったため、とても不便であった」という^{注 3-20)}。

従業員制度がそうであったように、市場経済過渡期では会社の資金管理制度、販売制度なども徐々に市場経済に適したものに変わっていくが、工場建設は図 3-8 のように大規模に行っていた。

先ず岷江北岸に 1978-1985 年に建設された工場区の建設経緯は、会社が工場拡大計画を制定し、市の革命委員会(当時の人民代表大会の機構であり、同時に地方政府の権力を持つ組織でもある)がそれに同意し、約 10 万²の土地を会社に無償に与えるというものだった。この工場建設は 1,008 口の窖を新設し、酒の生産能力が 3,000 トン増加した^{注 3-21)}。そして 1986-1988 年に建設された工場区については、国家計画経済委員会、商業部、そして四川省商業部が建設計画を承認し、国から建設資金を借りて建設したものである。土地については宜賓地方行政公署が土地徴用の許可を出した。徴用された土地の面積は 17.3 万²であった。建設投資額が 1,812 万元(約 3.35 億円)で、工場の面積は約 7.6 万²であった。それにより 2,500 トンの酒の生産能力が増えた^{注 3-22)} という。徴用された土地面積は実際の工場建設面積と比べて相当余裕があるように見える。

それ以外にも会社は自ら資金を集めて、南岸工場の設備改造や博物館、従業員生活関連施設を建設すると共に、物資運送チームを設立したという。

この二つの工場区の建設は現在の五粮液の岷江北岸にある超大規模工場団地の基礎になったものでもあるが、建設経緯から見ると、この時期の国と自治体の行政や管理システムもかなり変化していたことがわかる。会社の建設計画を許可した機構も全く異なったり、関わる機構の数も異なっていた。

そして工場区の建設位置についてだが、図 3-8 を見ると、南岸工場がそうであったように、岷江北岸にあるこの二つの工場区が中心市街地とかなり離れていたことが分かる。1978 年の図の市街地と対照して見ると、都市の郊外よりも遠い場所に位置していた。

『五粮液志』の土地徴用に関する記述での、〇〇生産隊(当時も農村の末端組織^{注 3-23)})の土地を徴用したという書き方から見ると、政府側は近辺の農村の産業の育成或いは職場創出の目的もあったと推測できる。

この時期の市街地は、旧城区と金砂江南岸では鉄道に沿って小規模に拡大し、岷江北岸では橋の建設より小規模な新市街地が形成されたが、1978 年と比べて大きな変化はみとめられなかった。

3.4.2 市場経済適応期(1992-1998年)

1992年に会社の従業員制度などが大きな変革を迎え、五粮液会社は、更に早いスピードで拡大していくことになった。『五粮液志』では1992-1998年を会社の高速発展時期としている。この時期には基本的に会社が自ら資金を調達し、多くの建設を行った。原酒生産のための窖を新設するのはもちろんのこと、老窖会社と同じく包装にも力を入れて、製品ラインのランク別で6つの瓶詰め・包装工場区を新設した、1から2区は高級ラインの酒の瓶詰め・包装工場区で、3区はアルコール度数の低い製品の瓶詰め・包装工場区である。4、5区は下のラインの酒の瓶詰め・包装工場区で、毎年10万トン以上の製品の瓶詰め・包装に対応できる。6区は1997年に建設された瓶詰め・包装工場区であり、ハイエンドの製品専用の工場区であった^{注3-24)}。包装以外では電力供給施設、原料・水貯蔵施設、原酒の貯蔵施設及び他の生産サポート施設も整備された。この時期における『五粮液志』に明記された投入資金の合計額は約26億元(約482億円)であった^{注3-25)}。この時期の貨幣価値を加味すると瀘州で2006年から建設された「集中発展区域」の120億元(約2.2千億円)のプロジェクトにも劣らない規模と考えられる。しかし瀘州の方は四川省出資で、宜賓の五粮液の場合はほぼ全額会社が資金を調達した。この時期にほぼ自力でこれほどの資金を調達できた会社の経営には目を見張るものがある。

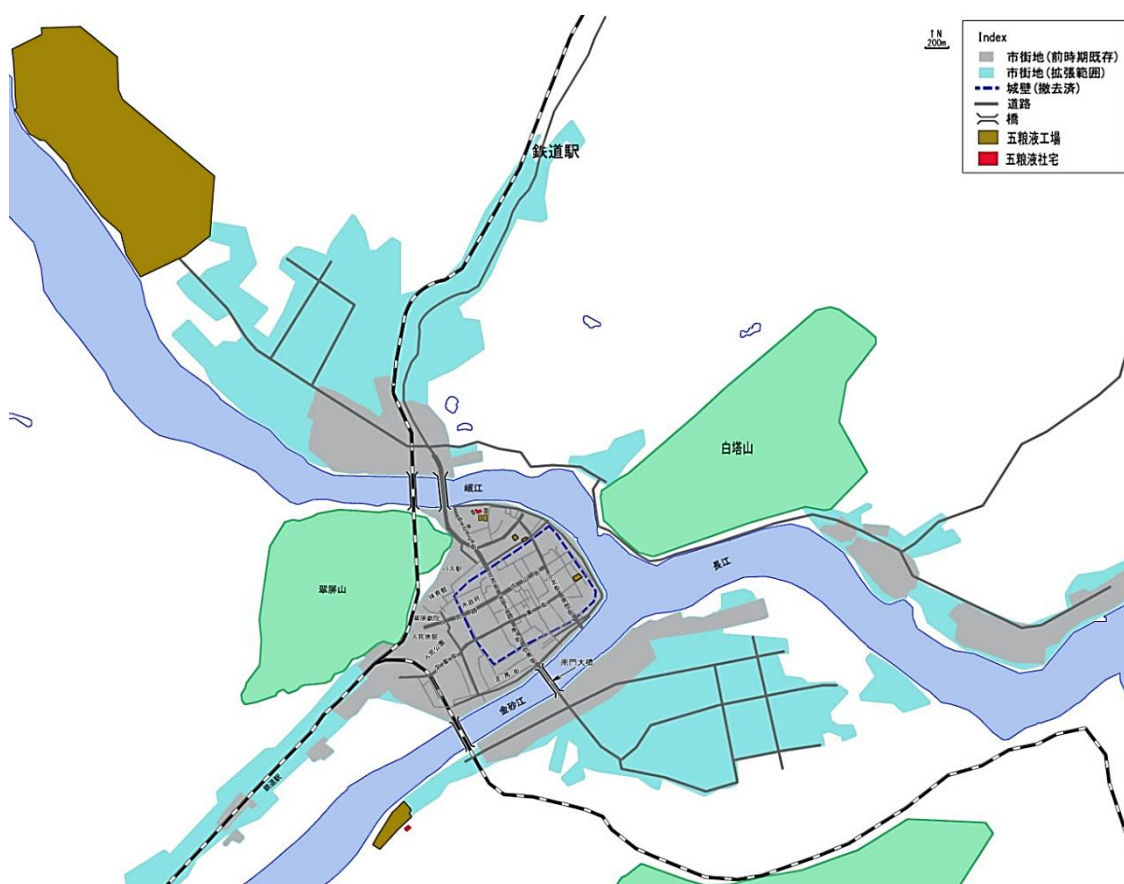


図 3-9 1997年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注3-26)}

図 3-9 を見ると 1997 年の時点では岷江北岸の区域では既に旧市街地の大きさに匹敵するほどの大規模な工業団地ができていた。短期間でこれほどの建設ができたのは巨額の資金が確保できたこと以外に前時期に大規模な土地を入手できたことも関係していると考えられる。これらの建設により、五粮液会社の生産能力とブランド力も確実に上昇し、1995 年から 20 年連続で「中国最もブランド価値のある商品ランキング」の食品業界で一位、2014 の全業界ランキングでは三位となった^{注 3-27}。

市街地については、市が酒造業から得た税金も多額となって、相当の面積の拡大が見られた。宜賓半島の部分では鉄道に沿って市街地が形成された様子が見られる。この沿線の市街地の展開の仕方を見て、都市も徐々に力をつけて、鉄道駅も貨物乗り換えの駅ではなく、一般的な都市の駅として役割を發揮していると推測できる。また、旧市街地の西南側では 1990 年の地図で見られた砂地が消えている。この時期には川の改造工事や埋め立ての工事などが行われていたと考えられる。

金砂江南岸の部分では、1990 年 10 月に開通した「南門大橋」により宜賓半島と金砂江南岸が便利に行き来できるようになって、新市街地も開発された。岷江北岸についても鉄道沿いと五粮液工業団地に向けて新しい市街地が展開している様子が見られる。

この時期には、宜賓の市街地は一気に拡大され、現在の宜賓市の宜賓半島、(金砂江)南岸、(岷江)北岸からなる都市構造が形成されたが、酒造業による収入の面が大きな影響を与えたと考えられる。そして北岸については工場以外の市街地の展開方向も工業団地の影響を受けたと考えられる。

3.4.3 市場経済進展期(1998年-現在)

1998年に五糧液会社は会社の制度を変更し、株式公開を行い、グループ会社となった。会社の正式名称も現在の「五糧液グループ株式会社」となり、更なる業務拡大が行われた。五糧液会社の株式化の時期は老窖会社の1994年と比べて遅い方であるが、

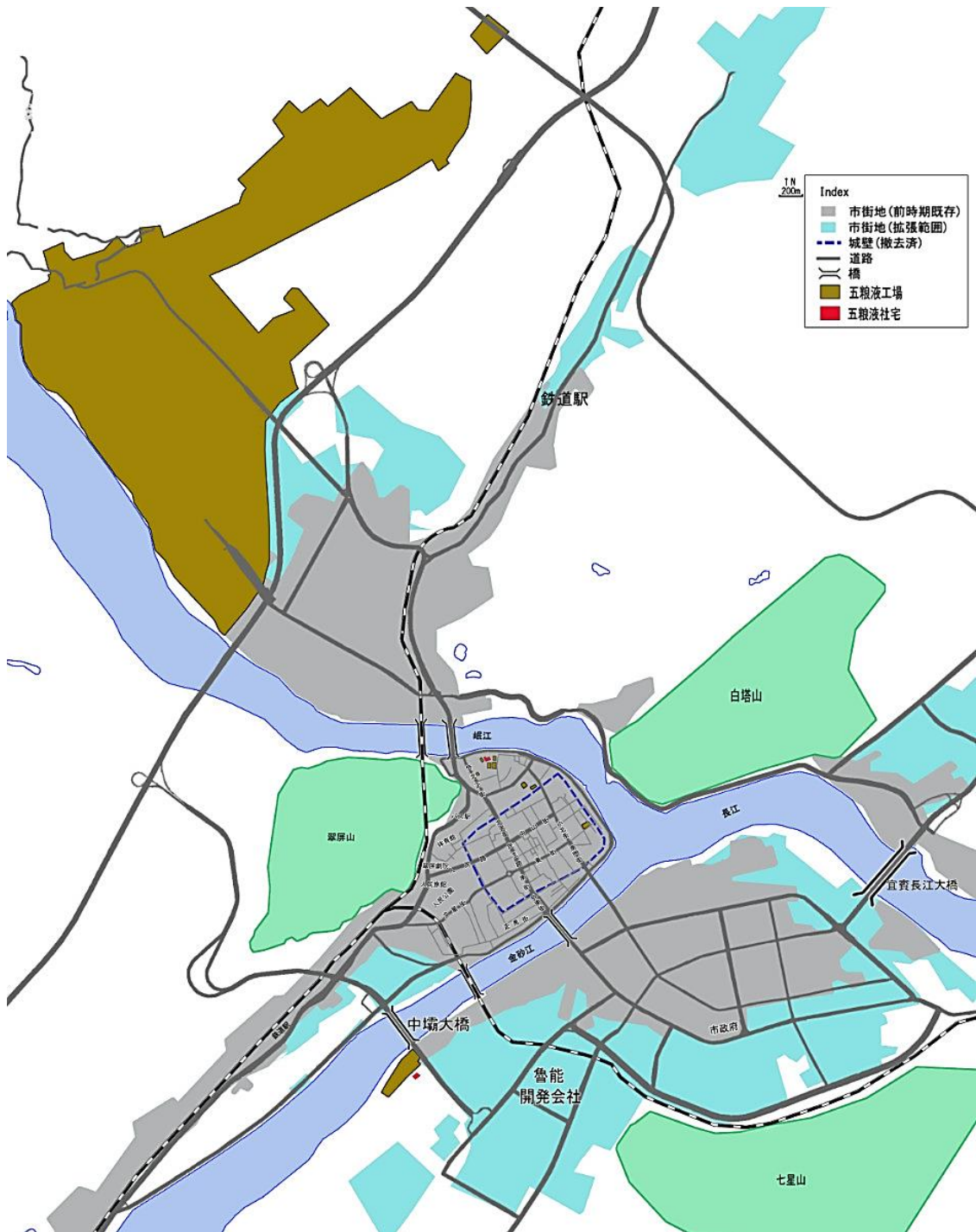


図 3-10 2008 年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注 3-28)}

1992年-1998年の五粮液会社の成長は凄まじく、ブランド価値ランキングでは1998年の株式会社化前にも既に当時株式会社化した老窖会社より上であった。この株式会社化は会社の経営システムなどが市場経済に適応した結果ではあるが、実際には社会から発展するための資金を集めることが主な目的であると言われている。老窖会社も上場を通じて資金を得、新会社本部や包装工場を整備したように、五粮液も「(会社は)上場により、豊富な資金を手に入れた。そして他の会社を買収・合併し、外部へ投資することで資本を増やすことに成功、会社の資産が更に大きくなった」^{注3-29)}と『五粮液志』が記載している。

買収・合併した主な会社には元「宜賓市印刷総公司」など酒の包装など後工程でサポートになる企業があるが、買収した後は会社自身の酒などの印刷だけに使うのではなく、更に設備などの整備に資金を投入し、印刷会社としての実力をつけ、全国から印刷オーダーを受けるようにしている。それ以外にも製薬会社や機械製造会社を買収し、印刷会社と同じような戦略を取っている。

この時期の五粮液会社は関連会社の買収・合併などを行っているが、酒造に関してももちろん大量の資金を投入し、生産能力の向上や技術の開発、従業員の生活施設の整備、工業団地の観光客向けの景観整備を行っていた。その結果、出来上がったのは図3-10で描かれている岷江北岸にある超巨大な工業団地であった。

この時期の市街地については旧市街地では宜賓半島南西にあった元砂地の部分に市街地が広がった様子が見られる。金沙江南岸でも市街地の範囲が相当拡大されていた。

金沙江南岸の東半分は川と山を境界とする一帯が市街地ではほぼ全部埋め尽くされた様子が見られる。また宜賓長江大橋が2002年に建設されたことも確認される。市政府は南岸の市街地の中心部に移設され、新中心市街地として機能し始めていることも窺える。この南岸の新市街地の西南の部分の開発は「山東魯能グループ株式会社」^{注3-30)}(五粮液会社と関係性なし、以下「魯能」)が関わっていた。この時期に宜賓市都市計画局に勤めた人物^{注3-}

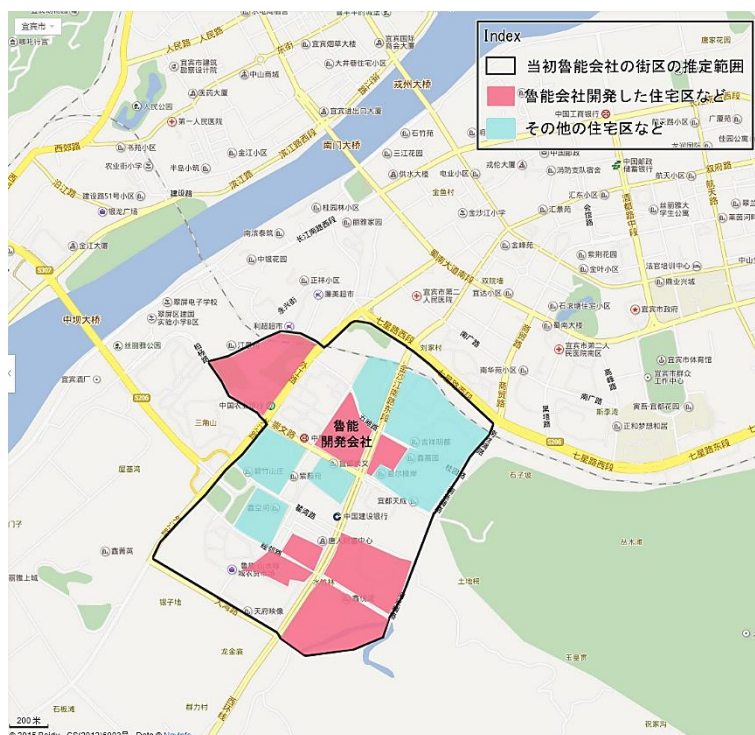


図3-11 魯能街区範囲図(2015年)^{注3-32)}

31)の話によると、当時宜賓市政府は通常よりかなり格安の価格で土地を提供する代わりに、街区の道路整備、緑地整備などを開発会社が受け持つと条件をつけた。その条件に同意し、魯能会社が大面積の土地を獲得した。しかし魯能会社が土地を獲得した後、それらの道路整備にはそれほど手を付けずに、更に土地を転売するなどの行為も始まった。その状況を見て市政府は魯能会社が契約違反をしたとみなし、半分以上の土地を強制回収したという。図 3-11 を見てみると、この区域は魯能の名前がついた住宅区、広場、商業施設が相当の面積を占めるが、別の開発会社が開発した住宅区なども混ざっている。また街区の名前については、図 3-11 の魯能開発会社の街区は「魯能 D 街区」で、隣は「魯能 C 街区」になっているが、BAIDU 地図のデータでは魯能 A や B 街区などの名前の街区はない。先のヒヤリング結果の裏付けになると考えられる。岷江北岸の工場区域以外の市街地については五粮液の大規模工場団地の影響で、工場団地周辺に市街地が形成された様子も見られた。

この時期は五粮液会社の高速の発展時期であり、グループ化と株式公開により、宜賓市内の多くの会社を合併し、市の財政収入などの生命線を握るようになったと言える。一方市政府側は五粮液会社の一極化を避けるためにわざと外部から会社を招いて、街区開発をさせたという可能性も考えられる。

2008 年後でも五粮液会社は拡大し続けて、都市への影響力も強まる一方であった。図 3-12 を見てみると北岸にある五粮液の工業団地が更に拡張され、宜賓中心市街地に匹敵する規模になっている(写真 3-1 で映った部分は北岸工業団地の中心部にある山から南に眺望する風景で、画面に収まる施設の全てがこの工業団地のものである)。そして五粮液北区計画(2013-2030)⁴⁷⁾を見てみると、更に北へ拡張する計画が立てられており、2013-2030 年宜賓市全体計画⁴⁴⁾でもその用地が明記されている。この時期の北岸工業団地は普通の工業団地と違い、一部は観光地として一般客に開放されているのが特徴であり、観光整備も行われている。そして団地内には会社が運営しているバスや団地内だけを走っているタクシー(宜賓市内のタクシーとは塗装で区別されている)などもある。

その他団地内では従業員のための生活施設や商業施設もあり、観光客向けの酒を販売する商業施設もある。もちろん生産面



写真 3-1 五粮液北岸工業団地^{注 3-33)}

から見ても、入口に本社や酒の博物館、観光案内センターがあり、原酒生産などの前工程生産施設、瓶詰めや包装などの後工程生産施設、酒の瓶や化粧箱などの生産サポート施設、原酒や原料、水などを貯蔵する施設、電力などの施設なども全部取り揃えられて

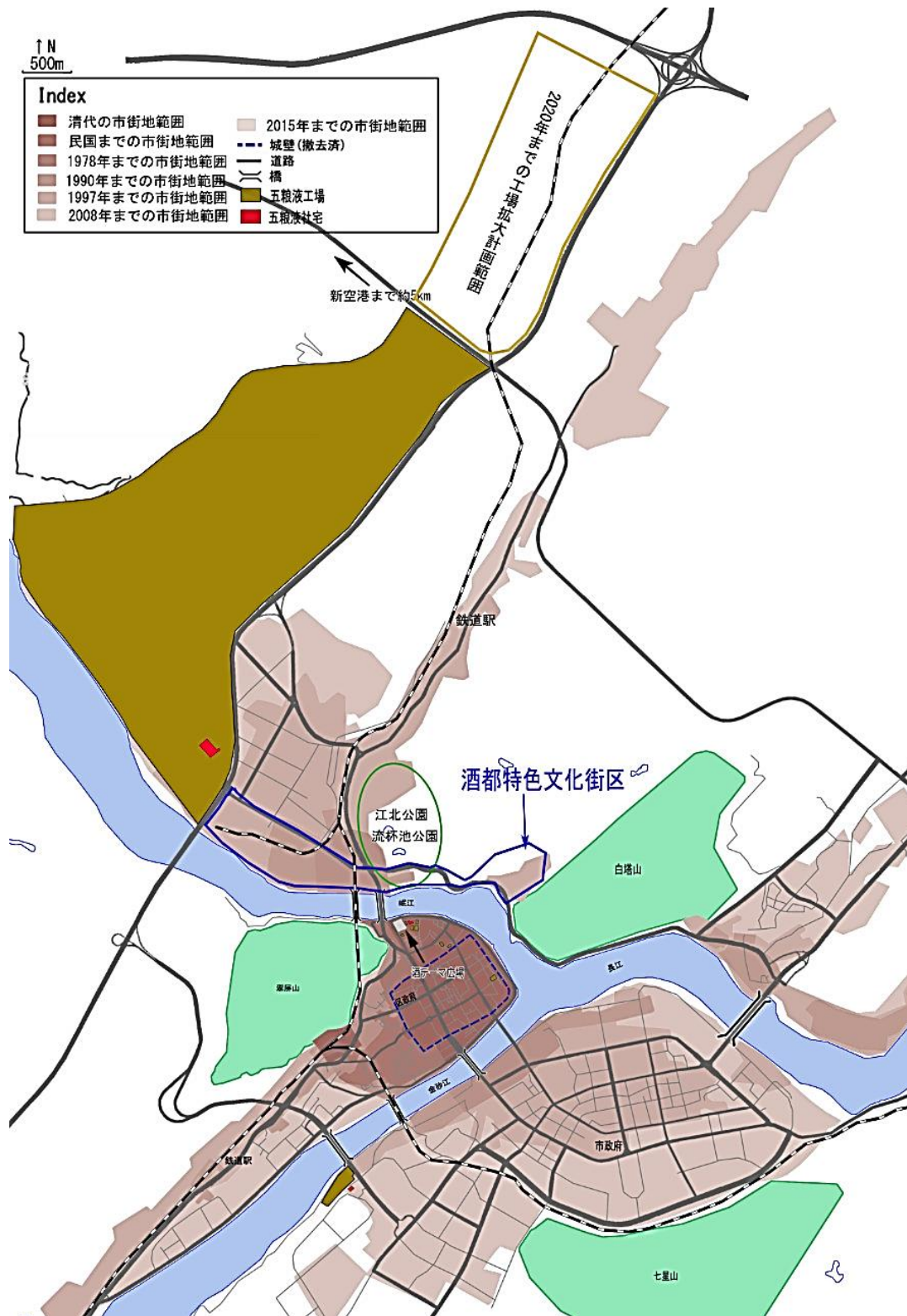


図 3-12 2015 年宜賓市の街区状況と酒造工場の分布図^{注 3-34)}

いる。現在の北岸工業団地は独立可能な一つのまちとして成立していると言えよう。

市街地については、宜賓半島の西北部の川沿い部分が全部市街地で埋まった以外は、範囲上大きな変化は見られなかったが、酒造業に関する整備が数多く行われている。先ず図 3-12 の青い線で囲まれた「酒都特色文化街区」(以下：特色街区)の正式名前は「酒都宜賓・五粮液文化特色街区」である。特色街区は宜賓市政府が出資し、市政府が建設・整備中の酒をテーマとした街区である。総投資額は約 50 億元(約 925 億円)であり、2010 年から建設がはじまり、10 年をかけて完成する計画である^{注 3-35)}。図 3-12 でも見られるように、範囲内の一部は 90 年代以前に形成された市街地で、それらを纏めて区画整理し、再開発を行うものである。そして特色街区の建設に伴い、公園などの整備も行っている。図 3-12 の緑の楕円で示している江北公園、流杯池公園などがそうである。これらの公園も酒をテーマとしていて、公園の壁などはまちの酒文化に関する彫刻などがなされている。そして宜賓市の新しい空港の建設プロジェクト申請も 2012 年に国務院に許可され、建設決定された^{注 3-36)}。図 3-12 でも示したように、新空港は五粮液北岸工業団地から 5km 離れた所に建設されている。空港の正式の名称は「宜賓五粮液空港」である。この空港の名前は中国でも特別であり、初めて企業の名前が入った都市の空港である。「五粮液空港」の名前についてはネット上などでも色んな議論を引き起こし、法律の専門家からも異論が出されている^{注 3-37)}。空港の名前からでも明確に企業を宣伝する意図が見られたが、建設位置も空から北岸を眺められるように計画されていると考えられる。北岸の区域全体に酒をテーマとした都市計画が施されていると考えられる。以上のことから会社と都市の関係性が非常に強いと見られる。

空港や特色街区などを見ると、市政府が全力で企業を応援している様にも見えるが、実際両者の間には軋轢もあると推定される。宜賓市都市計画局の事務室へのヒヤリング^{注 3-38)}では市政府が北岸にある公園の整備時に地下駐車場などの問題でちょっと揉めごとが発生したという。それ以外は宜賓市全体計画要旨などの都市計画でも「菜壩区画(元空港があった区画とその周辺)は空港移動のため、都市建設が終始開始できていない状況である」^{注 3-39)}などの記述もあり、急速拡大していく企業の力と需要に市の方では諸々の困惑があるとも見られる。

3.5 宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

宜賓市では明代から專業化された酒造工房が出現し、現代の酒造業の基礎となる窖や当地に適した酒の醸造技術が造り出された。清代と民国時期でも酒造業は拡大していたが、都市全体に強い影響を与えられる規模には達していなかった。建国前と初期には経済崩壊、人災などの影響で市内の酒造業が一度全面生産停止し、そのためもあり、宜賓での酒造業の国有化は簡単且つ迅速に行われていた。そして会社は小規模であったこともあり、生産能力を補うため 1960 年から周辺の農村部で集中工場区域を建設し始めたが、自然災害や建設能力の制限で建設には 15 年も掛かった。市場経済時期に入った後の 10 数年、会社の経営体制はまだ計画経済時のものを維持したが、政府から多額の資金と土地の援助を受けて北岸に二つの工場区域を新設、南岸の工場区域も改修した。これにより会社が成長できる準備が整った。90 年代に入り、会社は計画経済の体制から脱出し、また経済の高速成長の機会を上手く利用し、一気に発展を遂げた。会社が調達した資金を用いて、北岸の工場区域を拡大した。それにより市街地の形成方向などにも影響を及ぼし始めた。市場経済進展期の 1998 年以降はグループ化と株式公開を行い、多額の資本を用いて宜賓市内の関連企業を買収し始めた。北岸の工場区域も更に拡大し、宜賓市の企業城下町化も着々と進んでいる。2010 年以降は市政府側も巨額の資金を投入し、特色街区、公園の整備を進め、そして空港の名前など様々の面から企業をサポートしている。

全体として、宜賓では会社は 70 年代から当時農村部にあった工場区を段階的に拡大させ、現在の北岸にある大規模工業団地を形成する一方で、旧市街地と南岸では工場の移転がほぼなく、小規模でもそのまま使用し続けている。この構成の形成原因を瀘州と比べながら考えて

みたい。

表 3-2 2014 年宜賓五粮液株式会社十大株主一覧表^{注 3-40)}

先ず現在の(株) 五粮液会社の持株割合についてだが、3.4.3 で記述しているように、五粮液会社が株式公開を行ったのは 1998 年で、株式公開した後、グループ会社へとシフトした。現在の資産総額は 464.09 億元

株主名	持株割合
1.宜賓市国有資産経営株式会社(国有法人)	36.00%
2.四川五粮液グループ株式会社(国有法人)	20.07%
3.全国社保基金組合	1.05%
4.中国建設銀行・博時主題行业股票证券投资基金	0.74%
5.生命人寿保險株式会社-保險商品	0.51%
6.中国人寿保險株式会社-保險商品	0.49%
7.中国人寿保險株式会社-配当	0.38%
8.泰康人寿保險株式会社-配当	0.36%
9.唐志毅(個人)	0.32%
10.中国工商銀行・融通深证 100 指数证券投资基金	0.28%
その他	39.80%

注3-41)であり、老窖会社の約3.5倍である。持株割合についてみると、宜賓市国有資産経営株式会社が最大の株主で36.00%、(株)五粮液会社の持ち株会社である(グ) 五粮液会社が20.07%であり、十大株主の中での国有法人が持っている株の割合は56.07%である。(株)老窖会社と比べて、宜賓市国有資産経営株式会社の持株割合は高く、持ち株会社である(グ)五粮液会社の持株割合が低くなっている。しかし、宜賓市国有資産経営株式会社 HP によるとこの会社は宜賓市国有資産委員会の代わりに株主の権利を行使するために宜賓市国資委が立ち上がった国有会社であり注3-42)、(グ) 興瀘投資会社のような活発にインフラ整備に関わっている訳でもないため、五粮液会社の方の経営自由度は老窖会社より高いであると考えられる。五粮液会社は国資委(宜賓市国有資産経営株式会社)により多くの株を譲ることで、会社の利益を市の利益をより直結させられるようになり、経営の自由と市の協力を持株権利で「交換」していると考えられる。

そして企業と都市のデータを「割合」で示した指標についても述べる。先ず現在五粮液会社の営業収益と宜賓市のGDPとの割合は、「宜賓五粮液株式会社 2014年年度報告」によると(株) 五粮液会社2014年の営業収益は約210.11億元で注3-43)、同年宜賓市のGDPは1443.81億元である注3-44)。従って五粮液会社の営業収益と宜賓市のGDPとの割合は $210.11/1443.81 \approx 14.55\%$ であり、瀘州の約3.42倍である。

次に現在の五粮液会社の従業員数と宜賓市の市区人口との割合についてみると、2014年の五粮液会社の従業員数は26,283人で、会社が退職金を負担している人数は1,410人である注3-45)。従って五粮液会社の従業員数と宜賓市の市区人口との割合は従業員数(万人)/市区人口(万人)で $2.63/89 \approx 2.96\%$ である。この割合は瀘州の約15.58倍である。しかし五粮液会社の現在従業員数は老窖会社の13.77倍もあるのに対して、会社が退職金を負担している人数は1.73倍しかない。このことは近年、従業員の数の差が激しくなったことを表していると考えられる。

最後に五粮液会社の現在の社有地面積と宜賓市の主な市街地の面積との割合についてみると、図上計測の計算結果は社有地面積が1004.67万㎡で、主な市街地面積が3419.79万㎡である。従って社有地面積(万㎡)/主な市街地面積(万㎡) $\approx 29.38\%$ であり、老窖会社の約3.32倍である。

以上の企業と都市のデータを「割合」示した指標から見て、五粮液会社は経済面、従業員数の面、工場区域面積の面の全ての面において都市に対して、瀘州の老窖会社より強い力を持っているとみられる。そして現在の五粮液会社の工場施設分布をより理解するために、ここで一度会社の工場施設に関わる大きな整備を振り替えてみよう。

表3-3 宜賓酒造業関連整備一覧表を見てみると、南岸の工場区は60年代から国の60万円の投資より建設したものである。そして70年代後期から80年代までは政府出資(推定)と国の融資(1,812万元)で、その後北岸の巨大規模工業団地となった工場区を整備した。この出資に関しては未だ計画経済時期から市場経済への過渡していた時期で、企業自身の資本も少なく、制度面、資金面双方で会社自身が出資する整備ができ

表 3-3 宜賓酒造業関連整備一覧表^{注 3-46)}

時期/ 年	整備事業	整備事業で建設された主な施設	整備資金の出所(額)	酒造業状況
建国前(-1949)				14 軒民営酒造工房あり、工房の規模も瀘州と比べて小さい(合計窖 113 口) 建国直前と直後(1948-1950)年では全市の酒造業は生産停止状態だった
1952				国は前近代の民営酒造工房の買収などを行い、一つの国有会社として運営し始めた
1960-1975	南岸生産工場の建設	前工程生産施設、簡単な後工程生産施設と従業員の生活施設	国(60 万元)	国の経済社会の原因で酒造業の発展は緩慢で、建設速度も低い
1978-1985	北岸工業区 1 の建設(元紅護大隊土地)	主に前工程生産施設	政府(推定)	それらの整備により、生産能力などが大幅上昇した
1986-1988	北岸工業区 2 の建設(学堂坂と大壩付近)	前工程生産施設、簡単な後工程生産施設と従業員の生活施設	国からの融資(1,812 万元)	
1987-1991	博物館、従業員生活関連施設、物資運送チーム	後工程生産施設と従業員の生活施設	会社	
1992-1997	北岸工業区の拡大整備	瓶詰め・包装を重点とした後工程生産施設、前工程生産施設	会社(合計約 26 億元)	生産能力とブランド力が急激上昇した
1998				会社がグループ化と株式公開を行った
1998-2005	北岸工業区の拡大整備	前工程生産施設、後工程生産施設、生産サポート施設、物流運送施設、社員厚生施設など	会社(合計約 92.27 億元)	会社が上場により、豊富な資金が手に入れて、関連会社の買収、合併を行った 工場整備と設備更新にも巨額の資金を投入した

ていなかったと考えられる。しかし 1992 年の会社の経営改革と株式公開などにより会社が急激に発展し、会社資本も潤沢となった。その後の工場整備は基本的に会社側が出資し、また額も前時期と比べられないほど膨大になり、その整備により、現在の北岸の巨大規模工業団地が完成された。この会社の出資も現在の影響力を形成した大きな原因であろう。会社の生産施設の空間分布については面積が大きいため、北岸工業団地に目が行くのだが、旧市街地に点在している前近代の酒造工房から改修された小規模な工場にも注目すべきである。旧宜賓城は相当厳しい地形条件の場所に立地していたため、現在の宜賓市の市街地も土地が足りない状態である。特に旧市街地に関しては、宜賓市全体計画では「寸土寸金」^{注 3-47)}と形容された。それでも小規模な工場が残されたのは企業にとってはそれが不可欠の生産施設であったからと考えられる。2.5 でも述べたように、

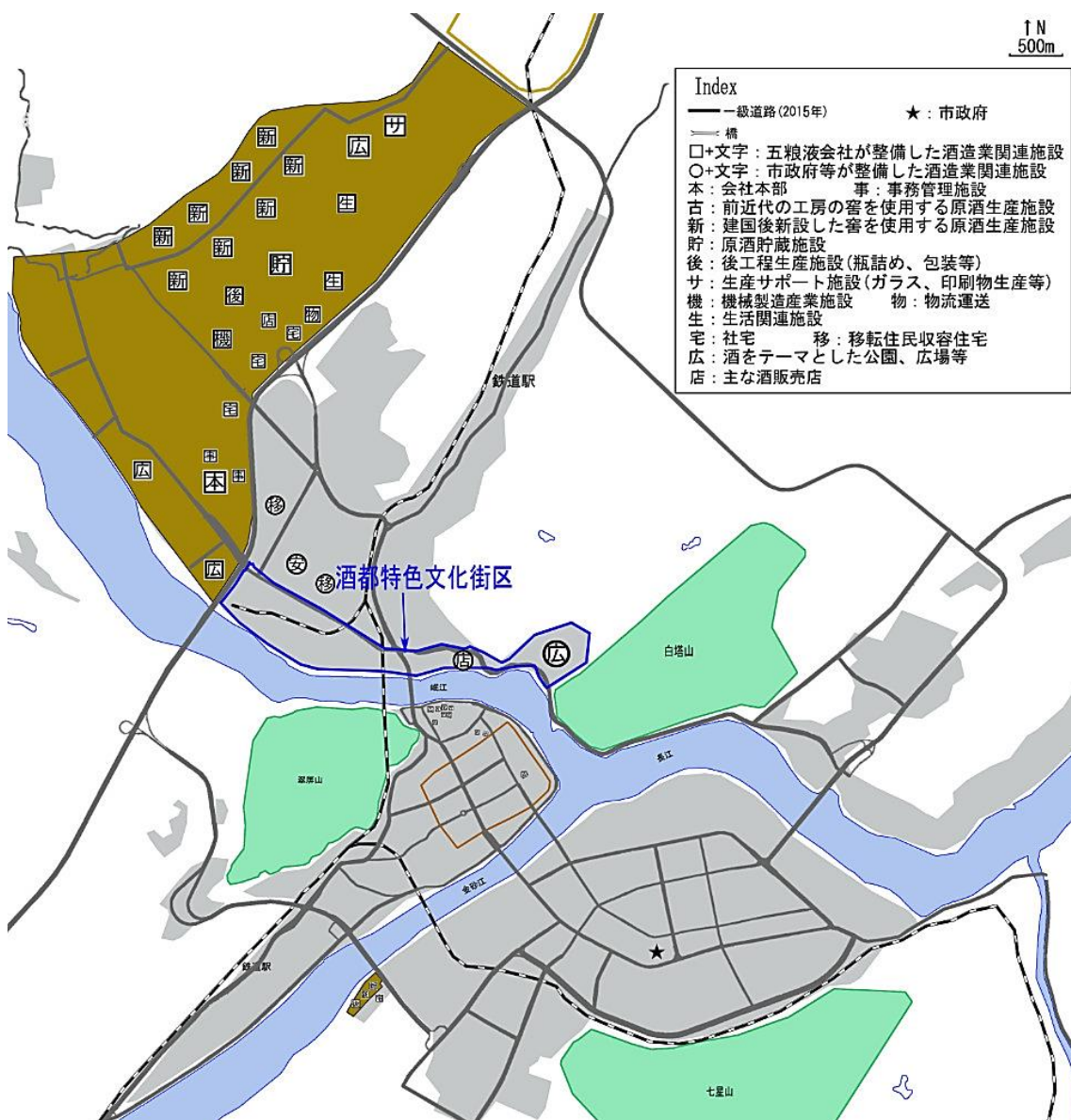


図 3-13 宜賓市酒造業関連施設配置図^{注 3-48)}

中国では「窖が古いほどいい酒が造れる」というのが一般的な共通認識である。「古い窖でしか出せない原酒の味があり、その原酒を他の原酒と配合し、最高品質の酒を生産している」と五糧液会社宣伝部はヒヤリングの中でそう述べた^{注3-49)}。そのため、前近代の酒造工房から改修された小規模な工場は会社にとって生産上必要不可欠なものであり、ブランド価値の源泉でもあると考えられる。この点は白酒醸造業の大きな特性の一つであると考えられる。

そして五糧液の南岸工場区域では60年代に建設した後、大規模な拡大はなかったが、現在の北岸の大規模工業団地が建設した後も生産を続けている。会社の生産利便性から考えると、好ましいとは言えないが、南岸の工場区には簡単な後工程施設があり、ある程度の独立した生産が可能である。そして建国初期に造られた窖が現在まで使用されると、窖の質も北岸工業団地で新設された窖と比べて格段よくなり、南岸工場区が生産し続ける最大の理由でもあると考えられる。

北岸の工業区は建設当時、都市周辺の農村部に位置していた。しかし企業の成長と共に工業区も拡大して行き、企業の力を以つてもう一つの都市を形成させたと言える。瀘州の集中発展区域との相違点として、立地は現在の都市の中心にかなり近いことと工業区内の施設を全て、五糧液会社が持っていることである。工業団地内には大規模な後工程施設と生産サポート施設があり、瀘州と比

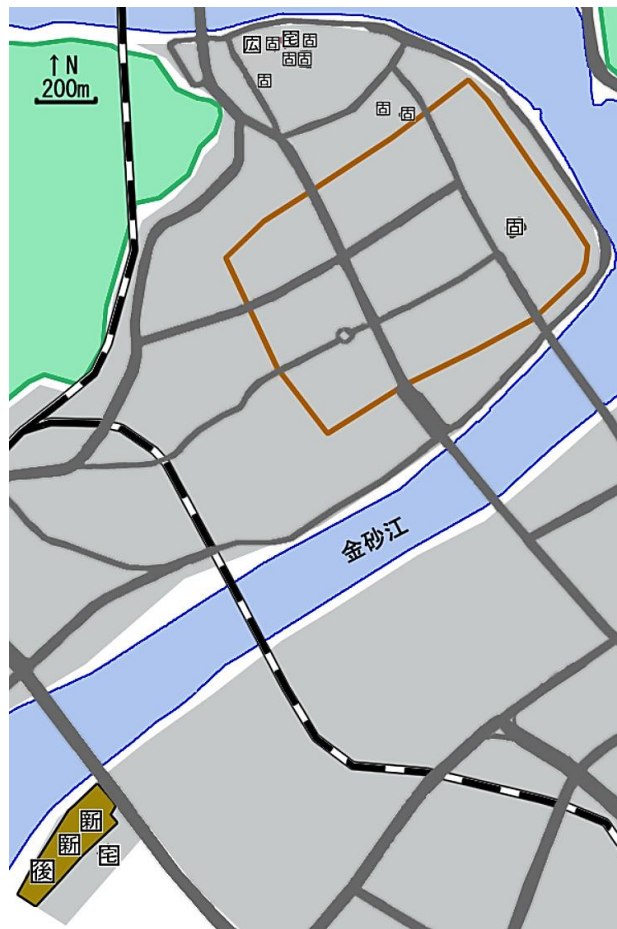


図 3-14 宜賓市酒造業関連施設配置図一部拡大

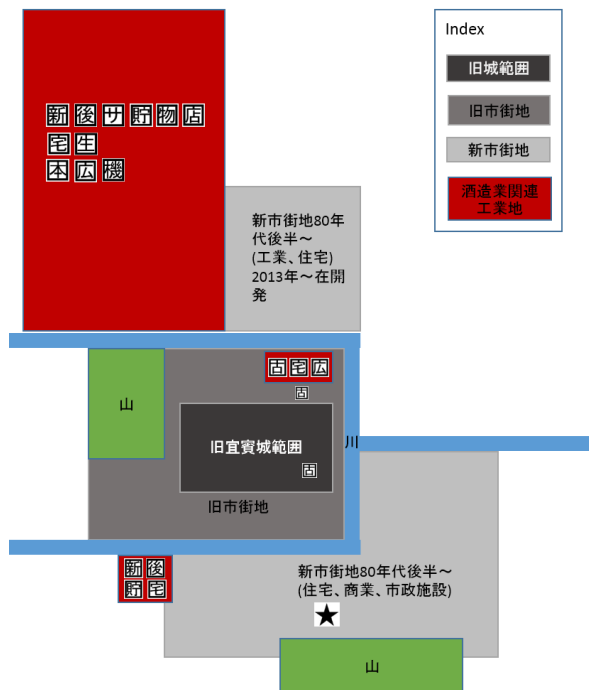
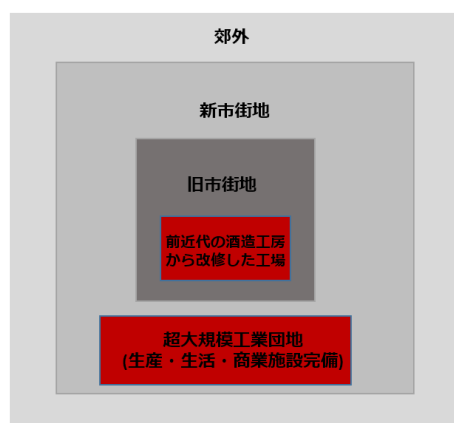


図 3-15 宜賓市酒造業関連施設配置図概念図

べて効率のいい生産システムが実現出来ていると考えられる。この空間構造は企業側が都市空間の一部に支配権を持ち、中心市街地へと繋がる道路の一部を企業が整備すると共に、関連施設などは全て、企業が支配権を持つその一部の都市空間の中で一番有効な所に配置し、都市内の一郭に独立した都市のような空間を形成する「都市内都市型」と呼ぶことが出来ると考えられる。



宜賓市都市内都市型

図 3-16 宜賓市都市と産業の空間的關係図

關係性は瀘州と比べてずっと強く、中国の企業都市の中では「中度」に当たると考えられる。

「中度」になった原因は会社の拡大した時期と発展資金の募集手段がかなり重要であると考えられる。90年代以降の五粮液会社の営業システムの変革や発展の仕方は成功事例として取り上げられることも多く^{注3-50)}、実際90年代から企業が一気に業界一位に成長した様子も見られた。そして都市への影響力も徐々に強まり、現在の状態に至った。企業の力の差により、瀘州のような関連会社と連携して生産チェーンを完成させる形ではなく、生産に必要な産業をできるだけ自分のグループの傘下に加えて、それらの産業も育成しようという手法を取っている。それにより様々の面から都市との関わりを生じて、全体に対しての強い關係性が生まれた。

中国においては、計画経済から市場経済に過渡する時期が極めて重要であると考えられる。その時期には産業も都市も爆発的に成長できる機会に恵まれ、そしてその滑り出しによって、両者の關係性が大方決定される。宜賓の場合は都市が大規模拡大する前に企業が著しく成長できたため、その後の都市の建設などに並外れの影響を与えたと考えられる。

国の政策面から見てみると、五粮液会社ほどの影響力のある会社でも瀘州と同様に旧市街地の中での工場施設を最小限にしていることが見られる。企業ブランド価値と生産上で大変重要である古い窖は文化財として保護され、生産を続けているが、周辺の地価などの原因もあり、瀘州のような広場は建設していない。また、3.3で述



写真 3-2 五粮液元「長發生」工房から改築した工場^{注3-36)}

べたように、建国初期に金砂江北岸の川辺にあった洪水により窖の質が落ちてしまった工場を手放したことから、工場整備の面について五粮液会社は生産の合理性も求めていることがわかる。

そして 90 年代以後の北岸工業団地の建設では基本的に政府の資金を使っていないが、瀘州の集中発展区域のように観光整備を行い、産業廃棄物排出物の減少対策も積極的に実施していて、国の政策に沿った整備をしている。税金などの貢献の見返りとして色んな面で特権とも言える優遇を受けているが、工場建設の方針などは国の政策に大きく影響されていることも見られた。

以上述べたように、企業の発展時期、企業と市政府の力のバランス、国の政策など多方面が原因で、宜賓市現在の都市構造が形成されたが、会社の強権により、強引に進む面もあり、会社と都市（地方政府）はある程度緊張した雰囲気が漂う状況でもある。



写真 3-3 本社ビル
(北岸工場区域入口付近^{注 3-36})



写真 3-4 北岸工場区域入口のゲート^{注 3-36}



写真 3-5 北岸工業団地の観光整備^{注 3-36}



写真 3-6 北岸工場区域内だけ走るタクシー
(五粮液グループの塗装)^{注 3-36}

第4章 茅台鎮における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

4.1 対象地の都市の概要と酒造業の特徴

茅台鎮は貴州省遵義市(地級市)仁懷市(県級市)に属している。明、清の時では貴州の塩の主の貿易港として賑わっていた。当地の酒造業の出現時期に定説はないだが、明代後期からは塩の行商人^{注4-1)}の投資により、酒造業が盛んとなったと言われている^{注4-2)}。

その後酒造業が発展し、現在では酒造業が仁懷市の財政収入の7割以上を占めている状況となり(2009年データ、茅台鎮の方の割合はもっと高いと考えられる^{注4-3)})。茅台酒の産地として名を馳せている。図4-2でもわかるように、茅台鎮は山々に囲まれた谷地帯に位置していて、鎮の西北には「赤水河」という川が流れていて、閉鎖的な地形となっている。鎮の南北の長さが約12kmで、東西の幅は約7.26kmである(2011年)^{注4-4)}。仁懷市区とは山の抜ける高架道路とトンネルによって構成された約10kmの長さの高速道路で繋がっている。

茅台酒は仁懷市茅台鎮を産地とする白酒の一つであり、酒の名前は産地に由来している。第二、三章で述べた瀘州老窖、五粮液と違って、茅台酒は醬香型^{注4-5)}の酒であり、また茅台鎮でしか生産ができないため、酒の生産量は相対的に低い。

現在茅台酒を生産してい

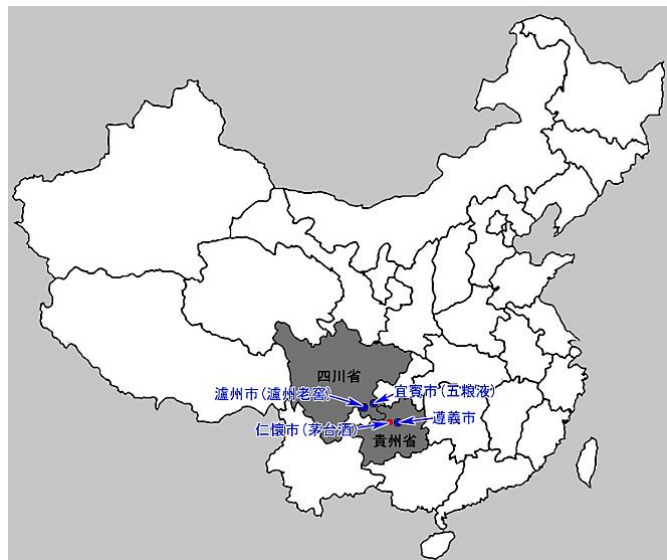


図4-1 茅台位置図

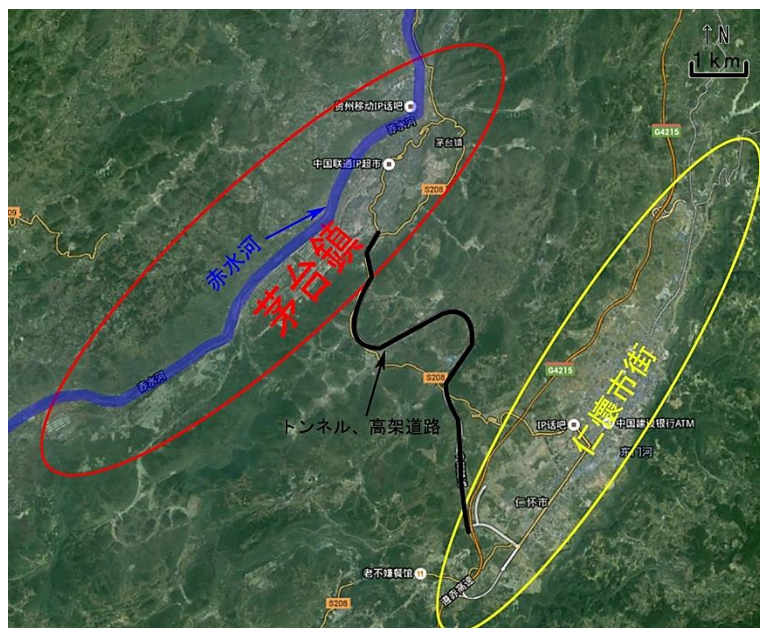


図4-2 茅台鎮と仁懷市位置関係図

る会社の名前は貴州茅台株式会社(以下「茅台会社」)であり、表 1-1 で示したように業界 2 番目の実力を持っている。また 1954 年で当時の国家総理である周恩来により、国家が外賓を接待する時の酒として選ばれ^{注 4-6)}、中国の「国酒」とも称されている。

茅台酒生産の一番の特徴として、産地に極めて高い依存性があることが挙げられる。1991 年の茅台酒場の最初の社志では「茅台鎮から離れると、茅台酒は生産できない」と書かれたように、茅台酒はずっと茅台鎮で生産され続けてきた。その原因は主に以下の点であると言われている。まずは独特の気候と地形環境。茅台鎮の閉鎖的な地形により、夏は暑く、冬も暖かい気候になっており、酒の醸造にはとても有利であると言われている。そして地質は砂頁岩であり、特有の微生物が生息している。土壌も酸性の紫土であり、それらの微生物の生存に必要な要素の一つである。最後は赤水河の水は砂頁岩により濾過され、普通の水より透き通っているとされている。それらの総合的な環境と長い期間の酒造業により、独特な微生物環境が形成され、測定では 100 種類以上の茅台酒の品質に影響がある微生物が茅台鎮の空気中には漂っているとされている^{注 4-7)}。以上のことから極めて高い依存性が生じたのである。

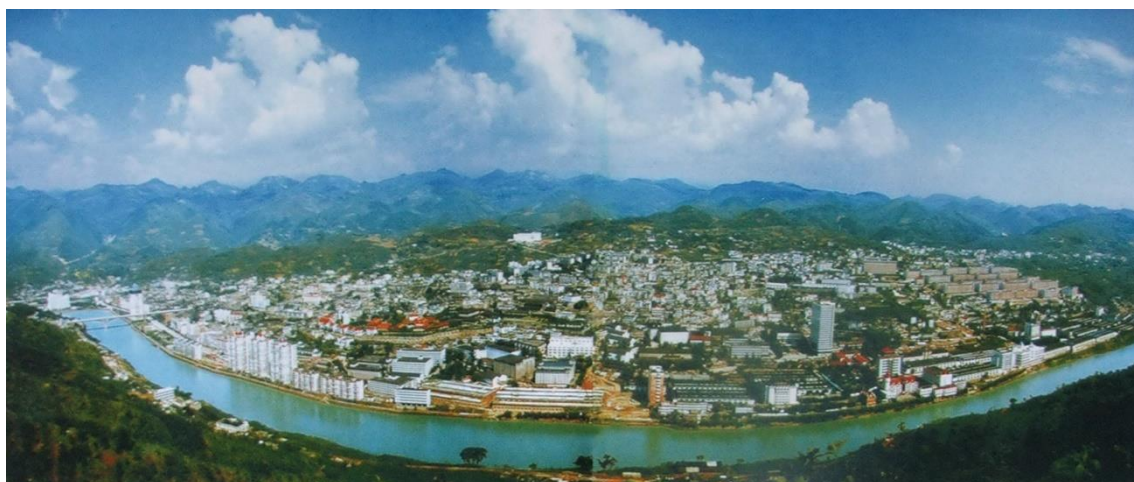


写真 4-1 茅台会社(茅台鎮)全景写真(2002 年)^{注 4-8)}

4.2 前近代と計画経済時期(-1980年)の茅台鎮の酒造業と都市

近代以前の茅台の酒造業についてみると、4.1冒頭で述べたように明代後期から発展し、清道光年間(1782-1850)では「茅台焼房(酒造工房)が20軒余りあり、原料で使う食糧は2万石余り」と史料に記載されている^{注4-9)}。その中で特に大きかったのは成義、榮和、恒興の3つの工房であった。『茅台酒場志』の記載によると1947年に成義工房の生産量は約21トン、榮和工房は約7トン、恒興工房は約60トンであった^{注4-}

10)。また、『貴州茅台酒業研究(1728-1956)』の記述によると、茅台鎮の酒の生産量は日中戦争後(1945年)急激に増えたと言う。茅台の酒の生産量は清末で2-3トン、民国初期で8-10トン、民国中期で20-25トン、新中国建国前の時期で90-100

トンであった^{注4-11)}。地理環境や生産環境から考えると少なくない量だが、同時期の瀘州の年間1,800トンと比べると規模の違いが明確にわかる。

茅台の酒造業は宜賓と同じく新中国建国の直前と直後に生産停止の時期があり、その後は国の援助下で生産再開と国有化が進んだ。茅台会社は上記の前近代の3大酒造工房から発展した。表4-2を見てみると、国有化の過程は先ず国が成義工房を買収し、茅台会社を立ち上げたが、残りの二つの工房は「没収」、「接収」という形で国有化されたと書かれている。具体的な事情を述べると、榮和工房の元オーナーは地方の土匪と結託する罪で銃殺され、その後、国が工房を「没収」したという。前近代で生産量が一番大きかった恒興工不法黄金横領の罪で

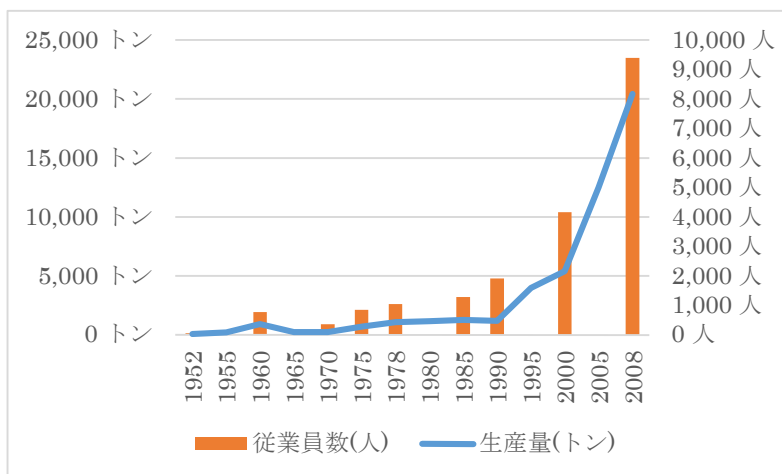


図 4-3 茅台会社生産量と従業員数変化図

表 4-1 1952-2008年
茅台会社主な経済指標一覧表^{注4-12)}

年	生産量(トン)	従業員数	利潤(万元)
1952	75	53	0.8
1955	209	79	5.1
1960	912	769	2.6
1965	247	データなし	-61.4
1970	232	361	-20.1
1975	701	850	-16.7
1978	1068	1048	6.5
1980	1152	データなし	72.4
1985	1265	1279	576.9
1990	1180	1918	3503
1995	3978	データなし	10406
2000	5379	4161	データなし
2005	12500	データなし	データなし
2008	20431	9395	データなし

表 4-2 茅台酒造業関連整備一覧表^{注 4-13)}

時期/ 年	整備事業	整備事業で建設さ れた主な施設	整備資金の出 所(額)	酒造業状況
建 国 前 (- 1949)				主に 3 軒(成義、榮和、恒興)民営酒造 工房あり、工房の規模も小さい(合計 窖 41 口) 建国直前と直後(1949-1951)年では全 鎮の酒造業は生産停止状態だった
1951		生産再開の支援金	国(4.3 万元)	政府は成義工房を買収して、茅台酒場 を立ち上げた(買取費用 1.3 万元)、 同年榮和工房を没収した
1953				恒興工房を接収し、茅台酒鎮の 3 つ酒造 工房が一つの国有会社になった
1953- 1961	生産拡大為 の建設	前工程生産施設、 簡単な後工程生産施 設と従業員の生活施 設など	国(合計 486.7 万元)	期間には中国の「大躍進」運動もあり、 政治的要因などにより、国は破格の資 金を投入した
1971- 1981			国(合計 789.5 万元)	
1985- 1990	800 トン/年 増産プロジ ェクトの実 施	主に前工程生産施 設、社員厚生施設、 山崩れ予防工事、電 力インフラ整備、档 案館の建設など(建 物建設面積 6.8 万㎡)	国、銀行ロー ン、会社資金調 達(全部で合計 1.35 億元)	800 トン/年プロジェクトは国の第 7 回 5 年計画期間に実施された増産目標 計画であり、増産以外はインフラの近 代化整備や従業員の生活施設整備な ども行った
1992- 1996	2 千トン/年 増産プロジ ェクト実施	前工程生産施設、後 工程生産施設、イン フラ整備、社員厚生 施設整備(建物建設 面積約 17.8 万㎡)	国(1 億元)、銀 行ローン(約 2.7 億元)、会社 資金調達(約 0.8 億元)	2000 トン/年増産プロジェクトは国の 第 8 回 5 年計画期間実施された整備 計画であり、増産以外は大規模な水、 電力供給などのインフラ整備と従業 員の生活施設整備なども行った
1997				会社がグループ化した
1998	茅台酒文化 城建設	酒をテーマとした博 物館	会社	
2001				株式公開を行って、約 20 億元の資金 を調達できた。
2001- 2005	4 千トン/年 増産プロジ ェクト実施	前工程生産施設、包 装を主とした大規模 後工程生産施設、大 規模酒貯蔵施設、会 社に通じる高架道 路、広場など	会社(約 15.9 億 元)	会社面積は 82.5 万㎡(2000 年)から 224.7 万㎡(2005 年)に増えて、急激な 規模拡大を果たした
2005- 2010	1 万トン/年 増産プロジ ェクト実施	主に前工程生産施 設、酒貯蔵施設	明記なし(省政 府+会社推定) (27.6 億元)	増産を重心に置いた整備であった
2011- 2020	4 万トン/年 増産プロジ ェクト計画 実施中	主に前工程生産施 設、酒貯蔵施設と従 業員の生活施設	明記なし	茅台酒鎮を全体占拠するような拡大計 画である

10年の有期懲役の判決が下され、工房の方も国に「接収」されたと記述している^{注4-14}。当時の社会背景下では地主や大きな資本家が批判の標的になりやすいため、判決の合理性などについて本論文は検討しないが、茅台酒社の国有化・一社化の過程を見ると、計画経済時期において産業を国有化させる力が非常に強かったことがわかる。また、この経緯から茅台酒社は成立当初から国と深い繋がりがあることも理解される。1953年で、3つの酒造工房により茅台酒社が正式に発足したと言えるが、その時の茅台酒社は従業員数54人、工場面積4,000 m²の小規模な会社であった^{注4-15}。

そして表4-2を見ると、50年代-80年代初までの計画経済時期においては、国が巨額の資金を投入したことがわかる。1980年頃までの総額は、老窖会社については分からないが、五粮液会社には南岸生産工場建設で60万元が与えられたのに対して、茅台酒社には国から合計1280.5万元の整備資金が投入された。これにより、生産量はある程度伸びたが(表4-1)、会社は僻地にあること、地形的に整備が難しいこと、そして政治情勢により強く影響されたことにより大きな発展を遂げたとは言えなかった。表4-1でも見られるが、1962-1977年の間の会社の収支は赤字であった。原因としては文化大革命などの政治運動に巻き込まれ、会社の管理も「茅台酒場革命委員会」に乗っ取られたなどがあったようである^{注4-16}。生産量を細かく見てみると1960年頃の前生産量は80年代前の時期ではとりわけ高かったであることがわかる。原因としてはその時期の「大躍進」運動^{注4-17}で生産量を全力で増やした結果であると推測される。これらの面からも茅台酒社が国と深く繋がり、国の政治や社会情勢に敏感に反応していたことがわかる。

整備事業については、生産量を増やすための前工程生産施設(原酒生産)と簡単な後工程生産施設以外は従業員の生活施設なども一緒に整備したのが特徴と言える。従業員について『中国貴州茅台酒場有限会社志』は「茅台酒社は工場拡大のために土地を徴用された全ての住民に対して、生活保障を行った。基本条件さえ満たせば、会社の従業員として採用している」と述べている^{注4-18}。従業員として採用された具体的な割合はわからないが、この方針を実施するためにある程度の規模の従業員生活施設の建設が必要であったと考えられる。

4.3 市場経済時期(1980-現在)の茅台鎮の白酒醸造業と都市

市場経済時期の茅台会社は老窖会社や五粮液会社と同じく高速の発展段階に入った。社志では「(会社の)80年代以後の建設は、1985年からの国の五カ年計画^{注4-19)}と同調し、企業規模を拡大した。その中で「800トン/年増産プロジェクト」と「2千トン/年増産プロジェクト」は非常に重要な意味があり、会社発展の基礎と新たなスタートラインでもある^{注4-20)}と記載されている。「800トン/年増産プロジェクト」については表4-2で示した通り、国、銀行ローン、会社資金調達^{注4-21)}の3つの資金調達手段により1985-1990年に実施された整備事業である。生産量を向上させるための前工程生産施設以外は、山崩れ予防工事、電力インフラ整備、会社の档案馆の建設なども実施され、まさに大規模化のための「基礎」整備が行われたと言える。従業員の生活関連施設などについては、社宅以外にも幼稚園、病院、体育館、クラブなどの建設が行われた^{注4-21)}。瀘州の老窖会社による1985年からの「現代的な工場計画に基づいた」羅漢鎮工業団地の建設も同時期にあたるので、中国の本格的な産業大規模化と従業員の福利厚生^{注4-21)}の大幅な改善は基本的に1985年前後からであると考えられる。そして「2千トン/年増産プロジェクト」については800トンと同様に国、銀行ローン、会社資金調達の3つの資金調達手段で実施された整備事業であり、整備の項目も共通している所が多く、生産量を向上させるための前工程生産施設以外はより大規模なインフラ整備が行われたとみることが出来る。

図4-4を見てみると、1991年は800トンプロジェクトが完成している時期である。その時の茅台会社の敷地は茅台鎮市街地全体の半分くらいを占めていた。4.2で述べた会社による土地徴用時の従業員採用制

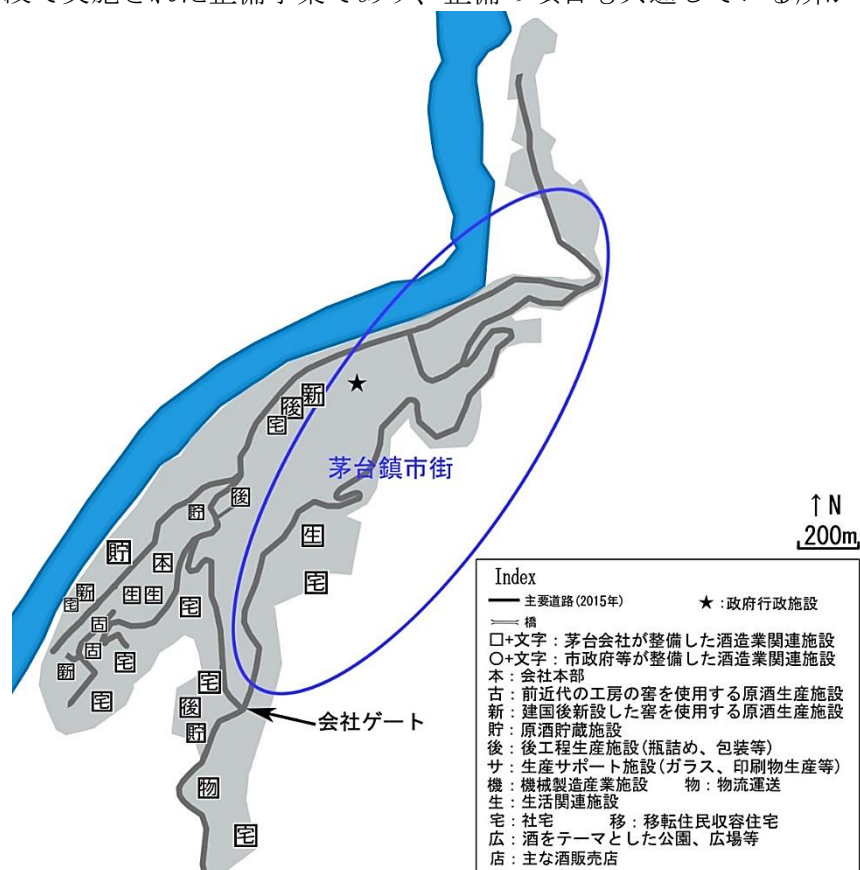


図4-4 1991年茅台鎮の街区状況と酒造工場の分布図^{注4-22)}

度が原因か、ゲート(工場区)外の所にも社宅や生活施設が分布している。工場区内の社宅は数多く建てられ、細かく散在していたこともわかる。鎮の土地を徐々に吸収し、工場施設と社宅を一緒に建てていくというプロセスが想像できる。そして茅台会社は前近代の3つ関連酒造工房(図4-4「固」の記号)から拡大したことを考えると、工場区は最初茅台鎮の西南部に位置し、川に沿って鎮の中心部と山の上の方向に拡張したと考えられる。

2001年に茅台会社は株式公開を行い、約19.96億元の資金を集めることに成功した^{注4-23)}。また国の「住房制度改革」に応じて、会社は住宅改革案を出した。従業員の宿舎については茅台酒場の董事局办公室の王課長によると、「会社は2000年頃からの住宅改革案の実施により、大部分の従業員は仁懷市区内で家を購入した、現在(2015年)は3棟の社宅しか残っていない」という^{注4-24)}。会社の上場と住宅改革案は会社のこれまでの工場施設などの分布に大きな影響を与えたと考えられる。株式公開後、会社が実施した大きな整備事業は2001-2005年の4千トン/年増産プロジェクトであった。この整備事業は会社が上場で得られた資金を使って実行した事業で、合計15億元を投入した。この整備事業により会社面積は82.5万㎡(2000年)から224.7万㎡(2005年)に増えて、急激な規模拡大を果たした^{注4-25)}。2008年の茅台の市街区の状況を見ていると(図4-5)、1991年から相当拡大したことがわかる(図4-5暗緑色部分)。茅台会社の敷地は西南と山の上へと拡大している。施設については詳しくみると、原酒生産施設と貯蔵施設が新設されたことが見られる。そして工場の入口もより南の方に移動し、入口の付近には大規模な瓶詰め・包装工場が建設されたことも見られる(図4-5圈)。この瓶詰め・包装工場は4千トン/年増産プロジェクトの主な整備の一つであり、2001年



図4-5 2008年茅台鎮の街区状況と酒造工場の分布図^{注4-26)}

から建設されたものである。毎年2万トンの酒の瓶詰め・包装をする能力を持っている。この瓶詰め・包装工場の建設に伴い、新しい工場区に入る道路も整備された⁴⁻²⁷⁾。図4-5に示した通り、工場区入口から瓶詰め・包装工場に通じる道路は360度以上回転す



写真 4-1 包装工場から見た茅台酒場工場区入口へと通じる道路^{注 4-28)}
(回転して橋の上にある工場区入口に通じる)

る形になっており、それは高低差を解消するためである(写真4-1)。工場区入口と包装工場の間には30m以上の高低差があると考えられる。それでもこの位置を選んだのは、仁懷市区に繋がる高速道路の一番近い位置に建設することを優先したからと推測できる(図4-5)。そして鎮の政府行政施設については、二つがあり、一つは鎮の東北部に、もう一つは茅台会社の本社ビルの隣に位置している。この鎮の政府行政施設の立地からもこの時期の会社と鎮政府の密接な関係が見てとれる。また、上場後茅台会社は仁懷市区内などで工場区域以外のインフラ整備にも投資した。社志では「地方福祉事業」としているが^{注 4-29)}、整備の内容を見てみると(表4-3)、基本的には茅台鎮へのアクセスの改善、鎮の自然環境向上整備、原料生産に関する整備など会社の生産に密接に関わる投資を行っていると解釈できる。この時期の工場拡大を経て、鎮全体が会社に占拠され始めたとも言える。

表 4-3 茅台会社工場区域以外のインフラ整備など一覧表^{注 4-29)}

年	金額	整備内容
1992年以降	3,000 万余元	茅台大橋、青坑→茅台の公路(60km 余り)
1992年以降	2,000 万元	(鎮の) 変電施設
1992年以降	900 万余元	仁懷市電話回線整備
1992年以降	100 万余元	赤水河向こうの斜面緑化整備(整備面積約 33 万㎡)
1993年	約 1 億元	茅台鎮中心区の土堤整備(整備長さ 2046m)
1997年以降	250 万余元	仁懷市「三点一線」(市街地拠点整備計画)の援助金
2002年	300 万元	仁懷市政府の茅台鎮のセメント工場引越し事業の援助金
2007年	1.4 億元	遵茅(遵義→茅台)高速道路の建設
2006-2008年	1,103 万元	周辺農村原料基地の建設
2008年	約 743 万元	周辺農村原料基地の建設、農業自然災害予防資金、被害農民への補助金

2008年以降も工場拡大整備は続き、2001-2005年には4千トンの増産計画、2005-2010年には1万トン、そして2011-2020年には4万トンの増産計画が計画されている。この生産量計画を見てもわかるように2000年以降の規模拡大のスピードは非常に速い。しかし、2015年の市街地状況を見てみると、2001年から2008年の工場区域の拡大スピードと比べて、やや落ちていることが分かる。敷地内の工場施設の密度を上げたのであろう。新設された施設は表4-2からわかるように、主に原酒生産施設と貯蔵施設である。現在の状態を見てみると、工場区域の拡大は一旦落ち着いたようにも見えるが、実際には図4-7で示した通り、2020年までに現在の工場区面積の倍以上の拡大が計画されている、勿論土地の徴用許可などは計画許可時に既に与えられてい

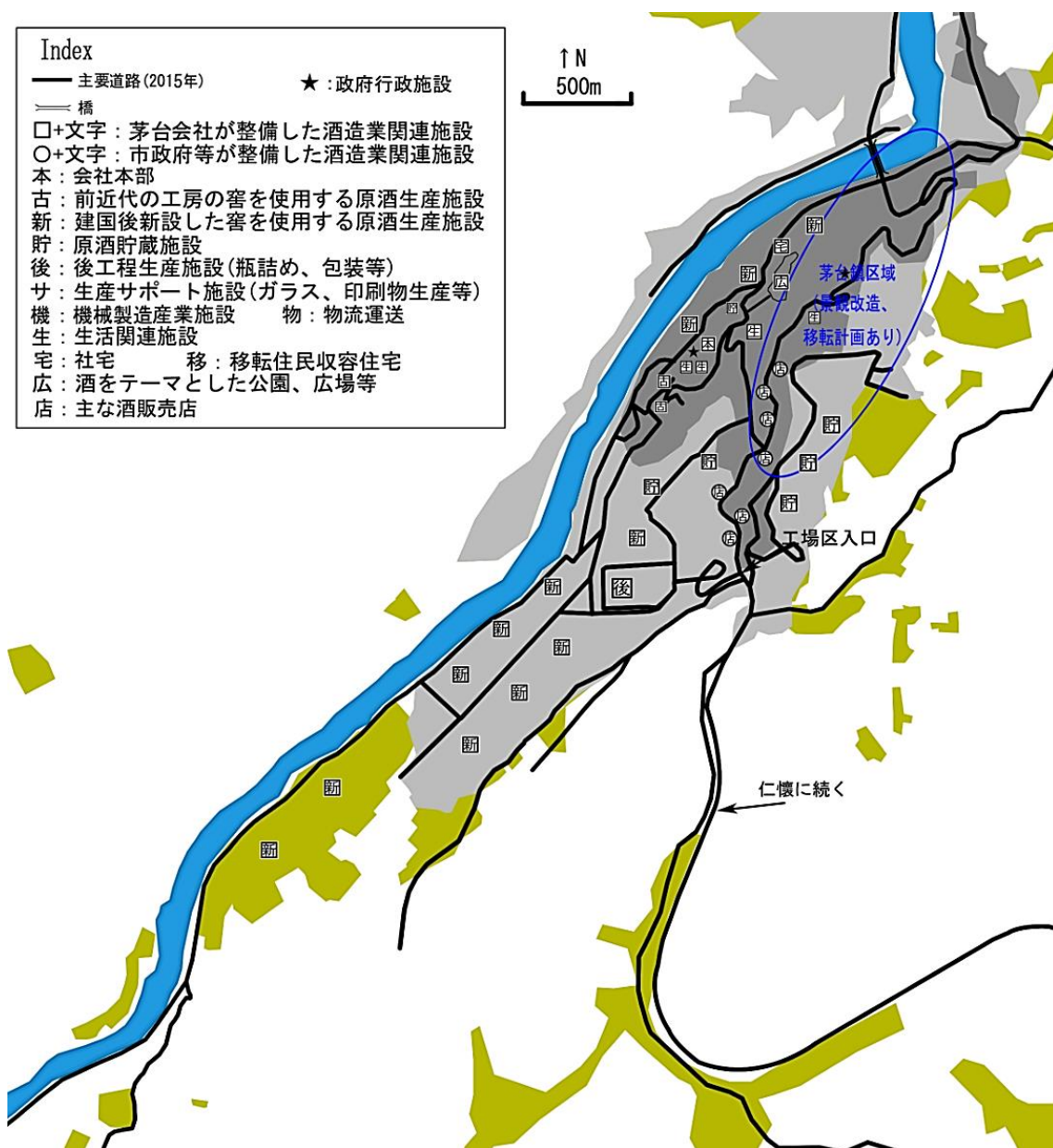


図4-6 2015年茅台酒鎮酒造業関連分布図^{注4-30)}

た。老窖会社の集中発展区域や五粮液の北岸工場団地と同様に、2010年以降の工業区拡大が飛躍的に加速しているが、それらの拡大には合理性が欠けている面もあると考えられる。実際近年中国の白酒業界の生産能力は既に過剰であるとの声もあちこちで上がり始めている。



図 4-6 茅台鎮工場計画拡大範囲図^{注 4-31)}

4.4 茅台鎮における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

茅台鎮の白酒醸造業の近代化の過程を改めて見ると、建国前は小さな産業だったが、建国後は国からの巨額の資金により大きく発展したことが分かる。本来茅台鎮は中国においては僻地に位置し、地形などの面から見ても大規模な工場施設の建設には不向きであった。ここまで拡張したのは産業が産地に対して極めて高い依存性があると共に、国から資金、政策面などの融通があったからと言えよう。そして都市空間について大まかにいうと昔の工場から拡大して、形成した工業団地が旧市街地を飲み込んだ形の構造であると考えられる。次にこの構造の形成原因を前の二つの対象地と比べながら考えてみよう。

先ず現在の(株)茅台会社の持株割合についてだが、4.2で記述しているように、茅台会社が株式公開を行ったのは2001年で、株式公開した後グループ会社へとシフトした。現在の資産総額は658.73億元であり^{注4-32)}、老窖会社の約5倍であり、五粮液会社の約1.42倍である。持株割合は、持ち株会社である(グ)茅台会社の持株割合が61.99%であり、十大株主の中で国有法人の株を全部持っていることとなり、持株割合も高いことが分かる。茅台会社は、貴州省政府(貴州省国資委)の管理になっているが、十大株主一覧表で示した通り貴州省国資委は会社の株を所持していない。この持株割合からみても茅台会社は国家が外賓を接待する時の酒を生産する会社として、ある種の特権を支えられた会社であることがわかる。国の生産指標さえ満たせば、経営や建設は地方に対して極大の自由度があると推測できる。

そしてまた、企業と都市のデータを「割合」で示した指標についてみると、先ず茅台会社の営業収益と茅台鎮のGDPとの割合については、「貴州茅台酒株式会社2014年年度報告」によると(株)茅台会社2014年の営業収益は約315.74億元で^{注4-33)}、同年茅台鎮の

表4-4 2014年貴州茅台酒株式会社十大株主一覧表^{注4-35)}

GDPが350.00億元^{注4-34)}である。従って茅台会社の営業収益と茅台鎮のGDPとの割合は $315.74/350.00 \approx 90.21\%$ であり、経済面では圧倒的であるしか言い様がない。他の二つの対象地のGDPは市全域のものであ

株主名	持株割合
1. 中国貴州茅台酒場(グループ)株式会社(国有法人)	61.99%
2. 香港中央結算有限公司	3.10%
3. 貴州茅台酒場グループ技術開発会社	2.91%
4. 易方达资产管理(香港)有限公司—客户资金(交易所)	1.01%
5. GIC PRIVATE LIMITED	0.77%
6. UBS AG	0.73%
7. TEMASEK FULLERTON ALPHA PTE LTD	0.71%
8. 中国人寿保險株式会社-配当	0.59%
9. 奥本海默基金公司-中国基金	0.58%
10. 交通銀行—易方达 50 指数证券投资基金	0.50%
その他	27.11%

るため、この項目について具体的な数字を持つての比較はしないが、経済面においては茅台酒社の影響力がより強いことがわかる。

次に現在の茅台酒社の従業員数と茅台酒鎮の人口との割合についてみると、2014年の茅台酒社の従業員数は16,830人で^{注4-36)}茅台酒鎮の人口は4.2万である。従って茅台酒社の従業員数と茅台酒鎮の人口との割合は $1.68/4.2 \approx 40\%$ である。この割合は老窖会社の約210倍で、五糧液会社の約13.51倍である。

最後に茅台酒社の現在の社有地面積と茅台酒鎮の主な市街地の面積との割合についてみると、図上計測の結果は社有地面積が265.60万㎡で、主な市街地面積が365.25万㎡である。従って社有地面積(万㎡)/主な市街地面積(万㎡) $\approx 72.72\%$ であり、老窖会社の約8.21倍で、五糧液会社の約2.48倍である。社有地の面積だけであれば、茅台酒社は老窖会社、五糧液会社と比べて狭いが、茅台酒鎮の都市規模が瀘州、宜賓と比べて圧倒的に小さいため、社有地面積と主な市街地の面積との割合は大きくなっている。

以上の企業と都市のデータを「割合」で示した指標から見て、茅台酒社は経済面、従業員数面、工場区域面積の全ての面において都市に対して、老窖会社、五糧液会社よりもより一層強い力を持っていることがわかる。

工場施設の分布については鎮全体を占拠しているため、地形などの制限があるものの、工場施設は基本的に会社にとって一番便利な所に配置していると考えられる。原酒生産施設は河沿いに、貯蔵施設は山の上に、後工程施設が会社の入口付近に配置され、入口は鎮の中で一番外部にアクセスしやすい位置に建設されている。この空間構造をすることで、企業は「私的な都市計画」が実施でき、都市全体が企業生産のために動くように

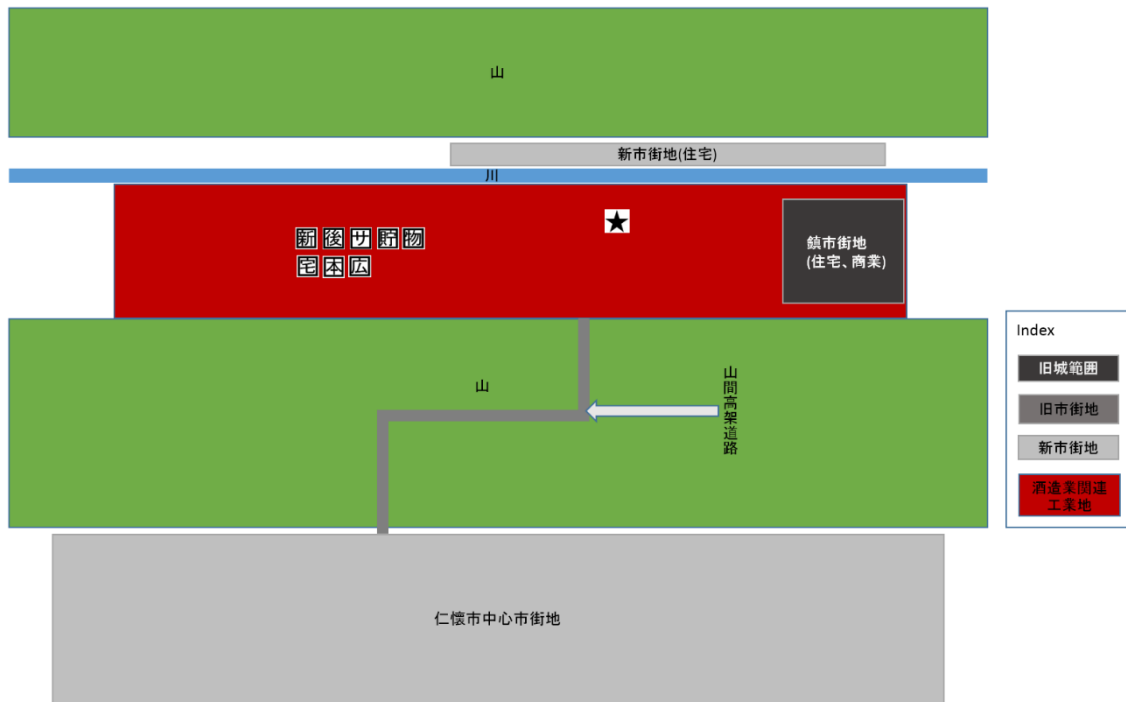


図 4-7 茅台酒鎮酒造業関連施設配置図概念図

展開している。そして企業は都市に対して道路を含む多くのインフラを整備する。市の役割は極めて限定されているような「都市全体占拠型」と位置づけられると考えられる。企業が都市に対する関係性強度は瀘州や宜賓と比べて、中国の企業都市の中でも「重度」に当たると考えられる。

この「重度」の形成原因として先ず会社は国のバックもあり、建国初期の段階から極めて高い力を持っていた。一方、都市は昔から僻地に位置し、酒造業以外の経済、産業、諸々の面で弱体であった。こういった格差によって都市が会社によって開発され、都市と企業が強く結び合わせて形成されたものと考えられる。

中国は近年「特色産業鎮」^{注4-37)}の開発が盛んに行われており、産業と文化の創出に尽力しているが、茅台鎮は産業の歴史の面からも、整備の規模などからもとりわけ徹底的に特色が創出されたものと考えられる。

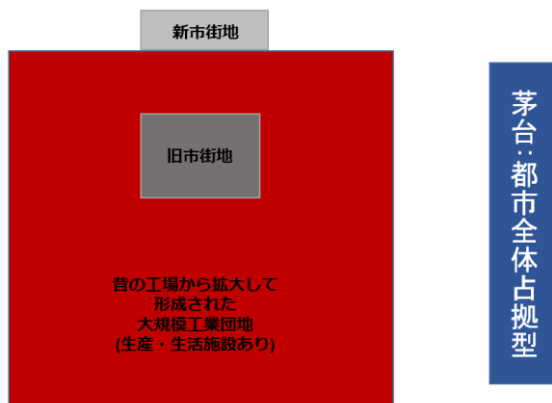


図 4-8 茅台鎮酒造業関連施設配置図概念図



写真 4-2 茅台鎮の主要道路両脇にある酒を販売している店^{注4-29)}



写真 4-3 茅台鎮鎮全体の立面風貌整備^{注4-29)}

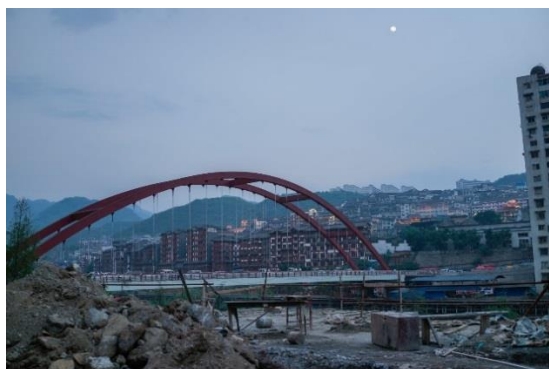


写真 4-4 茅台鎮西北部にある橋から見た景観^{注4-29)}



写真 4-3 建設中の茅台五つ星ホテル(会社建設)^{注4-29)}

第5章 中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

5.1 中国白酒醸造業の近代化と都市形成の流れ

これまで、瀘州、宜賓、茅台の3つの対象地の白酒醸造の近代化と都市形成の関係を検討したが、結論を出す前に、もう一度白酒醸造業の近代化の流れを見てみよう。

中国の白酒醸造業は明、清時期から出現し、その後人民の生産生活に関わる一大産業に発展してきた。中華人民共和国の建国前までの生産方式は基本的に個人工房であり、酒を販売する所と生産する所が違う場合があったが、分業生産は基本的に見られなかった。そして酒造工房は水源や土地、街区の繁華程度や城内への立地制限などに影響され、色んな所に立地していた。1949年に中華人民共和国が成立し、計画経済が実施された。計画経済の実施により前近代からの酒造工房が国有化・一社化され、元の酒造工房の間に空間的な繋がりが生まれるようになった。生産・貯蔵施設の共有や原料の仕入れの一元化がなされ、徐々に大規模化・分業化が始まった。しかしながら、計画経済時期の中国は社会、経済が共に企業の成長を育むのに適切した環境でなく、宜賓のように建国前の酒造業規模が小さかった場合は大規模化を図った工場区の建設も試されたが、建設スピードは極めて遅く、本格的な大規模化ができなかったことも見られた。

1980年頃から改革開放政策が実施され、市場経済への移行が始まった。改革開放政策により、企業が自主経営の権利を少しずつ手に入れ、経営・生産の積極性が格段に上がった。また経済システムの変化により、市場機能が働くようになり、大規模化生産のインセンティブを与えた。80年代から、「現代工場計画に基づいた」大規模化した工場(区)が建設され、産業の形が大きく変わった。大規模化した工場(区)の建設で原酒生産区や瓶詰め区、包装区などが、空間上明確な「機能」を持つようになり、また白酒醸造業の特性で原酒生産が前近代の酒造工房の位置に大きく影響されるため、都市によっては市内で明確な分業生産システムが形成された。

そして90年代に入り、市場経済が中国で馴染むようになり、会社もそれに対応すべく、国の政策に従って更なる経営改革を実施するようになった。株式公開がその最も明確な表現の一つであると考えられる。株式公開で会社が次の段階に進む資金を手に入れ、その資金を用いて沢山の工場施設整備を行ったことも見られた。この時期の3つの対象地にある会社の工場整備内容から見てわかるように、最も重視されたのは瓶詰め・包装などの後工程施設である。その原因は、市場経済の進展により、一般消費者が「商品」に対する観念が変わり、商品そのものの品質以外に、外見のような付加価値の面も重視されるようになったと考えられる。特に白酒の場合は中国の一般的な習慣の中で客をもてなすための飲み物の観念が強く、より一層包装などにもブランド性が求められているのであろう。そしてこの時期の後工程施設の立地は酒造業施設の空間分布構造の大きな

決め手でもあると考えられる。

2000 年以降は、国の政策により都市ブランド、工業郊外化と産業集中発展エリア、産業クラスター形成が推進された時期である。実際 2000 年以降で関連産業施設(生産サポート施設)が入った超大規模工業団地が建設されたことも見られた。しかし、その建設位置や生産サポート施設の運営の仕方にはその時の企業の力によって、大きな差が見られた。

以上から中国の白酒醸造業は最初の個人経営から、経済システムと国の政策などの影響で分業化、大規模化していき、現在では主に原酒生産施設、後工程施設、生産サポート施設の空間機能に分けて、産業クラスターとして生産していく近代化の過程が見られた。

そして都市形成についてだが、序論で述べたように、現在の中国の都市形成に関する一般論がまだ殆ど出されていない状態で、本論文でもこの 3 つの都市の都市形成だけを見て、中国の都市形成に関する一般論を出すのは難しいであろう。

しかし対象地の都市の都市形成を見てみると、共通点もある。すなわち、前近代では都市の地理、交通条件などが都市の商業規模などに大きく影響を与えた。そして民国時期には四川省の全体の経済が活発化したために、道路や街区、公共施設などの近代化整備、新市街地の開発がある程度行われた。しかし、中華人民共和国が建国し、改革開放政策が実施されるまでの約 30 年間は小規模な道路、街区、公共施設の整備はあったものの、新市街地の開発はほぼなく、都市建設がとても緩慢であったことがわかる。80 年代後では新市街地の開発が活発に行われるようになり、90 年代頃には新しい中心市街地が形成されるようになる。そして 2000 年以降は新市街地の開発スピードがもう何段階か加速して、都市面積が爆発的に増えていくようになる変遷過程であった。

この都市形成の流れを見ると、産業の近代化とほぼ歩調を合わせて進んでいることがわかり、このような中国の地方都市においては工業化が都市化の最大の原動力であったと言えよう。

5.2 中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

前節で述べたように現在の白酒醸造業の生産の仕方から見て、工場施設は大きく原酒生産施設、後工程施設、生産サポート施設に分けられ、そして2から4章の最後の節で分析したように、それらの施設配置の空間的構造は企業と都市の関係性の強度に大きく左右され、企業が都市の中でどれほど自分にとって効率のいい生産システム、所謂企業の私的な都市計画が実現できたかで決定されたと考えられる。

瀘州のような中国の企業都市の中で企業と都市の関係性の強度が「軽度」の場合は、企業側は生産施設などを都市の中で分散的に建設し、市内で分業生産を行なっている。工場区を連結する道路などや他の生産が必要なインフラは市政府側が整備し、企業の副次的な施設(後工程施設や生産サポート施設)を郊外化するような「都市全体展開型」の構造が形成されやすいと考えられる。この構造は中国の企業都市の中でも一番多い構造ではないかと推定される。調査時間や精力などの制限で多くの対象地の詳細調査ができなかったが、表 1-1 中国の十大銘酒(白酒)ブランドと所在地一覧表(p3)の第6位である「劍南春グループ株式会社」が四川省綿竹市で展開した空間構造が瀘州とかなり似た空間構造が形成されている(補章 3.1 を参照)。そして企業と都市の関係性の強度が更に弱く、或いは産業が本来的に大規模な生産施設、分業する必要が無い場合は企業都市とは呼べない、山東省青島市の「青島ビール会社」のような「都市全体分散型」や浙江省紹興市の紹興市の「紹興酒(複数企業)」のような「都市郊外化型」の産業空間構造になると考えられる(詳細は補章 1、2 を参照)。

そして宜賓のような中国の企業都市の中で企業と都市の関係性の強度が「中度」の場合は、企業側が都市空間の一部に支配権を持ち、中心市街地へと繋がる道路の一部を企業が整備すると共に、関連施設などは全て、企業が支配権を持つその一部の都市空間の中で一番有効な所に配置し、都市内の一郭に独立した都市のような空間を形成する「都市内都市型」が形成されやすいと考えられる。この構成は 3.5 で述べたように高度成長時期に何らかのきっかけで企業が都市より先に力をつけて、迅速な成長を果たした場合に起きやすいと考えられる。白酒醸造業の中では五粮液会社ほどの規模はないが、表 1-1 で示した現在白酒醸造業第4位である江蘇洋河酒場株式会社の所在地、江蘇省宿遷市も地図上で企業の生産施設を大まかに見てみると、「都市内都市型」に当てはまると考えられる(補章 3.2 を参照)。

最後に茅台のような企業都市の中で企業と都市の関係性の強度が「重度」の場合は、企業は「私的な都市計画」が実施でき、都市全体が企業生産のために動くように展開している。そして企業は都市に対して道路を含む多くのインフラを整備する。市の役割は極めて限定されているような「都市全体占拠型」が形成されやすいと考えられる。この構造は中国において、茅台会社のような国のバックのある巨大企業でも、都市部でそれをやり遂げるのが難しいと思われる。このような状況は近年「特色産業鎮/村」の政策

により全体的な再開発計画が施された鎮や村で多く発生しており、白酒醸造業の中では、表 1-1 の第 5 位である郎酒グループ会社とその生産地の四川古蔺県二郎鎮で産業による鎮全体の再開発計画を立て、整備を進めている(補章 3.3 を参照)。

しかしながら、企業と都市の関係性の強度は非常に判断し難いことであり、抽出した要素によっては結果が変動する可能性もあると思われる。そして時期によって関係性の変化もあったことは 3 つの事例から見られた。そのため、関係性の程度を具体的な形容詞で表すのは困難であり、以上のように対比させる形で「軽度」、「中度」、「重度」と分類している。

現在の中国においては白酒醸造業のような伝統産業が拡大するにつれ、ブランド価値を示せる施設と大規模生産ができる施設の両方がとても重要となってくる。

ブランド価値を示せる施設は中国の土地制度や会社制度からは日本のような「創業者の家」や「記念館」などの形式で会社の歴史やブランド性を示すのが難しい。基本的には本論文の対象地で見られた「古い窖」を使った生産施設或いは以前の工場から改修した本部施設などの形が必要と考えられる。それによって前近代からの産業であれば、産業施設が旧市街地に繋ぎ止められることもある。

そして大規模生産施設については、本論文で見られた通り、前近代から大きかった産業でも、大規模な産業拡大は 90 年代からで、特に著しく進展したのは 2000 年以降となっている。この時期は国家が「工業郊外化」と「産業クラスター形成推進戦略」などを実施した時期であるため、郊外で大規模な複数産業の集中工業発展区を建設するのが一般的であると考えられる。しかし会社の力が強く、単一産業の規模も大きい場合は会社がグループ会社などの形で、関連産業だけで集中発展区を形成することも可能であり、更に都市を代表できる産業となると、地方政府の意向で工業区が都市中心部の近くに立地することも可能であると分かった。このように企業と都市の関係性の強度の違いによって異なる都市構造が形成された。

従って、中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係は、中国の企業と都市の関係性が国の政策や産業特性などの影響を受け、その関係性の強弱に対応した都市構造を形成させた結論づけることができる。

また都市構造面では以上の違いがあるが、同じ産業で同じ国の政策を受けて、共通する面も少なくない。先ず古い窖については共通して残されている。この理由はひとえに会社のブランド価値の源泉になり得るからである。そして観光開発について、共通して会社が使用権を持つ土地でも、工場区の一部は景観整備され、観光客に開放されている。それは会社のブランド力の向上と国の「特色文化産業」として発展できるからである。都市の方も産業に合わせて一般市街地で産業文化景観を創出している。そして農業について、共通して生産規模の拡大に伴い、企業が政府と協力し、或いは子会社経営などの形で周辺農村を原料基地としての整備を進めている。それは安定した原料確保とブラン

ド力の向上に繋がるからであると考えられる。

以上のことから白酒醸造業、特に対象地のような大型の白酒企業は経営と生産など多くの面でブランド性を一番重視し、このことが同時に都市の第1,2,3次産業に大きな影響を発揮していると言えよう。

5.3 中国の特色のある企業都市

前節では中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係について結論を述べたが、では最後に「中国の特色のある企業都市」について考えてみよう。

「中国の特色のある企業都市」は筆者が考えた現在の中国の企業都市を表現する言葉で、この言葉の出处は中国の改革開放政策の提出者「トウ小平」が提出した「中国の特色ある社会主義」^{注5-1)}に繋がるものである。ではどうして「中国の特色のある」を「企業都市」の前につけるかであるが、それは中国の現在の経済システムや都市の運営、土地制度などがかなり特殊であるからである。

先ず中国は現在でこそ市場経済になったが、それでも一般的な市場経済とは異なる。すなわち共産党や国が経済に干渉する力が強いという特徴がある。そして土地制度の面においても、制度上都市の土地の所有権があくまで国のものであり、農村の土地も集団が所有していることとなっている。企業の力がどれほど強くても、実質上企業の「私的な都市計画」の通りに都市計画が実施されていても、法律上は政府が計画を制定・批准し、実施していることとなっている。更に本稿が取り上げた3つの対象地にある企業のように、企業が国有会社の場合、制度上、企業の資産＝国の資産であり、企業を運営しているのは国であることとなっている。そういった面から企業と政府を本質的に切り分けることはできない。これもまた「中国の特色」であると考えられる。

この「中国の特色」は中国で「企業都市」の概念が普及されない大きな原因でもあると考えられる。つまり名義上企業は政府が運営していて、都市も政府が運営しているなら、「企業都市」という言い方がそもそもおかしいではないかという疑問があると考えられる。しかしその反面、制度上はどうであれ、「企業」である以上営利を目的にしているのが常で、最大の利益を得るためには、地方政府と完全に同調することが不可能であると考えられる。

そして実際に本論文での分析を通して、企業と都市(政府)の間に対立している部分があることがわかり、「中国の特色のある企業都市」という理解を提案するに至った。

前節では企業都市の中で企業と都市の関係性の強度を「軽度」、「中度」、「重度」と分類したが、中国のこういう制度下では都市と企業の関係で、摩擦が一番少ないのが「軽度」であると考えられる。瀘州の酒造業施設整備などからでもわかるように、この程度の関わりであれば、企業と市政府が一緒になって都市と産業施設の整備を行っているイメージに近く、ある程度のWin-Winの関係が構築されていると考えられる。

「中度」の場合は企業が強権を用いての整備も多く、政府や地方に住む住民の間で一番矛盾が表れやすいではないかと考えられる。

そして「重度」の場合は、企業の力が圧倒的で、それが故に、かえって軋轢が少ないと考えられるが、日本の一部の学者が日本の企業城下町に対して「不健全の都市」と評したような状況が生じやすいと考えられる。

どの関係性の強度でも問題は必ず発生するが、このような中国の特色のある企業都市は柱産業があり、都市経済面が一般的な地方都市と比べて、豊かであることは評価すべきであると考えられる。特に中国は国が広い分、都市の数も多い。本論文の対象地である都市は比較的僻地にあるため、このような柱産業がなかったら経済成長がとても難しかったであろう。

そして白酒醸造業のような地域の歴史文化が体现できる伝統産業の企業都市であれば、都市の特色創出、観光開発、景観整備が進んでいると考えられる。五粮液や茅台が造られた巨大な酒の瓶を模した建物や、茅台鎮全体の立面整備、瀘州市内に数多く建てられた「中国酒城」の文字が入った電柱などは日本などの景観整備の考え方から見て派手過ぎて、思わず笑ってしまう部分もあると思われるが、北京や西安などの歴史のある都市では歴史的雰囲気を出するために大量の倣古建築が建てられ、ビルに中国伝統的な屋根を付けるなどのことも多発している。本論文の対象地のような産業と地方特色文化を体现した観光や景観などの整備はある種の面白みがあり、それもまた違う意味の「中国の特色」を表現できたと考えられる。

また、「古い窖」のような「生きた遺産」が使用され続けることで、都市文化面でも大きなプラスになるが、旧市街地の街区整備の大きな制限にもなっている。文化財などの保護を取るか、それとも都市開発を取るかはどの国でも大きな課題だが、現在中国のように古い文化やものが急速に失われつつある状況下で、生産上の必要性によってこういった施設が残されるのは今後激しくなっていく中国の都市間の競争において大きなアドバンテージになると考えられる。

しかし、中国全体に言えることだが、現在の中国においては過剰な開発が行われていることが多い。白酒醸造業においては近年の国家の工業発展政策と合致している部分が多いため、企業が迅速の成長ができたが、その反面、急速な建設による移転問題などや過剰な拡大計画がかなり目立っていると考えられる。中国の経済や企業成長、及び都市化なども高度成長からブレーキをかけつつある段階に入った今であるからこそ、これまでの変遷過程を鑑みて、今後の道をもう一度考えるべきであろう。



写真 5-1 五粮液工場区内にある
酒の瓶を模した建物^{注 5-2)}



写真 5-2 仁懐市内にある
茅台酒の瓶を模した建物^{注 5-3)}

注：

1-1 参考文献 4, p72

1-2 「規模以上」は中国工業部の「一定規模がある」の規定規準を達している企業を指す。主の規準として年間営業利益が2千萬元(約3.7億円、レート18.5にて計算、以下同じ)以上などがある。

1-3 中国産業情報ネット, 「2014年我国1423家规模以上白酒企业全年累计完成销售收入5018.01亿元」の記事による。<http://www.chyxx.com/data/201405/245598.html>, アクセス日 2015.8.15

1-4 参考文献 26, p5 による。

1-5 ランキング順位は参考文献 27, p9 を参考。元の工房/企業設立年は会社 HP の会社歴史など、人口は中国統計局と地方政府の HP などのデータを参考。

1-6 2014年データ、出所は2.5, 3.5, 4.4節を参照、瀘州と宜賓のGDPは市(行政域)のデータを使用、茅台は鎮の人口とGDPなどのデータを使用。

2-1 現在の中国の白酒市場では幾種類の白酒が存在している。主流としては濃香型と醬香型が挙げられる。種類の違いにより、香りの濃さ、口当たりなどが違い、製造工程にも影響している。濃香型は白酒の代表として市場の大半の売上を占めている。

2-2 参考文献 12) p. 63。

2-3 胥會雲)白酒全産業鏈上的瀘州, 2012, 第一財經日報の記事
「<http://www.yicai.com/news/2012/11/2270835.html>」, による。アクセス日, 15.12.12。

2-4 参考文献 5) p. 9。

2-5 『直隸瀘州志』(清朝道光年間(1820-1850)) (参考文献 56)に収録された「瀘州城池図」に筆者が加筆。

2-6 瀘州市博物館蔵「瀘州老窖百年以上窖池群」(2005年) (参考文献 32)により作成。

2-7 参考文献 5) p. 10-11。

2-8 建造年代が古いだけでそれほど大きな価値はなく、連続使用時間が長い点が重要視されている。窖の中の良好の微生物環境を保つのに適した酒の生産周期を維持する必要があり、維持できなかった場合は微生物が減少・死滅し、微生物環境が著しく悪化してしまう。そのため、状態のいい古い窖の希少価値がとても高い。

2-9 明の詩人楊慎(1488-1559年)の「庵戲炅」:「花驄小市頻頻過, 落日凝光緩緩歸」。ここには楊慎の従弟である韓適普が瀘州の地方使に任命されたにも関わらず、公務を怠り、毎日のように小市を訪ねては、酒を飲んで、日没になってからゆっくりと凝光門(瀘州城の東南側にある門)を通して家に帰るような生活をしていると書かれている。

2-10 白酒はアルコール度数によって、「大酒」と「小酒」に分けられる。大酒のアルコール度数は一般的に20%以上であり、それ以下は小酒となる。そして曲酒は滋養などの効果がある「曲薬」を用いて成分調整を行った酒である。従って、「大曲酒」はアルコール度数20%以上で、「曲薬」を用いて成分調整を行った酒であり、現代の白酒の一般的な品種でもある。「小酒」はアルコール度数の低い、「曲薬」も入れてない(現代では小酒と呼ばれても一般的には曲薬が入っているが)生産が簡単な酒である。大曲酒製造に掛かる原料コスト、時間、技術などは小酒とは段違いのため、値段には大きな差がある。

2-11 参考文献 6) p. 98。

2-12 南宋人曹叔遠(1159-?)『陽江譜』(参考文献 57)に「街道以坊命名, 自北而南為一長街, 其坊五; 自東而西又為一長街, 其坊一」とある。ここは「(瀘州城)の街道は「坊」という名前がついていて、南から北へ一つ長い道路があり、その名は坊五, 東から西へも一つ長い道路があり、その名は坊一である」という意味である。

2-13 牌坊は中国の伝統的建築様式の門の一つである。形式は鳥居と共通する部分がある。中国は古くから街の重要な場所に牌坊を立てる習慣がある。

2-14 「瀘州城池図」(参考文献 56)、と 7)に瀘州档案館蔵「瀘州民国地図」(参考文献 33)を参考

に作成。

2-15 瀘州档案館蔵「瀘州民国地図(推定 1945 年頃)」(参考文献 33)、7)などを参考に作成。また本図作成時に参考とした「瀘州民国地図」は現代的な測量手法に基づいて作成した地図ではないため、道幅などの表現は正確でない可能性がある。

2-16 参考文献 4) p. 102。

2-17 参考文献 7) p. 212-213。

2-18 参考文献 7) p. 357。

2-19 瀘州市档案館所蔵档案である。

2-20 瀘州档案館蔵「瀘州市現状図(1964)」(参考文献 34)の一部に筆者が加筆。図に加筆した文字は原図に書かれた文字を読み取り日本語に訳したものである。表 1 の 1-5 番の工場の位置は現在の工場の位置と会社のヒヤリングによって判明したものである。

2-21 瀘州档案館蔵「瀘州市現状図(1964)」(参考文献 34)、表 1 「瀘州老窖百年以上窖池群」などを参考に作成。

2-22 周徳玉氏は 1969 年に老窖会社に入り、30 年近く酒造りの現場で働いていた。同氏によると、70 年代には 10 数人が 1 つの生産グループを構成し、酒造りを行った。生産過程はほぼ完全に人力であった。原料については市から決まった量が供給され、生産した酒も会社自身が販売することなく、全部市が決まった価額(計画価格)で買い上げる仕組みになっていたという。ヒヤリング実施した時間は 2013 年 8 月である。

2-23 参考文献 7) p. 212。

2-24 参考文献 4) p. 107。

2-25 参考文献 4) p. 188。

2-26 1990 年以前は 7) のデータ、1990 年後は 8) のデータを使用して作成。

2-27 2013 年 8 月に実施。

2-28 瀘州市档案館所蔵档案：「四川瀘州曲酒廠擴建工程概算表」(1984) (参考文献 35)。

2-29 瀘州市都市計画局「瀘州全体計画図」1985 年版(参考文献 36)より作成。

2-30 2013 年の筆者による現地調査では現在の羅漢鎮の生活区は数百から千人規模の宿舍と関連の施設があると確認している。

2-31 中国で国有会社を上場させる政策は 90 年代以降から実施された国有会社の経営システム改革政策の一つである。上場した国有会社は「国有控股企业(国有持株企業)」と呼ばれる。上場時の経営システム改革の仕方などにもよるが、老窖会社のように会社全体を株式化する場合、上場直後は国が会社の 100% の株を持つこととなる。

2-32 参考文献 9) p. 81。

2-33 中国証券監督管理委員会の指定情報公開サイト「巨潮資訊網」cninfo.com.cn の老窖会社公開報告による。

2-34 参考文献 9) p. 10。

2-35 2013 年 3 月瀘州老窖グループ企業文化部副主任李氏のヒヤリングによる。

2-36 ヒヤリング実施した時間は 2013 年 8 月である。

2-37 参考文献 9) p. 10。

2-38 2005 年瀘州市地図商業版より作成。

2-39 参考文献 5) p. 14。

2-40 2012 年 8 月の老窖会社企業文化部のヒヤリングによる。

2-41 参考資料 30) p. 1-2。

2-42 参考資料 30) p. 4。

2-43 参考文献 30) p. 13。

2-44 参考文献 30) p. 6, 11, 15。

2-45 國強：国窖大橋が開通されない謎——立ち退きの進行が遅いのが主原因，四川在線 2012 年 6 月 8 日の記事と熊騰：国窖大橋の竣工日が延期された，四川ニューズネット 2012 年 6 月 8 日の記事などの関連記事がある。

2-46 劉艶濤：瀘州老窖現代農業示範区＝一瓶の酒背後の農業転変，農民日報，2012. 5. 22 の報道を参照。

- 2-47 図3～図8の参照資料、2000年瀘州市商業版地図(参考文献37)、2005年瀘州市全体計画(参考文献38)、Googleマップの航空写真データ(2014年)を参照して作成。
- 2-48 参考文献39), p35-36により作成。
- 2-49 参考文献39), p8。
- 2-50 15.12.11, 電話によるヒヤリング。
- 2-51 「瀘州市興瀘投資グループ株式会社」HP、会社紹介による、
「http://www.lzxljt.com/jcws/about/200707/jcws_20070701174105.html」, アクセス日,
15.12.12。
- 2-52 「瀘州市興瀘投資グループ株式会社」HP、会社年表による、
「http://www.lzxljt.com/jcws/about/200704/jcws_20070429222252_7.html」, アクセス日,
15.12.12。
- 2-53 瀘州市興瀘投資グループ株式会社」HP、会社年表による
「http://www.lzxljt.com/jcws/about/200704/jcws_20070429222252_8.html」
「http://www.lzxljt.com/jcws/about/200704/jcws_20070429222252_10.html」, アクセス日,
15.12.12。
- 2-54 参考文献39, p8。
- 2-55 宜賓市統計局, 「2014年宜賓市主要経済指標および四川省GDP千億クラブの比較分析」による, 2015.2.4, 「<http://www.stats-yb.gov.cn/Item/5223.aspx>」, アクセス日, 15.12.13。
- 2-56 参考文献39), p48。
- 2-57 主に参考文献4)p.101, 102, 108~110, 会社ヒヤリング及び現地調査の情報により作成。
- 2-58 2-47の参照資料、現地調査の情報より作成。
- 2-59 住房制度改革は都市や鎮の住民の住宅問題を解決するための保障システムに関する改革制度である。主に昔のような会社(中国語「単位」)が従業員に家を提供する形から、国、会社(単位)、本人の三方が金を出し、個人の家を購入するシステムに変更する政策である。
- 2-60 ヒヤリングは2013年8月に実施。
-
- 3-1 『叙州府志』(参考文献58)に収録された「光緒21年宜賓城図」に筆者が加筆して作成。
- 3-2 参考文献4)p1。
- 3-3 Google地図2015年航空写真を基図に、「光緒21年宜賓城図」、現地調査のデータにより作成。
- 3-4 「真武山道教建築群」、国家重要文化財、文化財の紹介文によりと主な建物は明万暦元年(1573年)に建てられた。
- 3-5 参考文献13)p9。
- 3-6 参考文献14)p76。
- 3-7 参考文献14)15)59)の記載により整理作成。
- 3-8 宜賓民国(1943年)地図を元図に表3-1、『五糧液志』、『宜賓城街区図志』、『宜賓志歴史名城保護計画』を参考して作成。
- 3-9 台湾国史館所蔵「宜賓縣城廂図」(1948年)を元図に作成。
- 3-10 参考文献14)p90。
- 3-11 参考文献14)p224を参照して作成、小数点後は四捨五入。
- 3-12 参考文献14)p21。
- 3-13 「四川景盛グループ徳盛福九糧醸酒株式会社」のhp
「<http://deshengfu.1688.com/page/creditdetail.htm?spm=a2615.2177701.0.0.TiDVm0>」を参照、アクセス日2015.9.30。
- 3-14 「宜賓晩報」, 「宜賓非遺 活在宜賓」の記事の一部を日本語訳,
「http://ybw.newssc.org/html/2013-09/09/content_1919872.htm」, アクセス日2015.9.30。
- 3-15 宜賓市档案馆所蔵「1978年宜賓市街区図」(参考文献42)、参考文献14、現地調査の情報より作成。
- 3-16 参考文献14)p19。

- 3-17 参考文献 14)p104-107。
- 3-18 参考文献 13)p252-253。
- 3-19 宜賓市档案馆所蔵「1978 年宜賓市街区図」(参考文献 42)、参考文献 14、現地調査の情報より作成。
- 3-20 参考文献 14)p204。
- 3-21 参考文献 14)p22, p107 を参考。
- 3-22 参考文献 14)p25, p107 を参考。
- 3-23 生産大隊とは 1958 年から実施された農村人民公社時期に存在する農村の末端組織である。人民公社制度の実施前は「行政村」であった。大隊は直接農民の管理を行ったため、この時期の農民は独立した資産や生産工具などはなかった。
- 3-24 参考文献 14)p109-111 を参考。
- 3-25 参考文献 14)p109-111 を参考。
- 3-26 1997 年「宜賓市全体計画現状図」(参考文献 43)、参考文献 14)、現地調査の情報より作成。
- 3-27 中国経営新聞, 2014, 「五粮液のブランド価値が 735 億元突破、20 年連続食品業界で一位」の記事による, 「http://news.cb.com.cn/html/company_11_20740_1.html」アクセス日 2015. 10. 1。
- 3-28 2013 年「宜賓市全体計画要旨」(参考文献 44)p63, 2008 年中心市街地範囲を参考, その他参考文献 14)、現地調査などの情報より作成。
- 3-29 参考文献 14)p111 より引用。
- 3-30 「山東魯能グループ株式会社」は 2002 年成立した会社であり、住宅・商業不動産開発、エゴエネルギー供給を主な業務とした国有会社である。本部は北京にある。会社 HP 「<http://www.luneng.com/about/company.html>」を参考, アクセス日, 2015. 10. 3。
- 3-31 被ヒヤリング者は匿名希望のため、名前は記載できないが、被ヒヤリング者は 2003-2010 年で宜賓市都市計画局に勤めた方であり、魯能街区の分譲にも直接関わっていた。ヒヤリング時間は 2013 年 8 月。
- 3-32 BAIDU 地図(2015)を基図に、地図上「魯能」に関する情報、現地調査で得た情報により作成。
- 3-33 2013 年 8 月、筆者撮影。
- 3-34 図 3-5, 7, 8, 9, 10 の参考資料、BAIDU 地図(2015)のデータ、2013 年宜賓市全体計画要旨(参考文献 44)、五粮液北区計画図(参考文献 47)、酒都宜賓・五粮液文化特色街区計画図(参考文献 46)、現地調査の情報より作成。
- 3-35 「酒都宜賓・五粮液文化特色街区計画書」、華西都市報, 「五粮液文化特色街区建設開始」の報道「http://www.wccdaily.com.cn/epaper/hxdsb/html/2010-09/20/content_236851.htm」を参考, アクセス日, 2015. 10. 3。
- 3-36 新華ネット, 2012, 「四川宜賓空港が建設許可、名前は「五粮液空港」」の記事を参考, 「http://news.xinhuanet.com/yuqing/2012-05/24/c_123182662.htm」, アクセス日, 2015. 10. 5。
- 3-37 参考文献 19)などの関連論文がある。
- 3-38 ヒヤリング時間は 2013 年 8 月。
- 3-39 参考文献 44)p62。
- 3-40 株式会社業績公開資料:「宜賓五粮液株式会社 2014 年年度報告」, p24-25 のデータを参照して作成。
- 3-41 参考文献 48)p7。
- 3-42 宜賓市国有資産経営株式会社 HP, 会社の役割紹介ページによる, 「http://gzgs.yb.gov.cn/web/content.jsp?classId=5603&newsId=297258&site_id=null」, アクセス日, 2015. 10. 5。
- 3-43 参考文献 48)p7。
- 3-44 宜賓市統計局, 「2014 年宜賓市主要経済指標および四川省 GDP 千億クラブの比較分析」による, 2015. 2. 4, 「<http://www.stats-yb.gov.cn/Item/5223.aspx>」, アクセス日, 15. 12. 13。

- 3-45 参考文献 48)p34。
3-46 参考文献 14)p19-20, 22-25, 40-42, 46-53, 104-115 会社ヒヤリング及び現地調査の情報により作成。
3-47 参考文献 44)p64。「寸土寸金」は1寸(計量単位)の土地は1寸の金と同価である意味の熟語で、土地の価値が極めて高いという意味である。
3-48 図 3-12 の参考資料(注 3-34)、会社、市都市計画局のヒヤリングの情報より作成。
3-49 ヒヤリング時間は 2013 年 8 月。
3-50 参考文献 17)などの経済管理類の著作がある。

- 4-1 明代の塩の行商人が一番資本が厚い商人であると言われている。
4-2 参考文献 20)p86 を参考。
4-3 鄢銀輝：「仁懐は茅台にかわる？」, 2010, 貴州民族報, p2 を参考。
「<http://www.docin.com/p-1206126985.html>」, アクセス日 2015, 11, 01。
4-4 参考文献 21)p73 と参考。
4-5 白酒香りと味の種類によって香型と分類される。濃香型(注 2-1 も参照)と醬香型は 2 つ主流の種類である。香型が違う酒は製造工程も違いがあり、濃香型は一般的に一つの窖に付き年に 3 から 4 回新しい原料を入れ、発酵を行うが、醬香型は一般的に年に 1 回しか発酵を行わない。それによって醬香型は基本的に濃香型より生産量が低い。
4-6 参考文献 21)p8。
4-7 茅台酒文化城の展示資料、参考文献 21)p76-79, 参考文献 20)p106, 125 を参考。
4-8 参考文献 23)p33 より。
4-9 鄭珍(清代)：『田居蚕事录』より。1 石は約 60kg であり、2 万石で約 1,200 トンである。
4-10 参考文献 22)p22。
4-11 参考文献 20)p143 を参考。
4-12 参考文献 21)p138, 139, 143, 545 により作成。
4-13 『参考文献 21)p8-13, 20, 23, 29, 35, 38, 41, 46, 47, 94-97, 109, 120、茅台酒文化城展示茅台酒公司計画図(参考文献 49)、会社ヒヤリング、現地調査の情報により作成。
4-14 参考文献 21)p93-94 を参考。
4-15 参考文献 21)p94, 545 を参考。
4-16 参考文献 21)p129-131。
4-17 「大躍進運動：1958 年夏に始まった、毛沢東思想に基づく中国の急進的な社会主義建設運動。国内建設のための総路線、大躍進、人民公社の 3 つの目標を掲げた三面紅旗のスローガンで有名。「大いに意気込み、常に高い目標を掲げ、より多く、より早く、より良く、より経済的に社会主義の建設を進める」という「社会主義建設の総路線」が提唱された。この運動によって人民公社が組織され、生産の目標は限りなく高く設定された。しかし現実を無視した運動の結果は、農村部の疲弊ぶりをみれば明らかであった。この大躍進運動の悲劇的な結末は、59 年 8 月の中国共産党 8 期 8 中全会、いわゆる廬山会議での彭徳懐国防相らによる毛沢東批判、そして毛沢東の国家主席辞任につながってゆき、文革による毛沢東の復しゅうへの導火線になった。」, コトバンクより引用,
「<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A7%E8%BA%8D%E9%80%B2%E9%81%8B%E5%8B%95-180740>」, アクセス日 2015, 11, 01。
4-18 参考文献 21)p545 より引用。
4-19 (中国の)五カ年計画の全称は「中華人民共和国国民経済と社会発展五年計画綱要」、中国の国民経済計画の重要部分であり、長期計画に属している。主に国家の重大な建設項目と生産力分布と国民経済比率関係の計画である。1986-1990 年は 7 回の五カ年計画が実施された。
4-20 参考文献 21)p374 より引用。
4-21 参考文献 21)p374
4-22 参考文献 22)「茅台鎮示意図」(1991)、「茅台酒場分布示意図」(1991)、会社ヒヤリング、現地調査の情報により作成。

- 4-23 参考文献 21)p120。
4-24 ヒヤリング時間は 2015. 7。
4-25 参考文献 21)p118。
4-26 仁懷市都市全体計画(2008-2030)中心城区土地利用現状図(2008)(参考文献 50), 「茅台酒場分布示意図」(1991)(参考文献 20)、会社ヒヤリング、現地調査の情報により作成。
4-27 参考文献 21)p376-377。
4-28 2015 年 6 月、筆者撮影。
4-29 参考文献 21), p545-546
4-30 google 航空写真データ(2015)、貴州仁懷経済開発区全体計画(2013-2030)土地利用現状図(参考文献 51)、茅台酒文化城展示「茅台酒場計画図」(参考文献 49)、会社ヒヤリング、現地調査の情報により作成。
4-31 google 航空写真データ(2015)、貴州仁懷経済開発区全体計画(2013-2030)土地利用現状図(参考文献 51)、茅台酒文化城展示「茅台酒場計画図」(参考文献 49)、『茅台酒場志』(参考文献 20)に収録した「茅台酒場示意図」、会社ヒヤリング、現地調査の情報により作成。
4-32 参考文献 52)p4。
4-33 参考文献 52)p4。
4-34 参考文献 52)p31。
4-35 参考文献 52)p21 を参照して作成。
4-36 「特色産業鎮」は近代国が特色産業を發展させる政策から地方政府が生み出した一種の鎮を開発する形態の表現である。昔から当地にあった産業をその地方の特色産業として推進し、大規模な工業区と観光設備を整備するのが一般的な流れである。

5-1 「中国の特色ある社会主義の道とは、中国共産党の指導の下、基本的な国情に立脚し、経済建設を中心に 4 項目の基本原則（社会主義の道、人民民主専制、共産党の指導、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想）を堅持し、改革開放を堅持し、社会的生産力を解放し、發展させ、社会主義市場経済、社会主義民主政治、社会主義先進文化、社会主義調和社会、社会主義エコ文明の建設、個々人の全面的な發展の促進、全人民の共同富裕を徐々に実現し、富強、民主、文明、調和をかねた社会主義現代化国家を建設することである。」中国ネットより引用、
「http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2014-11/18/content_34118422.htm」, アクセス日 2015, 12, 15。

5-2 2013 年 8 月、筆者撮影。

5-3 2015 年 6 月、筆者撮影。

F1 『水經注』:南北朝時代北魏の地理学者酈道元の著作である。大きな河が流れる地区の自然及び経済地理について記述した書物である。

F2 『宋史・食貨志』: 朝廷の編纂により元至正五年(1345 年)に成立した正史である。

F3 参考文献 6)p. 90。

F4 『瀘縣志・食貨志』は、『瀘縣志』の一部であり、民国 27 年(1938)に王祿昌らにより編纂が完成した。食貨志は主に経済について記述した書物である。

F5 参考文献 4)p. 212-213。

F6 会社合併などの経緯は主に参考文献 6)p. 190-206 を参照。

F7 <http://www.lzljtfzx.com/xxgktp/>による。「瀘州第二中學」は市立中学であるが、老窖会社がかなりの教育資金を援助しているため、2008 年から「瀘州老窖天府中學」に改名した。会社は中学の運営には関与していない。

- F8 「青島市国民経済と社会発展公報」, 2012 による。
- F9 baidu 地図航空写真(2015)を基図に、参考文献 24)p87 「青島市道路詳図(1949)」, p31 「青島市区図(1964)」, p88 「青島市街区簡図(1985)」, p89 「青島中心城区交通線図(1993)」を参照して作成。工場位置は表 F-2 の参考資料を参照。
- F10 各工場登録住所, 青島国際ビール祭 HP、青島ビールに関する紹介, 平度市 HP、青島市第三ビール工場に関する紹介, baidu 地図青島ビール工場に関する位置情報などを参考して作成。
「http://www.qdbeer.cn/content/2010-07/04/content_8420557.htm」,
「<http://www.pingdu.gov.cn/html/2015-07/1507301652854236.html>」, アクセス日 15. 11. 5。
- F11 青島ビール会社 HP、青島市人民政府国有資産監督管理委員会 HP を参考。
「<http://www.tsingtao.com.cn/gyqdpj/gsjj/264920.shtml>」,
「<http://www.qdgz.gov.cn/n28356025/n30142499/120312132300138874.html>」 アクセス日 15. 11. 5。
- F12 青島国際ビール祭 HP、青島ビールに関する紹介, 「http://www.qdbeer.cn/content/2010-07/04/content_8420557.htm」, アクセス日 15. 11. 5。
- F13 baidu 地図航空写真(2015) より。青島ビール会社第二工場について、baidu 百科によると工場敷地面積が 15 万 m²であり、毎年の生産量は 45 万トンである。
「<http://baike.baidu.com/link?url=81cJOpD8TmM5wKhHuhVSkKSV0bqd1Pj2HXr5GUQpd0UfsxEoGgRkD0w6ToohGjpSE4PhHc8dXpLAmXYSYWBqla>」, アクセス日 15. 11. 5。
- F14 越城区統計情報ネット: 「2014 年越城区国民経済と社会発展公報」により,
「http://tjj.sxyc.gov.cn/art/2015/7/22/art_3943_254472.html」, アクセス日 15. 11. 6。
- F15 参考文献 27)による。
- F16 参考文献 25)p16
- F17 Baidu 地図の航空写真(2015)を基図に、現地調査の情報、会社のヒヤリング情報、航空写真の工場位置に関するデータにより作成。
- F18 紹興市政府 HP、都市歴史に関する内容を参考。
「<http://www.sx.gov.cn/col/col17/index.html>」, アクセス日 15. 11. 6。
- F19 ヒヤリング時間は 2015. 6。
- F20 浙江新聞: 「紹興平原の河は全て鑑湖水系に属し、陳橋驛先生は紹興黄酒に力添え」, 2014,
「<http://zjnews.zjol.com.cn/system/2014/07/03/020119871.shtml>」, アクセス日 15. 11. 6。
- F21 ヒヤリング時間は 2015. 6。塔牌紹興酒株式会社は紹興市内での規模が比較的大きい私営の黄酒会社である。ヒヤリングによると商品の一部は日本向けの規格で生産し、販売している。
- F22 グーグルマップ航空写真を基図に、会社 HP、baidu マップ位置情報を参考して作成、施設の表示は大まかな位置である。
- F23 洋河新区管理委員会 HP、洋河会社 HP、Baidu 地図データなどを参考して作成、施設の表示は大まかな位置である。
- F24 写真は郎酒会社より提供。

参考文献：

書籍、論文など：

- 1) 朱俊逸：工業空間格局演進對城市空間形態影響的研究, 2011, 山東建築大學修士論文
- 2) 韓朝：包頭市城市土地利用研究, 2006, 西安建築科技大學修士論文
- 3) 中野茂夫：企業城下町の都市計画—野田・倉敷・日立の企業戦略, 筑波大學出版會, 2009
- 4) 楊柳：產業空間集聚與區域經濟發展：基於白酒產業的分析, 四川人民出版社, 2009
- 5) 前瞻產業研究院：中國白酒業界市場需求投資戰略規劃分析レポート, 2013
- 6) 楊辰：可以品味的歷史, 瀘州老窖企業文化中心, 2009
- 7) 瀘州市地方誌編纂委員會：瀘州市志, 方志出版社, 1998
- 8) 瀘州統計局：瀘州統計年鑑, 中國統計出版社, 1995—2005
- 9) 瀘州老窖年鑑編委會：瀘州老窖年鑑 1991—2005, 瀘州老窖集團企業文化中心, 2007
- 10) 龔萍：瀘州老窖集中發展區域建設經驗和發展模式的探討, 2011, 決策資訊
- 11) 黃元斌：基於產業集群的中國“白酒金三角”建設討論, 2010, 商業經濟
- 12) 陳文：瀘州博物館藏酒文物與瀘洲酒史淺論, 1993, 四川文物
- 13) 宜賓城街區圖志編纂辦公室：宜賓城街區圖志, 2009, 四川科學技術出版社
- 14) 《五糧液志》編委會：五糧液志, 2011, 四川科學技術出版社
- 15) 凌受勛：宜賓酒文化史, 2012, 中國文聯出版社
- 16) 宜賓市地方志辦公室編：宜賓市志, 1992, 新華出版社
- 17) “中國企業成功之道”五糧液案例研究組編著：五糧液成功之道, 2011, 機械工業出版社
- 18) 五糧液史話編寫組編：五糧液史話, 1987, 巴蜀書社
- 19) 歐陽クンクン：公共施設企業の名義を使用することの根拠と法律規制について＝「五糧液空港」の企業の名義を使用することから, 2013. 1, 上海政法學院報, 28 卷第 1 期
- 20) 黃萍：『貴州茅台酒業研究(1728-1956)』, 2010, 四川大學博士論文
- 21) 劉和鳴主編：中國貴州茅台酒廠有限責任公司志, 2011, 方志出版社
- 22) 茅台酒廠編：茅台酒廠志, 1991, 科學出版社出版
- 23) 貴州年鑑社：貴州年鑑, 2002, 貴州人民出版社
- 24) 市街地範圍は青島市檔案館編：『青島地圖通鑒』, 2002, 山東地圖出版社
- 25) 屠劍虹：紹興街巷, 2006, 西泠印社出版社
- 26) 中國產業情報ネット：2015-2020 年中國啤酒行業調查及未來發展趨勢研究報告, 2014
- 27) 前瞻產業研究院：2014-2018 年中國黃酒業界生產銷售需要と投資予測分析レポート, 2015
- 28) 東方ネット：2014 白酒行業白皮書, 2015

会社業務資料や報告、政府計画書、紙媒介地図、檔案館資料など：

- 29) 瀘州市都市計畫局：瀘州市全體計畫說明書, 2005
- 30) 瀘州酒產業集中發展區域株式會社業務資料, 酒產業集中發展區域報告書, 2012

- 31) 四川省政府：四川省瀘州老窖現代農業示範區全體計畫，2012
- 32) 瀘州市博物館藏：「瀘州老窖百年以上窖池群」（2005年時点）
- 33) 瀘州檔案館藏：「瀘州民國地圖」
- 34) 瀘州檔案館藏：「瀘州市現狀圖(1964)」
- 35) 瀘州市檔案館所藏檔案：「四川瀘州曲酒廠擴建工程概算表」（1984）
- 36) 瀘州市政府：「瀘州全體計畫圖」1985年版
- 37) 「2000年瀘州市地圖商業版」，成都地圖出版社
- 38) 瀘州市政府：2005年瀘州市全體計畫
- 39) 株式會社業績公開資料：「瀘州老窖株式會社 2014年年度報告」，2015
- 40) 台灣國史館所藏「宜賓縣城廂圖」(1948年)
- 41) 宜賓市檔案館所藏「1978年宜賓市街區圖」
- 42) 宜賓市共產青年團事務局檔案室所藏「1990年宜賓市地圖」
- 43) 宜賓市政府：「宜賓市全體計畫現狀圖」（1997）
- 44) 宜賓市政府：「宜賓市全體計畫要旨」（2013-2030）
- 45) 宜賓市政府：「宜賓志歷史名城保護計畫」（2008）
- 46) 宜賓市政府：「酒都宜賓・五糧液文化特色街區計畫圖」（2012）
- 47) 五糧液グループ會社業務資料：五糧液北區計畫圖(2013-2020)
- 48) 株式會社業績公開資料：「宜賓五糧液株式會社 2014年年度報告」，2015
- 49) 茅台酒文化城の展示資料：茅台酒場計畫圖(2015-2030)
- 50) 仁懷市政府：仁懷市都市全體計畫(2008-2030)中心城區土地利用現狀圖(2008)
- 51) 貴州省政府：貴州仁懷經濟開發區全體計畫(2013-2030)土地利用現狀圖
- 52) 株式會社業績公開資料：「貴州茅台酒株式會社 2014年年度報告」，2015

史料類：

- 53) 南北朝時代北魏の地理学者酈道元：水經注
- 54) 宋史・食貨志，1345年
- 55) 民國27年(1938)に王祿昌修編：瀘縣志・食貨志
- 56) 直隸瀘州志(清朝道光年間(1820-1850))
- 57) 南宋人曹叔遠(1159-?)：陽江譜
- 58) 林志茂等修編：叙州府志(清光緒年間)
- 59) 史志志辦公室修編：戎城史志

ネットの電子地図、会社関連HP、電子メディアなど：

- 60) baidu 地図, <http://map.baidu.com>
- 61) google 地図, <https://www.google.co.jp/maps>
- 62) sogou 地図, <http://map.sogou.com/>

- 63)瀘州老窖グループ株式会社 hp, <http://www.lzlj.com>
- 64)宜賓五粮液グループ株式会社 hp, <http://www.wuliangye.com.cn>
- 65)貴州茅台グループ株式会社 hp, <http://www.china-moutai.com>
- 66)瀘州市興瀘投資グループ株式会社 hp, <http://www.lzxlt.com>
- 67)瀘州老窖天府中學 hp, <http://www.lzljtfzx.com>
- 68)宜賓市統計局 hp, <http://www.stats-yb.gov.cn>
- 69)四川景盛グループ徳盛福九糧醸酒株式会社
hp, <http://deshengfu.1688.com/page/creditdetail.htm>
- 70)山東魯能グループ株式会社 hp, <http://www.luneng.com>
- 71)青島国際ビール祭 hp, <http://www.qdbeer.cn>
- 72)平度市 hp, <http://www.pingdu.gov.cn>
- 73)青島ビール会社 hp, <http://www.tsingtao.com.cn>
- 74)越城区統計信息ネット hp, <http://tjj.sxyc.gov.cn>
- 75)紹興市政府 hp, <http://www.sx.gov.cn>
- 76)コトバンク, <https://kotobank.jp/>
- 77)baidu 百科, <http://baike.baidu.com>
- 78)中国産業情報ネット, <http://www.chyxx.com>
- 79)農民日報, szb.farmer.com.cn/nmrb
- 80)宜賓晩報, <http://ybw.newssc.org>
- 81)中国経営新聞, <http://news.cb.com.cn>
- 82)華西都市報, <http://www.wccdaily.com.cn>
- 83)新華ネット, <http://news.xinhuanet.com>
- 84)Sohu 財經ネット, <http://business.sohu.com>

付録：表1 瀘州都市と酒造業発展変遷表

時代	時期／年	都市関連	酒造業関連
漢朝	BC151年	「江陽」設置諸侯国の一つであり、2547戸の人口があった注 F1)	
梁朝	535-546年	「瀘州」が設置された	
隋朝	607年	「瀘州郡」が設置された(郡は当時の行政単位で日本の「県」レベル)	
唐朝	618-907年	農業、手工業が発達し始め、主に麦、金、麻、布などを産出した	
宋朝	960-1279年	城壁が建設された「西南会要」と呼ばれ、全国 26 の商税収入が高い都市の一つであった	「小酒」、「大酒」を産出し、酒税が商税の 33.6% を占めていた注 F2)
明朝	1368-1644年	全国 32 の「商業大都会」として有名であった	最初の大曲酒造り酒造工房が出現し、酒の品質が一気に高まった
	1324年		瀘州で現代「瀘州老窖」の元になる酒、最初の大曲酒「甘釀曲」が醸造成功された
	1425年		「窖藏」瀘州大曲酒の技術が出現し、窖による酒の醸造が確立された 「酒楼」が酒を醸造し、食事と酒を提供した。酒楼は当時瀘州城内に数多く存在した 4つの規模の大きい酒楼は役所が経営しており、それ以外は民営の小規模な酒楼であった注 F3)
	1573年		「舒聚源」酒造工房が建設された 瀘州で最初の専門化した大曲酒造り酒造工房である
清朝	1636-1911年	成都、重慶、万県と並ぶ四川 4 大港の一つで、水運貿易が極めて盛んであった	大曲酒造りが酒造業の主体となり、酒造工房の数も増えた
	清初	「移民入川」政策により人口が大幅に増加し、都市が更に発展した	
	1869年		1729年に広東から移民した温家が「舒聚源」工房の一部の窖を買い取り、 「温永盛」工房を立上げた
	清末		「温永盛」、「春和榮」など十数軒の大曲酒の酒造工房があり、生産した酒は四川の東ないし省外まで運出されていた 1879年で大曲酒の生産量が 10 トンを超えた注 F4)
民国	1912 - 1949年	日中戦争時期は全国的商業都市となった。幾つかの道路は人力車通行できる為の整備が行った	大曲酒が国際的な榮譽を獲得し、日中戦争時期は飛躍的に発展した しかし戦争後は経済崩壊などの影響で一気に衰退した
	1915年		温永盛酒造り工房の「300年大曲酒」がパナマ太平洋国際博覧会金賞を獲得した
	1920 - 1930年	元瀘州城内の主要道路は人力車道化の整備を実施された注 F5)	
	1930 - 1935年	元瀘州城内の西門付近の「花園路」、「宝成路」が整備された注 F5)	
	日中戦争の時期 (1937 ~ 1945年)	四川が全国を中心となり、瀘州も戦略物資の中継港の一つとして大幅に発展した 元南門外の「平遠路」が近代化整備され、新しい埠頭も建設された注 52)	酒造業が飛躍的に発展し、酒窖の数が毎年増加した。大曲酒の酒造工房数が 36 軒まで増え、最高毎年 1800 トンを生産した 生産量は全国的一位であった
	日中戦争以降 (1945-1949年)		インフレが酷く、酒税も著しく高くなり、盛んだ酒造業が一気に衰退した。一部の酒造工房は生産停止状態に陥った

中華人民共和国	計画経済時期 (1949～1980年)	都市の発展は緩慢であり、市街地の変化が少ない	36間の民営の酒造工房が一つの国有会社として改造され、酒の生産能力もある程度回復した
	1949年12月	瀘州が解放された	国家が倒産されたの酒造工房の買取りを始め、経営している私営の酒造工房の「社会主義改造」も開始した
	1950年		酒造業危機を打開すべく、共同経営の方針を取った 「温永盛曲酒醸造廠」：温家家族が経営していた酒造工房によって成立したものである 「瀘州市曲酒醸造協同組合」：「春和榮」工房が中心に結成したものである 「瀘州市義中曲酒醸造協同組合」：その他の瀘州城周辺の酒造工房で結成したものである 以上の3社が協同経営していた 「瀘州市定記曲酒醸造廠」は私営のままの状態を維持した 生産量は460トンまでに回復した
	1952年		「第一回全国評酒会」で「瀘州老窖特曲」が中国の「八大銘酒」の一つとして認定された
	1953年		「瀘州市国营酒廠」：国有資本により買取った酒造工房により成立したものである
	1954年		「四川省專賣会社国营第一酒廠」：「四川省專賣会社国营第一酒廠」と「瀘州市国营酒廠」の合併により成立したものである
	1955年		「公私共營瀘州市曲酒廠」：上記の五つの酒廠の合併により成立したものである この段階で瀘州市内酒廠が一つになった
	1959年		
	1960年		「瀘州市曲酒廠」：「公私共營瀘州市曲酒廠」が完全に国有化され、改名したものである注F6)
	1961年	瀘州市内の初めての橋、「沱江一橋」が建設された	
	市場経済時期 (1980～現在)		
	市場経済過渡期 (1980～1994年)	省直轄市に昇格し、行政地位が増大して、都市の建設も加速した 道や街区の整備なども実施され、中心半島の南部に新しい中心市街地が形成された	老窖会社が徐々に自主販売権を拡大し、発展していた 90年代頭に「瀘州老窖」のブランドを正式に使用し、1994年に上場を果たした それにより計画経済から市場経済への過渡を完成した この時期では酒の生産量の増加が迅速であり、都市に対しての経済的影響力も相当に強くなった
	1982年		老窖会社が初めて3%の自主販売権を獲得し、完全な計画経済経営から脱出した
	1983年	省直轄市に昇格された	
	1985年	新たな都市計画(1985年版)が制定されブランド品の酒を都市の3つの基幹産業の一つに指定した	酒の生産量増迅速的に増加し始めた ブランド性を高める為に会社名を変更し、包装工場の建設も行った
	80年代後半	現在でも瀘州市内で一番交通量の大きい主要道路、「江陽路」が建設された	国家が2800万元(約5.2億円)を出資して第三工場(羅漢鎮工場)を近代化の生産基地として整備し、包装工場も建設された
	1990年		「瀘州市曲酒廠」から「瀘州老窖酒廠」に改名した
	1990-90年代半ば	新中心市街地形成「江陽区」が形成した	
	1994年		会社が上場し、「瀘州老窖株式会社」に改名した
	市場経済適応期 (1994～2006)	都市の加速建設の時期であり、龍馬潭区などの新しい街区が形成された 「歴史文化名城」に選定されたことで、都市の文化宣伝(特に酒文化)に力を入	老窖会社が上場後、利潤50%前後の増加を毎年維持した。1573広場の整備や新本部の建設など、会社の施設の建設も大々的に行った。2000年から会社がグループ化され、不動産や証券取引などにも

		れた時期であり、酒をテーマとした公園整備や観光開発なども行った	踏み出した 国際的企業に成長を遂げた時期である
	1994年	「歴史文化名城」に選定された	会社が株式会社に体制変化をした
	1996年		温永盛酒造工房とその周辺の古い窖が「国家級文化財」として認定された
	1997年	新たな都市計画(1997年版)が制定され、酒造業が都市の一番コアの産業として指定された	会社の出資で、「国窖 1573 広場」を整備し、羅漢鎮生産基地周辺に大規模包装工場を建設した
	90年代末	龍馬潭区の開発開始と「百子図文化広場」の整備、酒をテーマとした景観整備都市の範囲が迅速に広がり、酒をテーマとした整備が始まった	
	2000年		「瀘州老窖グループ株式会社」に改名して、グループ化経営を始めた
	2005年	2006年に建設決定が決まった「瀘州酒産業集中発展区域」に対応すべく、新しい都市計画(2005年版)が制定された	会社の出資で、「瀘州老窖營銷網點指揮中心」(新営業本部)が建設された
	市場経済進展期 (2006年～現在)	市街地の拡大が更に急速になり、特に2005年の都市計画では本格的に中心半島、龍馬潭区、羅漢鎮、茜草半島を一体化するような道路計画、用地計画を制定しており、その計画を着々と実施している	「瀘州酒産業集中発展区域」の建設により、酒造業が新たな段階に入り、同時に第1、2、3次産業に影響を与えている
	2006年		四川省出資で、「瀘州酒産業集中発展区域」の建設が始まった 総投資額120億元(約2.2千億円)を超える超大規模な建設であり、老窖会社と瀘州市に、巨大な影響をもたらした
	2008年	「泰安長江大橋」が開通された	老窖会社は2008年から毎年600万元を地方教育を支援する為に拠出する教育發展基金の設立を決定した、その他当地農村に住んでいる特別貧困対象にも支援基金の設立も決定した注F7) 老窖会社が公共事業に出資し始めた
	2009年	「酒谷大道」が開通された(老窖会社が道路建設の為に住民移住に7万㎡の土地と2千万元の道路建設資金を提供)急速に道路と橋梁を建設した、建設をかなり強引に進めた為、住民移転問題などが発生しており、老窖会社に対しての不満もネットの報道などで見られる	
	2010年	「沱江一橋」が拡幅された	会社の出資で、「瀘州紅高粱現代農業開發株式会社」を設立した、 それに伴い、政府の出資で周辺の農村を酒の原料基地として整備し始めた 当地の農村の構成、農業の形態に直接にも影響を与え始めた
	2012年	小市エリア周辺の道路を一級道路として改修し始めた 「国窖大橋」が部分的に開通された	

補章 1 山東省青島市のビール醸造業と都市の関係

青島市は山東省東南部に位置する港湾都市であり、市区人口は 363.9 万人である(2012 年)^{注 F-8)}。昔は日本の租界があり、都市に関しては日本でも多くの研究がある。ビール醸造業は中国の酒造業の中で白酒醸造業に次ぐ規模のある産業であり、中国でのビールは日本と同様に大衆に親しみのある飲み物である。

青島啤酒株式会社(以下:青島ビール会社)は 1903 年ドイツとイギリスの商人が共同出資で立ち上げた「日耳曼啤酒公司青島股份公司」から発展した会社であり、中国で最も歴史のあるビール会社の一つでもある。1945 年で会社の経営権は中国に接收され、現在は国有会社である。会社 HP などによると 2014 年会社のブランド価値は 950.16 億元であり、中国のビール業界では一位である。世界 500 強の会社でもある^{注 F-11)}。青島ビール会社は相当の実力のある会社ではあるが、青島市は中国の古くからの沿岸都市で都市の力も強い、では青島ビール会社は市内のどこで分布しているか見てみよう。

表 F-2 で示したい通り、現在青島ビール会社は青島市周辺に 5 つの工場建設している。第一

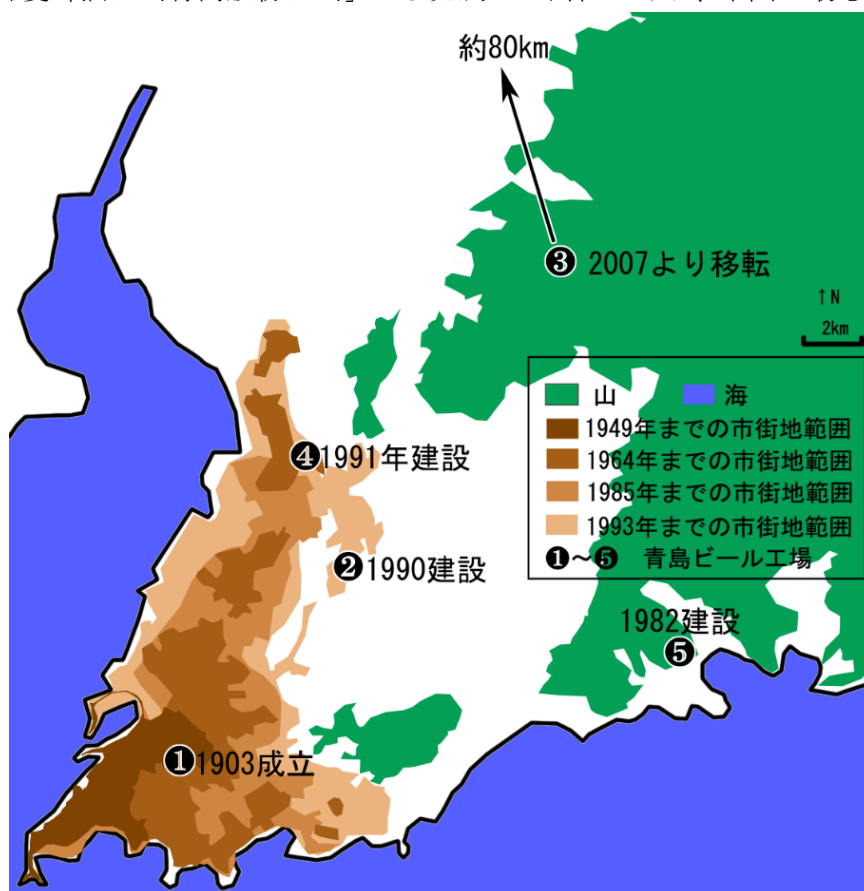


図 F-1 青島市街地範囲と青島ビール会社工場分布図^{注 F-9)}

表 F-2 青島ビール会社青島市周辺工場一覧表^{注 F-10)}

工場名	建設年代など	現住所
第一工場	1903	登州路 56 号
第二工場	1990	李滄区台柳路 602 號
第三工場	2007 年より移転	平度市経済開発区
第四工場	1991	永平路 6 号南門
第五工場(原嶗山ビール)	1982 建設、1992 年委託で青島ビール会社に管理	嶗山区沙子口

工場は1903年の前近代からの工場で、現在は会社の本社と博物館なども併設していて、生産規模は小さくなっているという。他の工場は基本的に90年代後に建設したものであり、生産規模も10万トン以上でそれなりの規模がある^{注F-12)}。しかし、本稿が取り上げた3つの白酒醸造業の都市の工場規模と比べて、面積が小さいであることが見られる(図F-2)。

また工場位置についてだが、現在の青島市の市街地は極度に拡大していて、図F-1の白い部分もほぼ全部市街地で埋まっているが、工場建設時の市街地範囲(図F-1の1993年までの市街地範囲を参考)を見てみると、当時の都市の周辺部に建設されていたことがわかる。そして第三工場については、隣の市である平度市の経済開発区に移転して大規模の工場を建て替えたという経緯である。現在の第三工場は青島ビール会社の最大の生産量のある工場である。また工程に関しても白酒醸造業のように原酒生産と後工程生産施設で分けることもなく、普通に一つ一つの工場内で酒を生産している。

以上のこのから見ると、青島の酒造業は都市の各所(主に周辺部)である程度の規模の工場を造り、大規模の工場については政策や地価などの原因で近辺の特恵政策がある経済産業開発区を選択する「都市全体分散型」であると考えられる。



図F-2 青島ビール会社第二工場航空写真^{注F-13)}

補章 2 浙江省紹興市の黄酒(紹興酒)醸造業と都市の関係

紹興市は浙江の省轄都市であり、長江デルタ地帯の南部分に位置し、都市内では水系が豊富である。有名な水郷都市であり、魯迅の故郷としても知られている。市区(越城区)の人口(2014)は約 408 万人であり^{注 F-14}、人口規模の大きい都市である。

酒造業については、日本でかなり人気のある黄酒(紹興酒)の産地として名を馳せている。黄酒は日本では有名であるが、中国ではそれほど大きい産業ではない。2013 の黄酒の規模以上企業数は 87 社であり^{注 F-15}、白酒業界の 1423 社(2014 年データ)やビール業界の 477 社(2014 年データ)と比べて業界規模の違いは明確である。紹興市内では大きな黄酒会社として古越竜山紹興酒株式会社(国有)、會稽山紹興酒株式会社(国有)、塔牌紹興酒株式会社(私有)などがあり、他にも十数社比較的規模の小さい黄酒会社が存在している状態である。

紹興市は紀元前 490 年から越国の都として都市が建設されて、都市が 2500 年以上の歴史を持

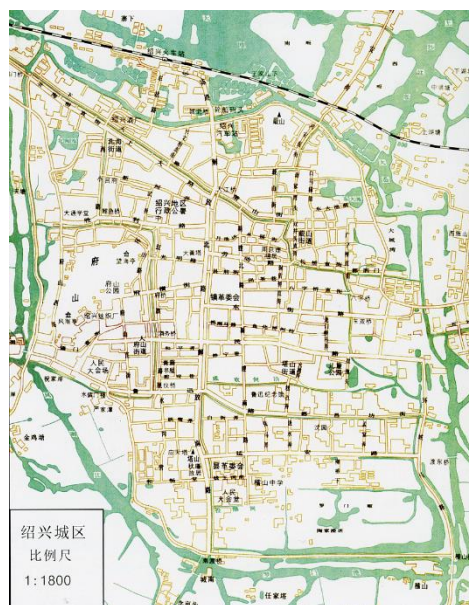


図 F-3 紹興城区図(1980 年)^{注 F-17}

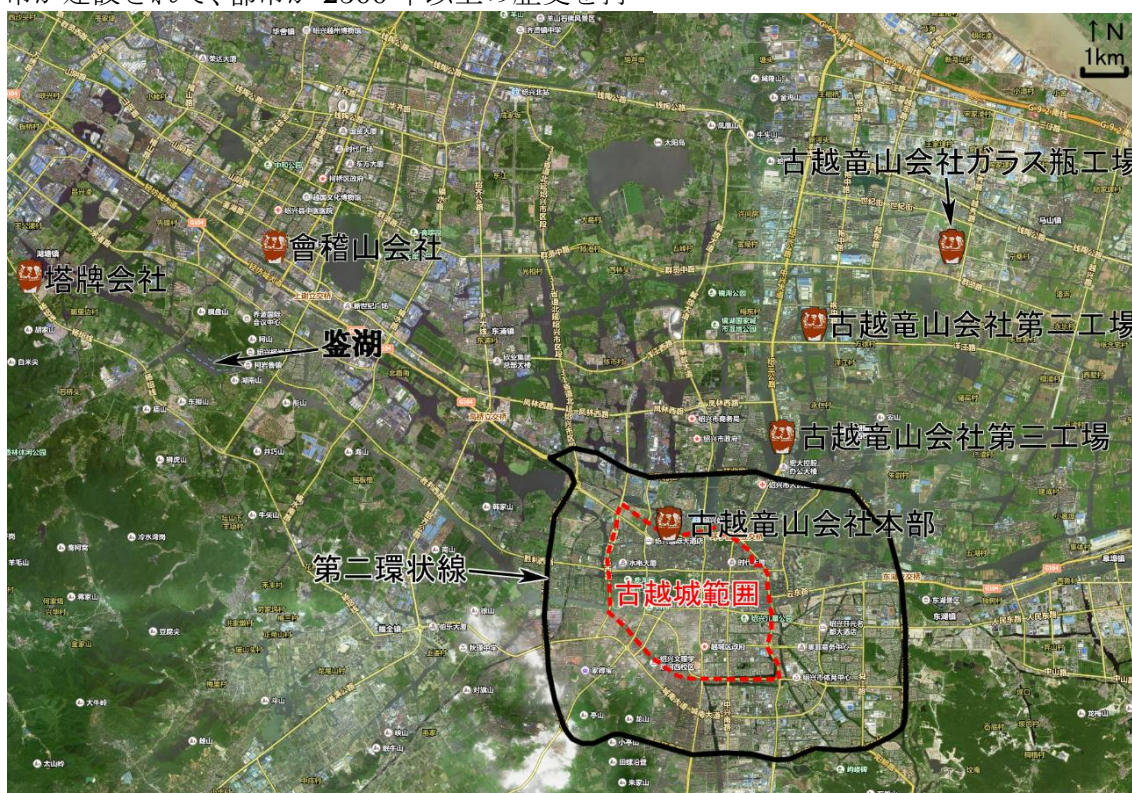


図 F-4 紹興市街地と黄酒工場分布図^{注 F-17}

っていると言われている^{注F-18)}。その後、前近代においては、城の範囲は徐々に拡大され、最終的には図 F-4 の赤い線で示した範囲となった。この古越城の範囲は紹興市の都市構造に大きな影響を与えたと考えられる。『紹興県地名志』に収録された紹興城区図(1980年)を見てわかるように、80年代初の紹興市の市街地範囲も基本的に古越城の範囲と同じくらいであった。現在は越城区全体が紹興市の市区の範囲として定めているが、第二環状線の内部が主な中心市街地の範囲と認識されている。

酒造業の空間分布を見てみると、第二環状線内部では古越竜山会社の本部があるが、現地調査ではその本部は既に酒を生産する工場がなく、黄酒博物館と事務施設に建て替えている状態である。会社の宣伝部の方へのヒヤリングによると、90年代頃は(現在本社のあるここは)工場もあり、酒を生産していた。その後政府の方針により工場は郊外に移転されたという^{注F-19)}。図 F-4 を見てみると第二環状線以外は古越竜山会社の第二、第三、そしてガラス瓶(酒の瓶)の工場が分布していることが見られる。他の酒造会社については基本的に鉴湖の周辺に分布しているのがわかる。鉴湖は紹興の母湖とも呼ばれ、紹興市内で流れる水は基本的に鉴湖の水系と言われている^{注 F-20)}。紹興酒の生産も鉴湖の水が重要とされ、黄酒会社が鉴湖の上流の方に位置する大きな原因であると考えられる。

図 F-4 で示した通り、現在鉴湖の上流にある程度の規模の工場を持つ塔牌紹会社の社長郭氏へのヒヤリングでは「政府の工場郊外化の方針の実施を見て、こちら(現在の工場)の土地を購入し、工場を移転させた。移転前はもっと中心市街地に近い場所で酒を生産した。現在の工場は川辺に位置し、取水がとても便利であり、水も以前と比べて汚染が少ない」という^{注 F-21)}。

紹興市の黄酒の生産施設の空間分布を見ると、工場が全体的に都市の周辺部に移転している、つまり「都市郊外化型」であると考えられる。この構造は現在国が工場郊外化を推進している中、最も一般的であると考えられる。

補章3 その他の白酒醸造業の企業と所在地都市の関係

補章3.1 劍南春会社と四川省綿竹市

劍南春会社は表1-1のランキングでは現在白酒業界6位の会社であり、前近代から白酒醸造業が発達した都市でもあった。

図F-5で示した通り、現在劍南春会社の施設分布は中心市街地で前近代の酒造工房から改修した工場が一つあり、そしてちょっと離れた所に小規模な後工程生産施設が設けられている。都市の周辺部に行くと会社本部や後工程生産施設、大規模な原酒生産施設と貯蔵施設が建設されている状況である。

この構造は市内で分業生産する「都市全体展開型」に当てはめると考えられる。



図F-5 綿竹市街地と劍南春会社施設分布図注F-22)

補章 3.2 洋河会社と江蘇省宿遷市

洋河会社は表 1-1 のランキングでは現在白酒業界 4 位の会社であり、生産量や従業員規模の大きい酒造会社でもある。

現在の洋河会社の生産施設は「洋河新区」に集中している、「洋河新区」は 2011 年宿遷市新城區として、元洋河鎮から「洋河新区」が設立されました白酒産業を中心とした工業団地であり、新区設立後産業クラスターとしての整備が加速し、大規模な工場整備が行っている注 F-23)。

現在洋河新区では図 F-6 で示した通り、洋河会社の大規模な原酒生産から後工程施設があり、また他の会社の物流などの生産サポート施設もある。

この施設分布は「都市内都市型」が形成しつつあると考えられる。



図 F-6 宿遷市街地と洋河会社施設分布図注 F-23)

補章 3.3 郎酒会社と四川古藺県二郎鎮

郎酒会社は表 1-1 のランキングでは現在白酒業界 5 位の会社であり、生産する「郎酒」は前近代からの名酒でもある。郎酒会社は 2010 年頃に私有化され、現在は民営企業となっている。

私有化以降では二郎鎮全体を「特色産業鎮」としての再開発が進んでおり、現在工場施設は鎮全体に展開している。

写真 F-2 二郎鎮全景写真では鎮の中央の一部を除いて、郎酒会社の工場区鎮全体に展開している様子が見られる。

これは「都市全体占拠型」に該当すると考えられる。



写真 F-1 郎酒会社工場区一部夜の景観^{注 F-24)}



写真 F-2 二郎鎮全景写真^{注 F-24)}

謝辞

本論文「中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係：瀘州、宜賓、茅台を主な事例として」は、私が2009年から6年余りの日本留学の期間で完成したものです。本論文の完成にあたって、本当に多くの方々にお世話になりました。ここでは皆様に心から御礼を申し上げたいと思います。

先ず何よりも感謝しなければならないのは、修士課程からずっと指導教員として私の世話をしてくれた藤川昌樹先生です。M2から藤川先生の研究室に入りましたが、あの頃は修論の研究テーマもほとんど定まっていなかった状態でした。そこで修士論文のテーマ選択から、まさに研究者としての第一歩から博士論文の完成までずっと面倒を見てきたことを心から感謝致します。自分はとても勤勉の学生だったとは言えなかったし、性格も結構わがままの所があった為、学習面、生活面共に藤川先生に多くの迷惑を掛かりました。しかし、先生は親切かつ丁寧に色々教えてくれました。研究のことに限らず、物事の考え方、人生のことなども多く教わられました。これからは先生から教わったことを胸に、先生から貰った「根本」と書かれた茶碗と一緒に、それを研究の「根本」、人生の「根本」として新しい道を歩いて行きたいと思います。

また、学位審査において貴重なアドバイスをいただきました審査委員会の野中勝利先生、雨宮護先生、有田智一先生、藤井さやか先生にも深甚なる謝意を表す次第です。先生らのお陰で論文の全体的な構造がより深められたと思います。

さらに今は既に退職しましたが、私の研究生とM1の時の指導教員を担当して下さった小場瀬令二先生にも御礼を申し上げます。私が日本に来てばかりの頃、右も左も分らなかった状況下で色々お世話になりました。

また、長く所属していた藤川研の皆様にも多大な協力をいただきました。特に先輩である江さんと劉さんから多くのアドバイスを貰いました。また後輩の妻くんと恵くんは一緒に各地の写真撮りの旅を付き合ってくれたこともお礼申し上げます。

そして論文の調査に協力して下さった政府機関や会社などの方々にも深く感謝致します。

最後に、いろいろ協力してくれた家族に感謝します。留学の資金の多くを提供してくれた父と経済面だけでなく、生活面と研究面で色々相談してくれた母に深く感謝致します。両親のお陰で金を心配せずに、学業に専念することができました。

2016年1月

曾 天然 日本 つくばにて